

北目長田遺跡

第3次発掘調査報告書

1998

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

きた め なが た
北 目 長 田 遺 跡

第 3 次 発 掘 調 査 報 告 書

平成10年 3 月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



調査区全景空中写真（南から）



S G 702 河川跡遺物出土状況 (手前西)



S G 702 河川跡出土遺物

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、北目長田遺跡の第3次調査成果をまとめたものです。

北目長田遺跡は山形県の北西部、米どころとして名高い庄内平野の北端に位置し秋田県との境にある、飽海郡遊佐町に所在します。北には秀峰「鳥海山」が聳え、麓に広がる穀倉地帯は、鳥海山系を源流とする中小河川によって潤されます。また西は日本海に面しており、豊かな海山の幸に恵まれたところです。

この度、一般国道345号道路改築工事に伴い、工事に先立って北目長田遺跡の第3次発掘調査を実施しました。

調査では、奈良・平安時代の集落跡が確認されました。掘立柱建物跡や、畑の畝跡と考えられる溝状遺構群が数カ所で検出され、河川跡からは多数の墨書土器が出土しました。また、海水から塩を得るために使われた製塩土器や、漁網に用いる土錘なども見られました。これらの遺構や遺物は、古代の人々の暮らしぶりに思いを馳せてくれるに十分なものがあるでしょう。

近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。これらの埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務といえます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成10年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木場清耕

例 言

1 本書は、平成9年度一般国道345号道路改築工事に係る「北目長田遺跡」の第3次発掘調査報告書である。

2 調査は山形県教育委員会の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3 調査要項は下記の通りである。

遺 跡 名	北目長田遺跡 (A Y Z K N)	遺跡番号	平成3年度登録
所 在 地	山形県飽海郡遊佐町大字北目字長田		
調 査 主 体	財団法人山形県埋蔵文化財センター		
調 査 期 間	平成9年4月1日～平成10年3月31日		
現 地 調 査	平成9年5月6日～平成9年11月20日		
調 査 担 当 者			

調査第二課長	野尻 侃
主任調査研究員	尾形 與典
調査研究員	伊藤 元 (調査主任)
嘱託職員	豊野 潤子
嘱託職員	飯塚 稔

4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県庄内支庁建設部道路計画課、遊佐町教育委員会、庄内教育事務所等関係機関に協力いただいた。また出土遺物について、井上喜久男氏（愛知県陶磁資料館）から御教示いただいた。ここに記して感謝申し上げる。

5 本書の作成・執筆は、伊藤 元、豊野潤子が担当した。編集は尾形與典、須賀井新人、菅原哲文、豊野潤子が担当し、全体については野尻 侃が監修した。

6 委託業務は下記の通りである。

遺構写真実測については、(株)日本テクニカルセンターに委託した。

理化学試料分析については、(株)パリノ・サーヴェイに委託した。

7 出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡 例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

S B…掘立柱建物跡 S K…土坑 S G…河川跡 S D…溝跡・溝状遺構
S P…ピット S X…性格不明遺構 E B…掘立柱建物跡の各柱穴
R P…土器・土製品 R W…木製品 R M…金属製品 R Q…石製品

2 遺構番号は、現地調査段階での番号を、そのまま報告書での番号として踏襲した。

3 土層観察においては、遺跡を覆う基本層序をローマ数字（I～IV）で表し、遺構の埋積土等については「F」に算用数字を付して区別した。

4 報告書執筆の基準は下記のとおりである。

（1）調査区概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。

（2）グリッドの南北軸はN-44°-Wを測る。

（3）遺構実測図は、1/20・1/40・1/50・1/80・1/100・1/160・1/400縮尺で採録し、各々にスケールを付した。

（4）遺構実測図・土層断面図中における水系レベル標高の単位はmである。

（5）遺構実測図・土層断面図中において、土器はp、礫石はs、木材はwで表示し、s・wについては、それぞれ網目・綾目のスクリーントーンで表示した。

（6）本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物図版とも共通のものとした。一部、遺物番号と登録番号を併せて掲載している。

（7）遺物実測図・拓影図は、原則的に1/4で採録しているが、一部の大型土器は1/6、陶磁器は1/2で採録し、各々にスケールを付した。遺物図版については、1/3を基本としているが、一部1/2・1/6・1/8で掲載したものについては、各々に表示した。

（8）遺物実測図中の古代土器については、須恵器は断面黒ベタ、赤焼土器は断面白抜き、黒色土器は内面半分に黒スクリーントーンで表示した。

（9）土器拓影図で、器表面の拓本は断面左側に表した。

（10）遺物観察表中において、()内数値は図上復元による推定値を、[]内数値は残存値を示している。

（11）遺構覆土の色調の記載については、1997年版の農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に拠った。陶磁器観察表中の色調についても参照した。

目 次

I	調査の経緯	
1	調査に至る経過	1
2	調査の経緯	1
II	遺跡の立地と環境	
1	地理的環境	2
2	歴史的環境	2
III	調査の概要	
1	調査の概要	4
2	遺跡の層序	5
3	遺構と遺物の分布	5
IV	検出された遺構	
1	掘立柱建物跡	11
2	土坑	14
3	溝状遺構群	19
4	河川跡	24
V	出土した遺物	
1	土器	27
2	陶磁器	30
3	土製品・石製品・木製品・金属製品・銭貨	54
VI	総 括	59
	報告書抄録	62

付図 北目長田遺跡遺構配置図（第1次・第2次・第3次合成）

表

表1	調査工程表	4	表7	陶磁器観察表	49
表2	出土土器観察表(1)	45	表8	墨書集成(1)	52
表3	出土土器観察表(2)	46	表9	墨書集成(2)	53
表4	出土土器観察表(3)	47	表10	土製品・石製品・木製品・ 金属製品・銭貨観察表	58
表5	出土土器観察表(4)	48			
表6	出土土器観察表(5)	49			

挿 図

第1図	遺跡位置図	3	第18図	土坑出土遺物(2)	33
第2図	調査概要図	4	第19図	土坑出土遺物(3)・ 溝跡出土遺物(1)	34
第3図	基本層序	6	第20図	溝跡出土遺物(2)・ 河川跡出土遺物(1)	35
第4図	遺構配置図	7	第21図	河川跡出土遺物(2)	36
第5図	遺物分布図	9	第22図	河川跡出土遺物(3)	37
第6図	S B 1掘立柱建物跡	12	第23図	河川跡出土遺物(4)	38
第7図	S B 2掘立柱建物跡・ S D 231溝跡	13	第24図	河川跡出土遺物(5)	39
第8図	土坑(1)	16	第25図	河川跡出土遺物(6)	40
第9図	土坑(2)	17	第26図	河川跡出土遺物(7)	41
第10図	土坑(3)	18	第27図	河川跡出土遺物(8)	42
第11図	溝状遺構群(1)	20	第28図	製塩土器(1)	43
第12図	溝状遺構群(2)	21	第29図	製塩土器(2)・陶磁器	44
第13図	溝状遺構群(3)	22	第30図	墨書集成(1)	50
第14図	溝状遺構群(4)・S G 10河川跡	23	第31図	墨書集成(2)	51
第15図	S G 702河川跡 出土遺物垂直分布図	25	第32図	土製品・石製品	55
第16図	包含層出土土器	31	第33図	木製品(1)	56
第17図	掘立柱建物跡出土遺物・ 土坑出土遺物(1)	32	第34図	木製品(2)・金属製品・銭貨	57

図 版

巻頭図版1	調査区全景空中写真		図版6	S K 459土坑検出状況他	
巻頭図版2	S G 702河川跡 遺物出土状況(上) 出土遺物(下)		図版7	S K 378土坑検出状況他	
図版1	遺跡近景・遠景		図版8	溝状遺構群検出状況他	
図版2	作業風景・基本層序他		図版9	S G 702河川跡土層断面他	
図版3	S B 1掘立柱建物跡検出状況他		図版10~20	出土土器(1)~(11)	
図版4	S B 2掘立柱建物跡検出状況他		図版21	製塩土器・陶磁器他	
図版5	S K 250土坑検出状況他		図版22	土製品・石製品・木製品(1)	
			図版23	木製品(2)・金属製品・銭貨	
			図版24	北目長田遺跡出土炭化材	

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

遊佐町北西部に位置する宮田・富岡・北目・山崎などの各地区一帯には、庄内高瀬川や月向川に流れに沿って平安時代を主とする遺跡が数多く分布している。これまで、山形県教育委員会や山形県埋蔵文化財センターによりほとんどの遺跡で発掘調査が行われてきた。

本遺跡でも、平成2年度の秋から遺跡の分布や保存状況・範囲などの確認を目的とした詳細な分布調査を県教育委員会が継続的に実施してきた結果、東西560m・東北210mの範囲に広がる平安時代の集落跡であることが確認された。そして、平成6・7年度には、県営ほ場整備事業によりやむを得ず削平される部分について、財団法人山形県埋蔵文化財センターが主体となって、緊急発掘調査を行っている（『山形県埋蔵文化財センター調査報告書』第24・31集）。

今回の3次調査は、一般国道345号道路改築工事を原因としている。当初、今回の調査は国道345号の西側6mの側道建設予定部分(3,300m²)に限って行うことが計画されていた。しかし、工事方法の変更のため、県庄内支庁建設部道路計画課・県教育庁文化財課などの関係機関との間で協議を重ねた結果、側道建設予定部分の他に、現345号東西両側の路肩部分も調査の必要があると判断され、当初計画の倍の6,600m²について調査を行うことになった。それに伴い、調査期間も平成9年5月6日から同11月20日までに変更された。

2 調査の経緯

平成9年4月23日、庄内支庁にて国道345号に係る遺跡発掘調査の打ち合わせ会を開催した。国道345号の工事とも絡み、庄内支庁建設部道路計画課で工事施工業者への発注が完了するまで当初計画していた345号の西側6m幅区域の調査を進めることにした。5月6日に調査事務所を設置し、現地調査を開始した。調査区の位置・内部の区画などを示すグリッドは、ほ場整備時の基準と平行にし、X軸は西から東にA～E、Y軸は、北から南に-7～119として、A-1グリッド（以下、A-1Gというように表記する）というように表記した。

7月24日、国道345号の工事施工業者が決まり、庄内支庁を交え三者で今後の調査の進め方について打ち合わせを行った。その結果、国道345号の西側は中央の農道をはさんで南側をA区、北側をB区とし、345号の東側については中央の道路をはさんで北側をD区、南側をE区とし、調査の終了した区域から順次引き渡しを行い、仮路盤を作ることにした。また、調査を行っている区域については片側交互通行を行い、引き渡し終了後の工事期間は現場での調査を休みにすることとした。以下にその後の調査を列記しておく。

8月4日A調査区東側3mの表土除去を行い調査に入り、同29日引き渡しを行った。9月8日B区の東側3mの表土除去を行い調査を再開。9月30日同区の調査を終了し引き渡しを行った。10月6日～9日にかけてC区、10月13日～24日にかけてD区、11月4日～11月20日にかけてE区の調査を行い、11月20日に現場事務所を撤収した。なお、9月25日、11月19日に調査成果を公表するための調査説明会を開催した。

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

北目長田遺跡は、遊佐町の中心街から北西へ約3kmの水田地帯に位置する。遊佐町は、山形県の北西部に広がる庄内平野の北端にあり、北に「出羽富士」と称えられる鳥海山を望む。西は日本海に面し、吹浦漁港や西浜海水浴場がある。海岸に沿ってのびる庄内砂丘では、メロンの栽培が盛んに行われているほか、平野部では柿や梨などの果樹も多くみられる。

庄内地方は海洋性の気候で、一日の気温差が小さい。日本海から吹きつける季節風により内陸と比べ、夏は湿度が低いが、冬は北西の強風となって地吹雪をおこす。そのためスギなどの屋敷森のある家々をよく見かける。

本遺跡の所在する高瀬地区一帯は、近年の県営ほ場整備事業により土地改良された地域で、鳥海山の南麓に広がる肥沃な穀倉地域である。遺跡は庄内高瀬川右岸の氾濫原に立地し、標高5.5mを測る。この辺りは「遊佐海岸低地」といわれる潟湖性の低湿地で、砂・礫・泥炭を含むたいへん軟弱な地盤となっている。水田耕作土には、地下水位を高く保つ細粒強グライ土壌が多く分布しており、そのほか河川による水成堆積の灰色低地土が認められる。

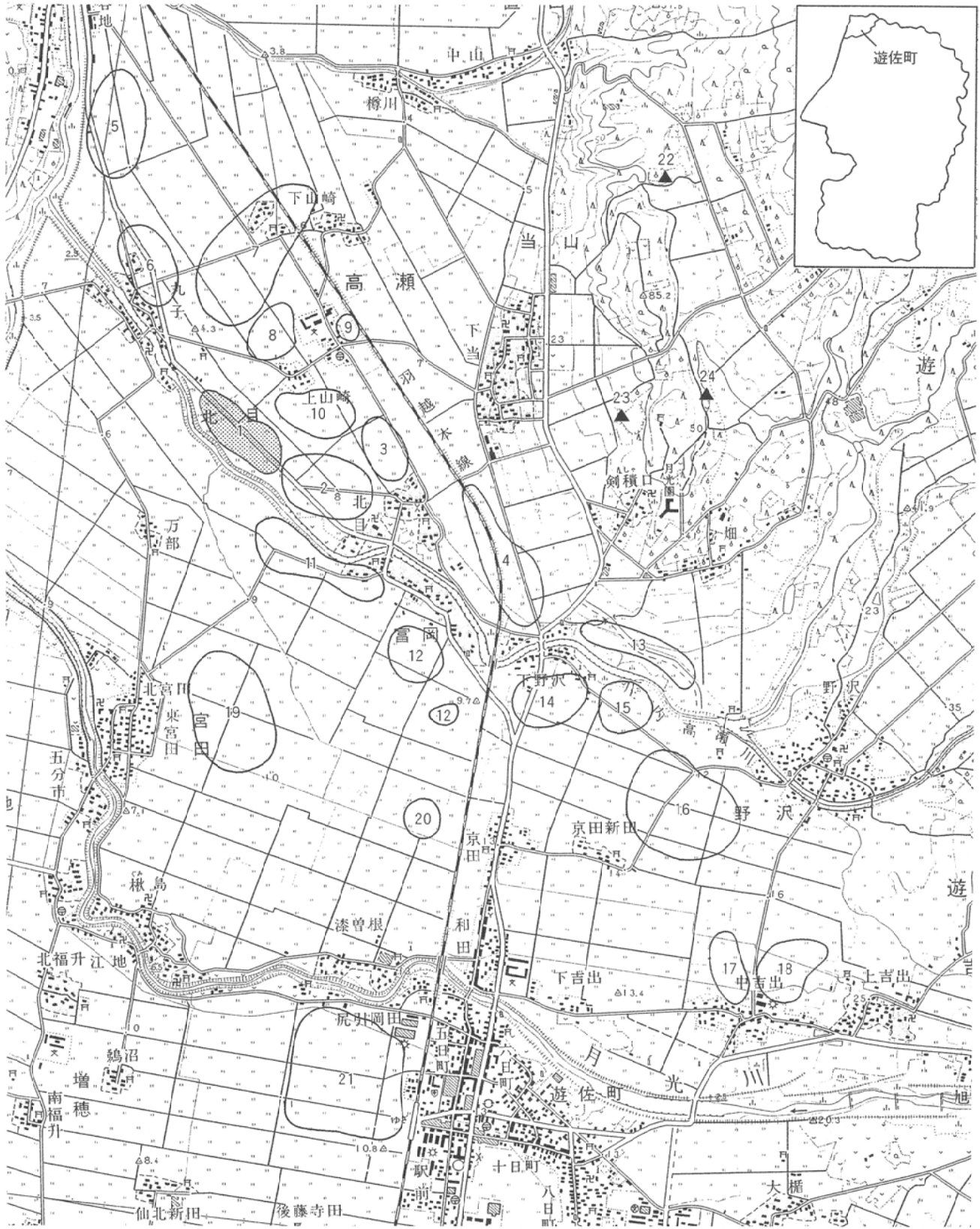
庄内高瀬川流域には、数多くの遺跡が確認されている。現在では、水田耕作などのため削平を受けだぶ平坦化されているが、かつては河川の流路に沿って形づくられた自然堤防や後背湿地などの起伏ある地形が明確な形で残っていたと推測できる。

2 歴史的環境（第1図）

遊佐町管内ではこれまでに170カ所以上の遺跡が確認されており、県内でも有数の遺跡密集地である。この中で、本遺跡を含め、平安時代を主とする集落跡については、20を超える遺跡が発掘調査されている。高瀬川沿いに限っても、本遺跡のほかに、上高田遺跡、木戸下遺跡、宮ノ下遺跡、大坪遺跡等が連続して分布している。

これまでの調査の結果、これらの遺跡のほとんどは9世紀から10世紀にかけて継続していることが確認されている。このことは、酒田市や八幡町なども含めた飽海郡域の遺跡に共通する在り方である。つまり、9世紀に入って、この地域の様相が一変したことになる。これは、当時の律令政府が推し進めた古代東北の開拓と関わっていると推定される。712年の「出羽国」建国以降、国府や城柵の設置・移転によって、この地域に対する政府の支配が拡大または縮小していく。これらの集落はその過程の中で存在したものである。特に、本遺跡より南方約8kmに位置する「城輪柵跡」は、出羽国井口の国府に比定され、周辺集落と密接な関係を保っていたと考えられる。遊佐町の遺跡のなかでも、緑釉・灰釉陶器と地鎮のための特殊埋設遺構を検出した下長橋遺跡、板材列を伴う掘立柱建物跡の小深田遺跡、灰釉陶器・墨書土器のまとまりと京への貢進を示す木簡が出土した大坪遺跡等、官衙関連の性格を推定できる内容を持っている。

今回の調査においては、河川跡出土の土器様相から、本遺跡の年代観がこれまでより若干遡る可能性が指摘されるため、管内でも早い段階の集落跡といえるであろう。



1. 北目長田遺跡 (1994・1995・1997) 2. 横待遺跡 (1994・1995) 3. 堂田遺跡 (1994) 4. 宮ノ下遺跡 (1995) 5. 筋田遺跡 (1992) 6. 野瀬遺跡 7. 中田浦遺跡 (1992)
 8. 上山崎遺跡 9. 田中遺跡 10. 地藏田遺跡 11. 木戸下遺跡 (1994・1996) 12. 上高田遺跡 (1994・1996・1997) 13. 道中A・B遺跡 14. 石田遺跡 (1992) 15. 宅田遺跡 (1982)
 16. 大坪遺跡 (1990・1994) 17. 三田遺跡 18. 袋鈴遺跡 (1991) 19. 木原遺跡 (1992・1993) 20. 古屋敷遺跡 21. 小深田遺跡 (1988) 22. サナミ坂窯跡 23. 剣電神社西窯跡
 24. 剣電神社東窯跡

※ () 数字は発掘調査年

第1図 遺跡位置図 (国土地理院発行2万5千分の1地形図「吹浦」を使用)

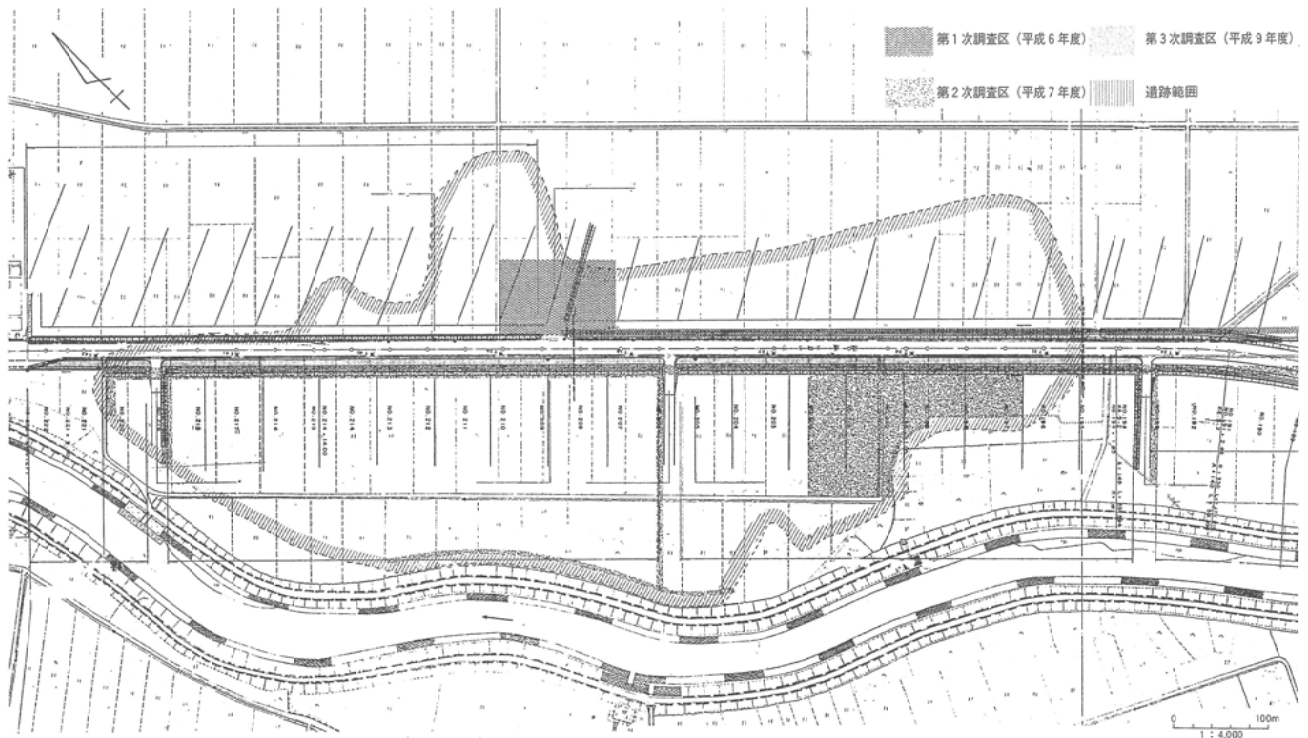
Ⅲ 調査の概要

1 調査の概要

今回の調査は、北目長田遺跡の中央を南北に走る国道345号の東西両側6,600㎡を調査対象区として実施した。A調査区からE調査区の順に、重機により表土を除去し、面整理作業を繰り返しながら遺構の検出を行い、遺構精査に入った。その間、適宜遺構平面図・断面図の作成や写真撮影など記録作業にあたった。この作業が終わった時点で各調査区ごとに空中撮影による撮影実測を行った。下記の表1にA調査区からE調査区までの調査工程をまとめた。

表-1 調査工程表

		5月	6月	7月	8月	9月			10月	11月
A 調査区	調査区布掘り						C D 調査区	調査区布掘り		
	重機導入							重機導入		
	グリッド設定							グリッド設定		
	粗掘り							粗掘り		
	面整理(遺構検出)							面整理(遺構検出)		
	遺構精査							遺構精査		
	記録							記録		
	写真実測(委託)							写真実測(委託)		
	調査区引き渡し							調査区引き渡し		
B 調査区	調査区布掘り						D 調査区	調査区布掘り		
	重機導入							重機導入		
	グリッド設定							グリッド設定		
	粗掘り							粗掘り		
	面整理(遺構検出)							面整理(遺構検出)		
	遺構精査							遺構精査		
	記録							記録		
	写真実測(委託)							写真実測(委託)		
	現地説明会							現地説明会		



第2図 調査概要図 (S=1:4,000)

2 遺跡の層序

今回の調査では、遺跡範囲の真ん中を北西－南東に走行している国道345号に沿って、その両側を全長625mの平行線形に発掘している。調査区一帯はこれまでのほ場整備事業などにより、上層部の大部分は以前に削平を受けた形跡が見られる。

遺構検出面であるⅣ層上面の標高は、検査区の北端域で4.70m、南端域は5.90mを測り、地表面からの深さは50～60cmである。掘立柱建物跡2棟が検出され最も遺構が集中しているB区南端部の53～58Gでは標高5.50～5.60mであった。

基本的な層序はⅠ～Ⅳ層に捉えることができた。しかし、南北に長い調査区域のためか土色については若干の相違が見られる所もあることから、4カ所の観察地点の層序をⅠ～Ⅳとa～dを用いて表示した。Ⅰ～Ⅱ層は第1次調査のⅠ層に相当し、耕作土及び水田基盤層である。概ねシルトであるが、場所によっては締まった砂質シルトが見られる。Ⅲ層は第1次調査のⅡ層に相当し、須恵器・赤焼土器などの多量の包含が認められた。面整理の段階で約70箱の遺物が出土している。全体的にシルトと言えるが、調査区北部は低湿地のため軟弱な粘質土層となっている。調査区南部は随所で攪乱されている。

河川跡が検出されたE区の76～78Gでは、その一帯の中でも、Ⅲ層の粘性のある土壤が認められた。この地区は遺跡範囲の北東部にあたり、第1次調査で指摘された旧河道の一部である可能性も否めない。また、溝・土坑で、覆土中に一次堆積と考えられない火山灰の混在が認められた。これまでの調査によって十和田aテフラと同定されており、今回確認された火山灰も土器の様相などから十和田aと考えられる。

3 遺構と遺物の分布

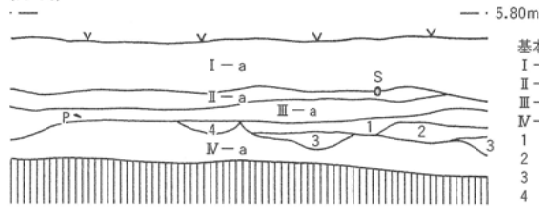
検出された遺構は、第4図に示したとおりである。調査区南北625mの中には、遺構の密集する区域と、希薄な区域がある。遺構の密集する区域は、A-7～5G、A～B-33～40、A～D-53～68G、A～D-80～90Gと大きく4つの区域に分けることができる。

掘立柱建物跡は53～58Gにかけて2棟検出された。また、1次・2次調査でも検出された溝状の遺構群は、7つのまとまりが確認できた。詳しくは後述するが、3～4時期の変遷が認められる。溝跡に隣接、あるいは重複する形で円形や隅丸方形を呈する土坑も検出され、多量の土器片が出土したものもある。また、B調査区とE調査区に2つの河川跡が検出された。E調査区のSG702からは墨書土器が約60点、その他砧や皿などの木製品などが出土している。

遺物は、種別では土製品・木製品・金属製品が、その中で主体となる土器は土器師・黒色土器・須恵器・赤焼土器・製塩土器が出土し、その器形は坏・蓋・甕・壺・瓶などがある。包含層(Ⅲ層)から破片数で40,650点、遺構内からは10,707点が出土した。第5図においてその出土状況を遺構配置図と併せて表示した。包含層から出土した遺物の70%は赤焼土器で、次いで須恵器が15%をしめる。器形別では、坏が全体の51%をしめる。それらは、第5図からも分かるように、遺構の密集する区域での出土量が多い。また、1次・2次調査でも出土した製塩土器も多数出土し、SK648からは破片数で1,553点が出土している。

III 調査の概要

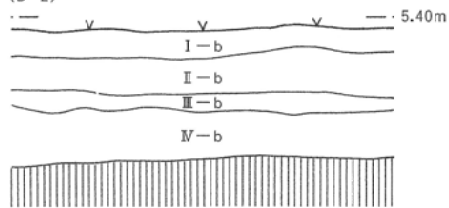
基本層序A
(A-78)



基本層序 A-78

I-a	10Y R 4/3	にぶい黄褐色シルト (耕作土)
II-a	10Y R 3/3	暗褐色シルト
III-a	10Y R 3/1	黒褐色シルト
IV-a	10Y R 5/3	にぶい黄褐色微砂質シルト
1	10Y R 4/2	灰黄褐色粘質シルト (10Y R 5/3 にぶい黄褐色シルトがまだら状に混入)
2	10Y R 3/4	暗褐色粘質シルト (10Y R 5/2 灰黄褐色粘質シルトがまだら状に混入)
3	7.5 Y R 4/2	灰褐色粘土
4	10Y R 3/2	黒褐色粘質シルト (10Y R 4/3 にぶい黄褐色シルトが粒状に混入)

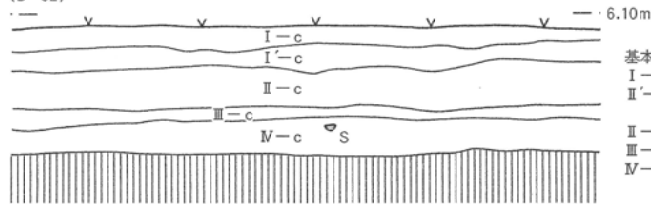
基本層序B
(D-2)



基本層序 D-2

I-b	10Y R 3/3	暗褐色微砂粘質シルト (耕作土)
II-b	10Y R 4/3	にぶい黄褐色砂礫壤土 (極大礫をふくむ)
III-b	10Y R 4/2	灰黄褐色微砂粘質土
IV-b	10Y R 5/3	にぶい黄褐色微砂粘質シルト

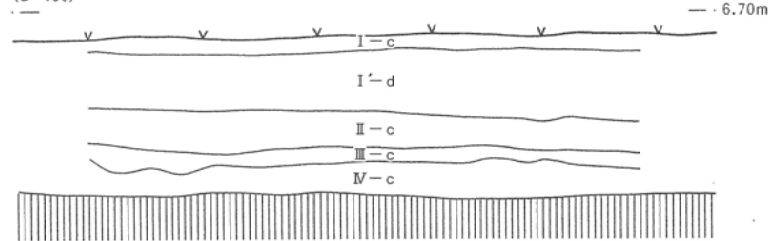
基本層序C
(D-52)



基本層序 D-52

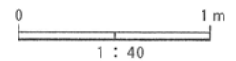
I-c	10Y R 3/4	暗褐色シルト (耕作土)
I'-c	10Y R 5/3	にぶい黄褐色砂質シルト
II-c	10Y R 4/2	灰黄褐色砂質シルト、10Y R 4/5 褐色シルトがまだら状に混入
III-c	10Y R 4/3	にぶい黄褐色シルト
IV-c	10Y R 3/3	暗褐色シルト (遺物包含層)
V-c	10Y R 5/4	にぶい黄褐色シルト

基本層序D
(D-100)

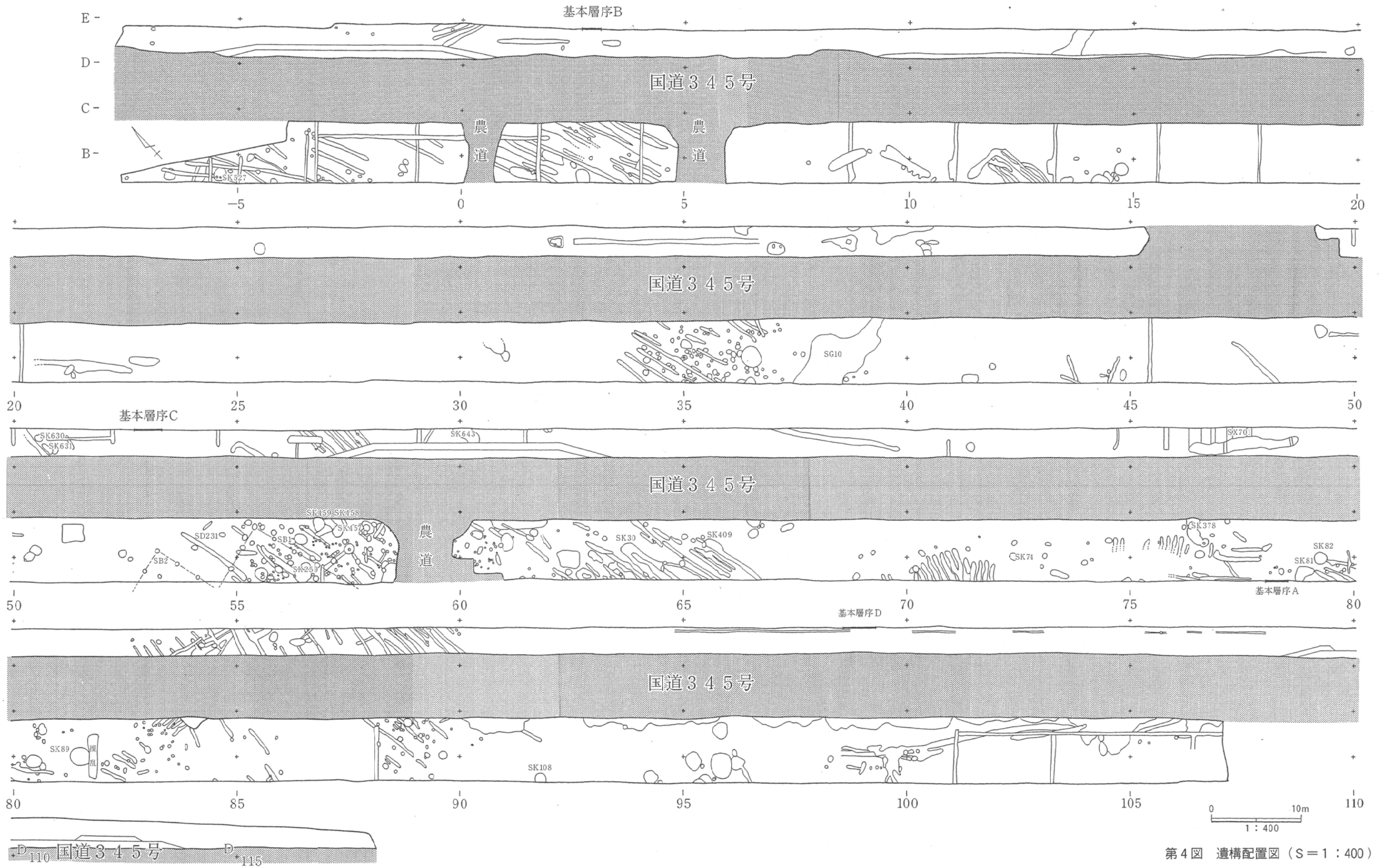


基本層序 D-100

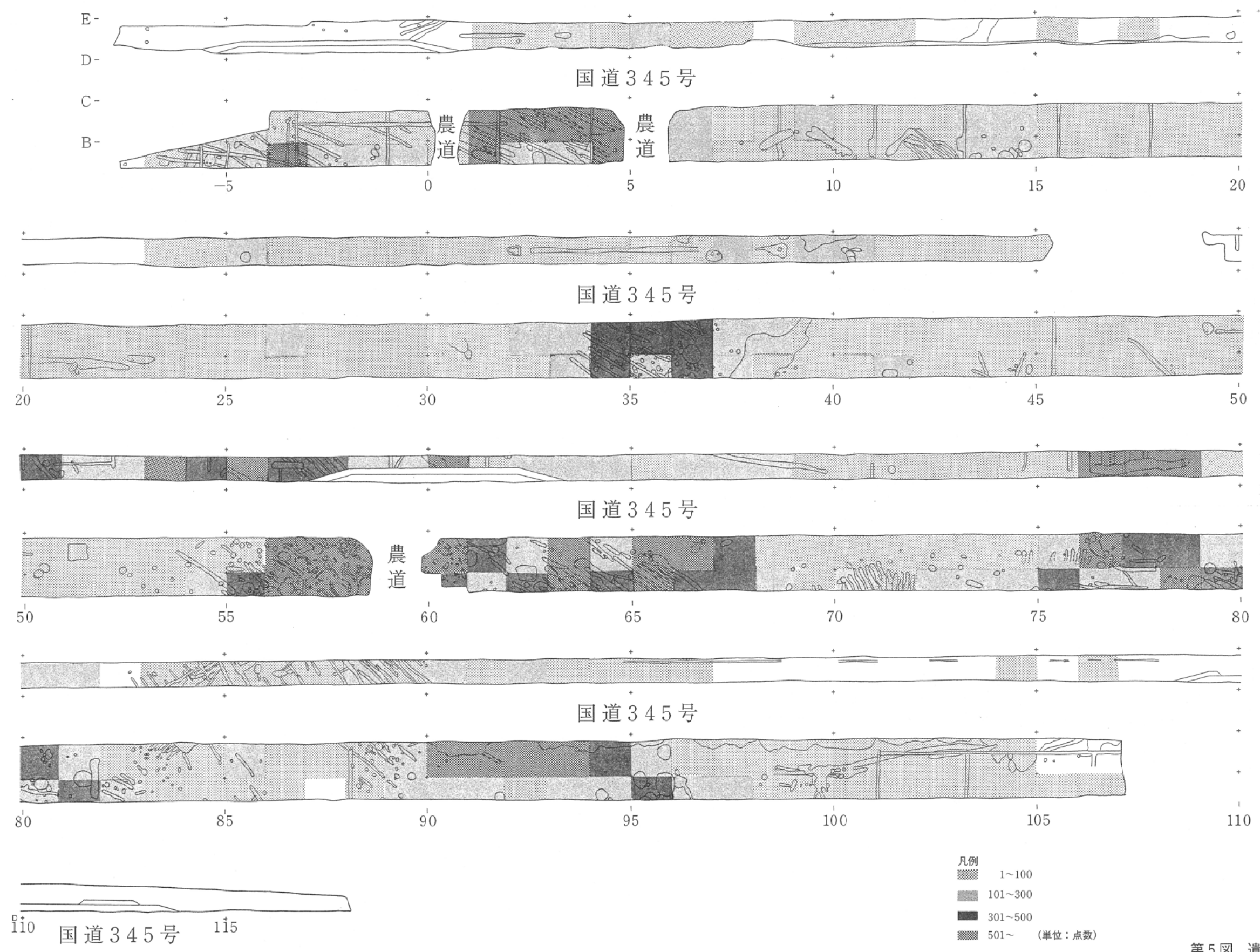
I-c	10Y R 3/4	暗褐色シルト (耕作土)
I'-d	10Y R 5/3	にぶい黄褐色砂質シルト
II-c	10Y R 4/2	灰黄褐色砂質シルト、10Y R 6/3 にぶい黄褐色砂質シルトがまだら状に混入
III-c	10Y R 4/3	にぶい黄褐色シルト
IV-c	10Y R 3/3	暗褐色シルト (遺物包含層)
V-c	10Y R 5/4	にぶい黄褐色シルト



第3図 基本層序



第4図 遺構配置図 (S=1:400)



第5図 遺物分布図 (S=1:500)

IV 検出された遺構

今回の調査で検出された遺構のうち、登録したものは、掘立柱建物跡2棟、溝跡237条、土坑145基、河川跡2条、ピット202基、性格不明遺構17基を数える。以下、国道を挟んで西側と東側に分けて、主な遺構について概述していく。(第4・5図)

西側のA・B・C区では、A～B-7～5G・35G・65G・71G・75Gの各付近に、一定方向に伸びる溝状遺構群が検出された。これらは概ね南北に走るが、若干東に傾くものもあるため走行方向の違いから、少なくとも3時期にわたる変遷が窺える。37～38Gでは調査区を横切る形で、河川跡と思われるSG10が検出されている。しかし東側の同G付近は、道路建設時の攪乱部に当たったため、遺構の延伸状況は確認できなかった。2棟の掘立柱建物跡は、遺構が密に分布するB区南端域で検出された。同区域ではSK250やSD231などから多くの遺物が出土している。東側のD・E区では、D-76～78Gに河川跡が見つかり、多数の墨書土器を含む、須恵器を主体とした土器が多量に出土した。溝状遺構群は82～89Gで検出された。

遺構は前述の通り4区域にまとまった分布を見せているが、15～33Gについては遺構がほとんど確認されていない。ここは他区域に比べ、包含層からの遺物の出土量も極めて少ない。またこの部分を境にして、遺物の様相に違いが認められる。詳細は後述するが、隣接する第2次の調査区においても同様の結果が得られていることから、当該域が遺跡範囲の境界になる可能性も考えられる。

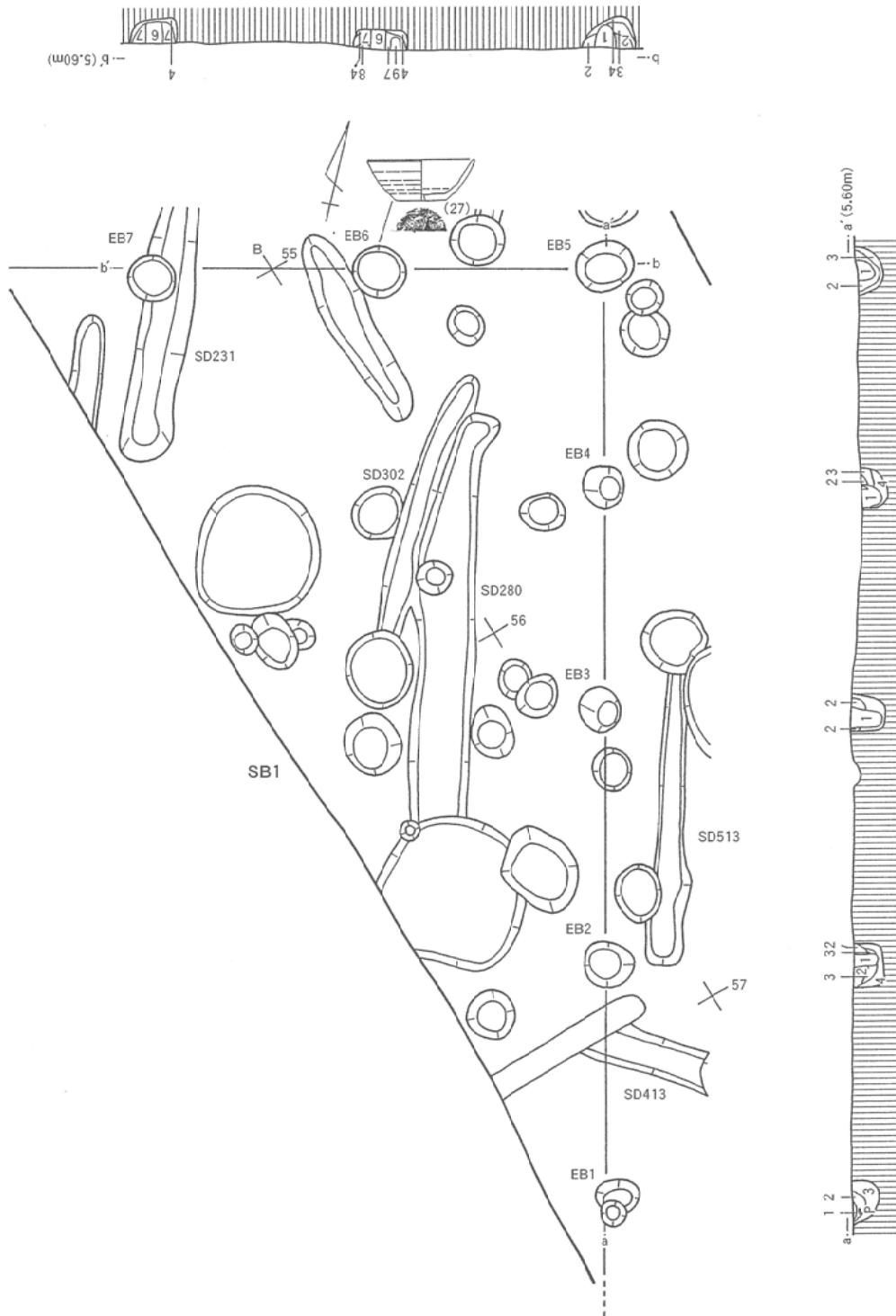
1 掘立柱建物跡

今回の調査では2棟の掘立柱建物跡が検出された。しかし、どちらも建物跡の南側部分が調査区外に延びるため全形は明らかでない。柱穴全体では、赤焼土器と製塩土器の小片が合わせて150点余り出土している。ただ1点だけ図示できたSB1-E B6出土の赤焼土器坏(27)は、建物の時期を考える上で重要な資料となる。柱穴の覆土は概ね砂質で、火山灰の堆積は認められない。第2次調査の3トレンチで検出されたSB2建物跡と今回のSB2は、主軸方向と柱間が同等ではあるが、柱穴の位置関係から観て、むしろSB1とつながる可能性が有り得る。同一建物跡と仮定すると、桁行5間、梁行4間、南廂の南北棟になる。

SB1 掘立柱建物跡 (第6図, 図版3) B区南端域のA・B-54～57Gに位置する。桁行4間以上、梁行2間以上の南北棟で、主軸方向はN-14°-Wである。柱間は、1尺を30.3cmとすると、桁行梁行ともに9尺で近似することから、9尺等間と考えることができる。柱穴の掘り方は径40～60cmの円形を呈し、検出面からの深さは22～40cmを測る。7個の柱穴でアタリが認められる。赤焼土器坏片(27)の底部外面に墨痕が見られるが、伴読不能である。

SB2 掘立柱建物跡 (第7図, 図版4) B区南端域のA・B-52～54Gに位置する。桁行2間以上、梁行1間以上の南北棟と考えられる。検出できたのは、建物跡北東隅の4柱穴のみであったため規模の把握は難しい。主軸方向はN-12°-Wである。柱穴の掘り方は径50cmの円形で、検出面からの深さは15～30cmを測る。柱間は、桁行梁行とも9尺と推定する。

IV 検出された遺構

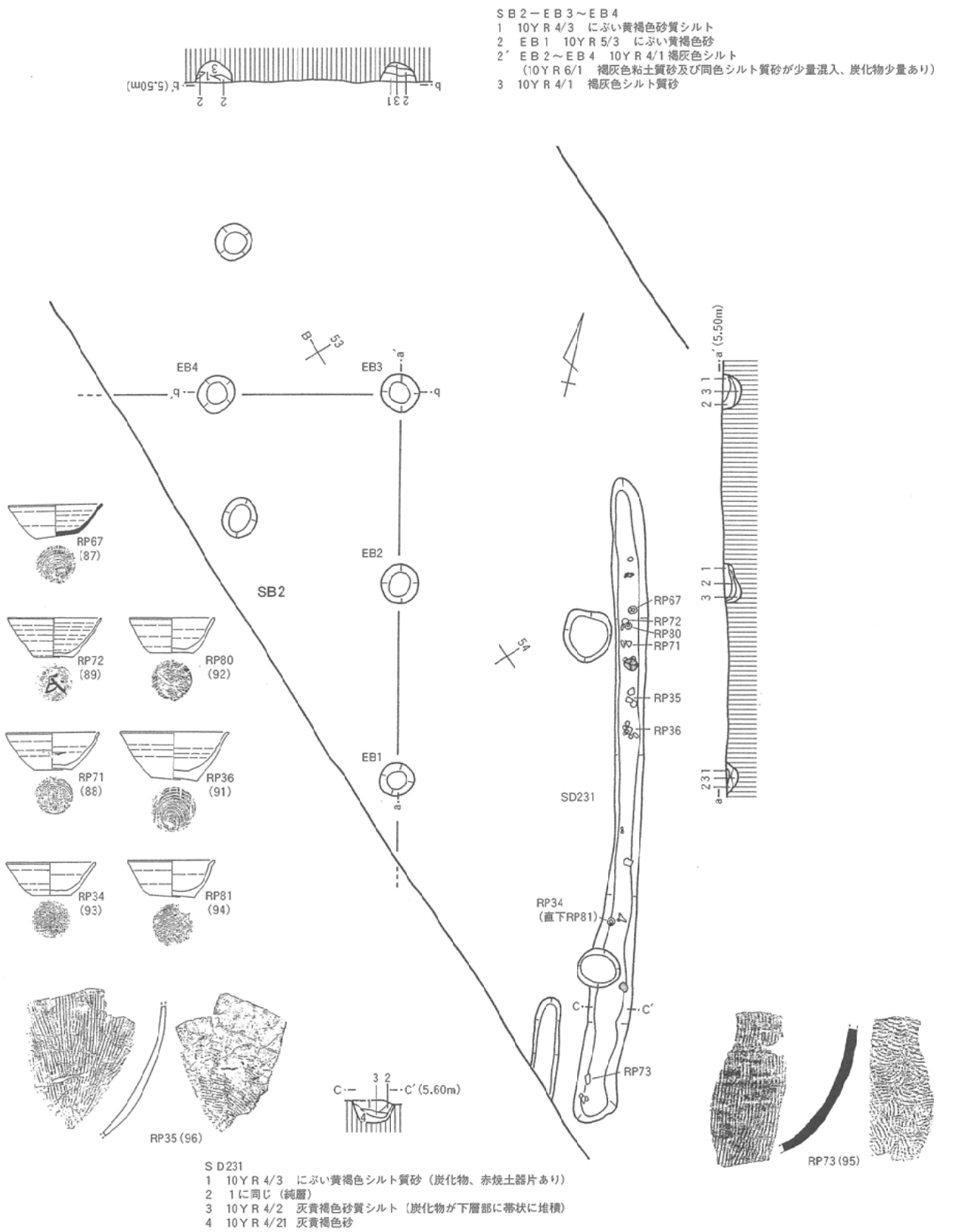


SB1-EB1~EB7

- 1 10Y R 2/2 黒褐色砂質シルト (炭化物あり)
- 2 10Y R 3/2 黒褐色砂質シルト (10Y R 5/2 灰黄褐色シルト質砂がまだら状に混入)
- 3 10Y R 5/2 灰黄褐色シルト (黒褐色砂質シルトが少量混入)
- 4 10Y R 4/2 灰黄褐色シルト質砂 (同色砂が混在、炭化物あり)
- 5 10Y R 4/2 灰黄褐色シルト (10Y R 4/3 における黄褐色砂質シルトと10Y R 4/2 灰黄褐色砂質シルトが混入、炭化物あり)
- 6 10Y R 4/2 灰黄褐色砂質シルト (炭化物多量に混入)
- 7 10Y R 3/3 暗褐色シルト質砂

0 2m
1 : 80

第6図 SB1掘立柱建物跡



第7図 SB2掘立柱建物跡

2 土坑

土坑は145基登録した。その中でまとまった遺物を出土した土坑の多くは溝状遺構群と重複関係を持っている。以下、遺物がまとまって出土した土坑や、特徴ある土坑についてその概略を述べる。

S K 81 (第8図) A-78~79 Gに位置し、S D 48を切っている。西側は調査区外へ拡がる様相を呈している。長径197cm、短径114cm、深さ13cmを測る。覆土は4層からなり、最上層からは炭化粒とともに須恵器片、赤焼土器が出土している。また、F 4からは須恵器坏(34・35)が出土している。

S K 250 (第8図) A-56 Gに位置する。溝状遺構群を切る掘立柱建物跡とともに検出された。平面形態は円形で長径は190cm、深さ16cmを測り、東方をS P 541に切られる。覆土は4層からなり、F 1からは炭化粒とともに、赤焼土器坏(46)~(54)が出土している。この他にも、須恵器片、赤焼土器片、黒色土器片、製塩土器片など破片数で373点が出土しているが、その91%は赤焼土器片である。

S K 74 (第8図) B-74 Gに位置し、平面形態は楕円形を呈する。長径100cm、短径68cm、深さ30cmを測る。覆土は6層からなる。検出面には長径20cmほどの焼成を受けた礫があり、その直下から出土した黒色土器坏(32)と赤焼土器坏(33)を図示した。赤焼土器坏(33)は口縁部に煤が付着しており、灯明皿として使われたものと考えられる。

S K 108 (第8図) A-94 Gに位置し、西側は調査区外へ拡がる様相を呈している。長径118cm、短径108cmを測り、覆土は9層からなる。F 1~F 4にかけては、須恵器片や赤焼土器片など計38点が出土している。F 4~F 6には砂層があり、F 9は人為的に埋められた粘土層であった。F 8からは底部外面に「高」の文字が記されている赤焼土器坏(38)、F 9からは赤焼土器坏(41)、甕(40)、須恵器高台皿(39)が出土している。その他、判読不明であったが覆土内より墨書土器片(271)・(306)も出土している。(39)は転用硯である。S K 108は一度人為的に埋土した後砂層が入ったものと考えられる。

S K 527 (第8図) A--6 Gに位置し、溝状遺構群のA区画と重複関係を持っている。平面形態は円形で、長径145cm、短径138cmを測る。S D 523を切り、S D 526に切られる。覆土は4層からなり、F 5・F 6は柱穴である。赤焼土器片35点、須恵器片5点、黒色土器片6点、製塩土器1点がF 3を中心として出土している。

S K 30 (第9図) B-63 Gに位置する。溝状遺構群のE区画と重複し、S D 32に切られる。直径150cm前後の円形の土坑である。深さは23cm程度であり、覆土は3層からなる。F 1から赤焼土器の小破片が多数出土している。遺構検出面より出土した赤焼土器(15)、F 1から出土した須恵器高台付坏(29)、赤焼土器坏(30)、(31)を図示した。

S K 409 (第9図) B-65 Gに位置する。南北215cm、東西100cmの南北に長い土坑である。深さは15cm前後である。溝状遺構群のE区画と重複関係にあり、S D 44を切りながら、同溝と同じ方向にのびる。須恵器片3点、赤焼土器片42点、製塩土器片8点が出土しているが、図示できたものはF 1から出土した赤焼土器坏(64)1点のみである。

S K 457・458・459・S D 460（第9図）B-56～57Gにかけて検出された。溝状遺構群のD区画と重複関係を持ち、南西脇にS B 1が検出されている。S K 458は南方をS K 457に切られ、西方はS D 460を切っている。S K 459は南方でS D 460を切っている。赤焼土器片を中心に小破片が多数出土している。S K 457は直径130cm前後の円形の土坑である。深さは28cmを測り、F 1・F 2は土器片や炭化粒を含んでいる。S K 458は不定形で、北方は国道345号の下へと広がる様相を呈している。深さは、22cm前後を測る。灰色の火山灰がF 6に広がっている。この火山灰層は庄内一円で検出されている十和田aとみられる。S K 459は長径160cm、短径136cmの略円形で、深さは15cmを測る。F 1は赤焼土器片を含んでいる。S D 460は東西方向にのびる溝である。灰釉陶器片3点(99)～(101)が出土していることが注目される。このS D 460を廃棄した後にS K 457～459を作ったものと考えられる。

S K 82（第9図）A-79Gに位置する。直径145cm前後の円形の土坑である。深さは22cmを測り、覆土は4層からなる。北西方向にのびるS D 48を切っている。須恵器片4点、赤焼土器片19点、製塩土器片1点が出土している。赤焼土器高台付坏(36)を図示した。

S K 601（第10図）D-25Gに位置する。直径120cm前後の円形の土坑である。F 1上面より、文字は不明であるが底部に墨痕のある須恵器片(71)、転用硯とみられる須恵器蓋(70)、「有」の墨書を底部に持つ赤焼土器坏(74)が出土している。覆土は2層からなり、深さは15cm前後を測る。F 1より赤焼土器小壺(75)、赤焼土器坏(73)が出土している。

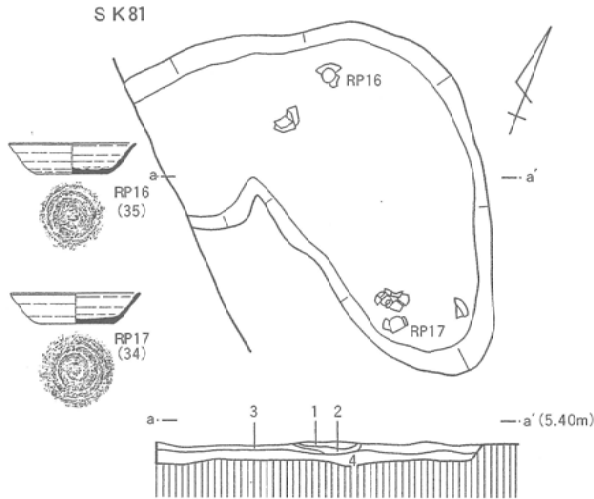
S K 378（第10図）B-76Gに位置する。東方は調査区外に係るため全体を把握することはできなかったが、長軸365cm以上、短軸162cmの規模を有する不定形の大型土坑である。覆土は3層からなりF 1上面より一括廃棄したと考えられる須恵器甕(60)、赤焼土器甕(57～59)、赤焼土器坏(56・61)がまとまって出土している。

S K 630・631（第10図）D-50Gに位置する。S K 630がS K 631を切っている。S K 630は楕円形の土坑で、長軸154cm、短軸50cm前後を測る。F 1には焼土が含まれている。S K 631は、長径95cmを測る楕円形の土坑である。F 2を中心に破片集計で須恵器片2点、黒色土器片3点、赤焼土器片98点、製塩土器片1点が出土している。S K 630・S K 631の東側には第1次調査で検出された畝上構跡のC区画が広がっており、この溝状遺構群と重複する土坑かと思われる。

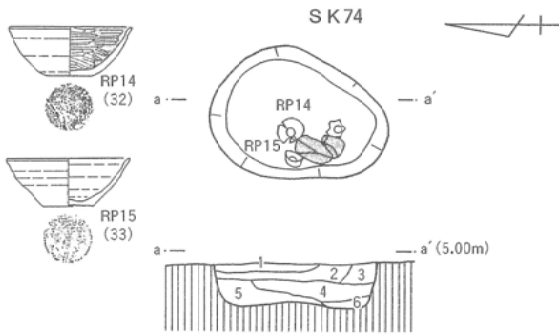
S K 89（第10図）A-81Gに位置する。南東方向は攪乱を受けているが、直径205cm前後の規模を有する円形の土坑である。深さは12cmを測る。覆土は5層からなり、F 1は炭化物を含んでいる。また、その上面からは黒色土器高台付坏(37)が出土している。出土総数は破片集計で須恵器片18点、黒色土器片5点、赤焼土器片113点、製塩土器片2点にのぼる。

S K 643（第10図）D-60Gに位置する。南半は攪乱を受け、北半は調査区外に係るため全形を確認することができなかった。覆土は6層からなり、深さは26cmを測る。F 3には炭化物が含まれ、F 4は黒色の炭化層とみられる。出土遺物は小破片のみで図示するには至らなかったが、須恵器片5点、赤焼土器片221点、黒色土器片13点、製塩土器片8点と赤焼土器片を中心に多量の遺物が出土している。

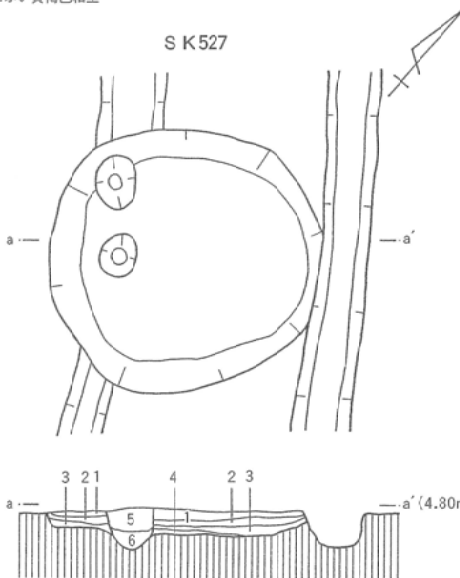
IV 検出された遺構



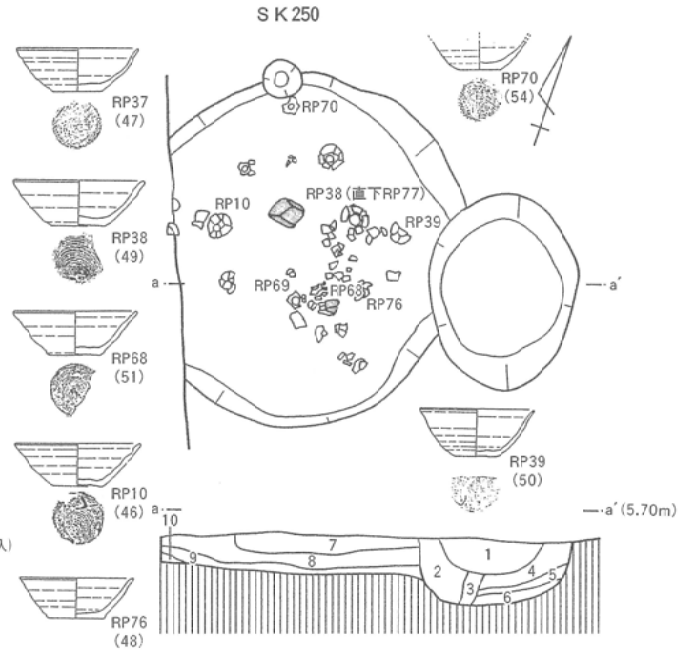
- SK 81
 1 2.5 Y 3/1 黒褐色シルト (10Y R 4/3 にぶい黄褐色シルトが少量混入、焼土、炭化物が少量に混入)
 2 2.5 Y 3/1 黒褐色シルト (10Y R 4/3 にぶい黄褐色シルトがまだら状に混入、焼土炭化物が少量に混入)
 3 10Y R 4/2 灰黄褐色シルト (10Y R 4/3 にぶい黄褐色シルトがブロック状に混入、炭化物あり)
 4 10Y R 4/3 にぶい黄褐色シルト質微砂



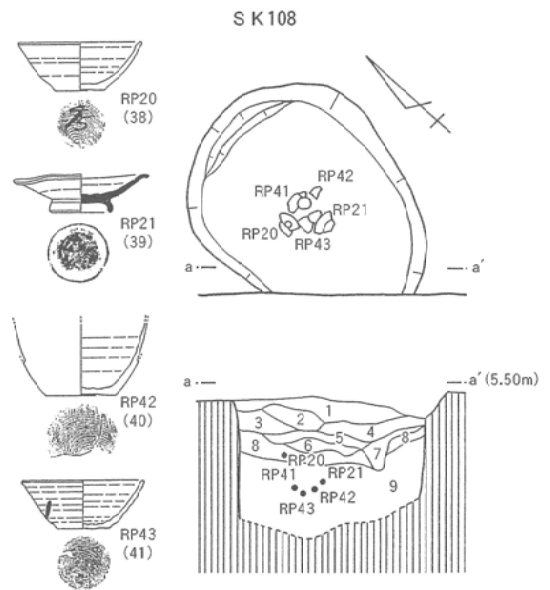
- SK 74
 1 10Y R 4/3 にぶい黄褐色シルト (10Y R 4/2 灰黄褐色が少量混入)
 2 10Y R 4/2 灰黄褐色シルト (10Y R 5/3 にぶい黄褐色シルトが斑点状に混入)
 3 10Y R 5/3 にぶい黄褐色シルト (10Y R 4/2 灰黄褐色シルトが少量混入)
 4 10Y R 5/3 にぶい黄褐色シルト (10Y R 4/3 にぶい灰黄褐色シルト質粘土がブロック状に混入)
 5 10Y R 4/3 にぶい黄褐色シルト質粘土
 6 10Y R 4/3 にぶい黄褐色粘土



- SK 527
 1 10Y R 4/2 灰黄褐色シルト (10Y R 2/1 黒色シルトが少量混入、炭化物あり)
 2 10Y R 4/2 灰黄褐色シルト (10Y R 5/3 にぶい黄褐色シルトがまだら状に混入)
 3 10Y R 2/1 黒色シルト (10Y R 4/2 灰黄褐色シルトが少量混入、赤焼片、炭化物あり)
 4 10Y R 5/3 にぶい黄褐色シルト
 5 10Y R 4/2 灰黄褐色シルト (10Y R 2/2 黒色シルトが少量混入、炭化物あり)
 6 10Y R 4/2 灰黄褐色シルト (10Y R 5/4 にぶい黄褐色シルトがまだら状に混入)

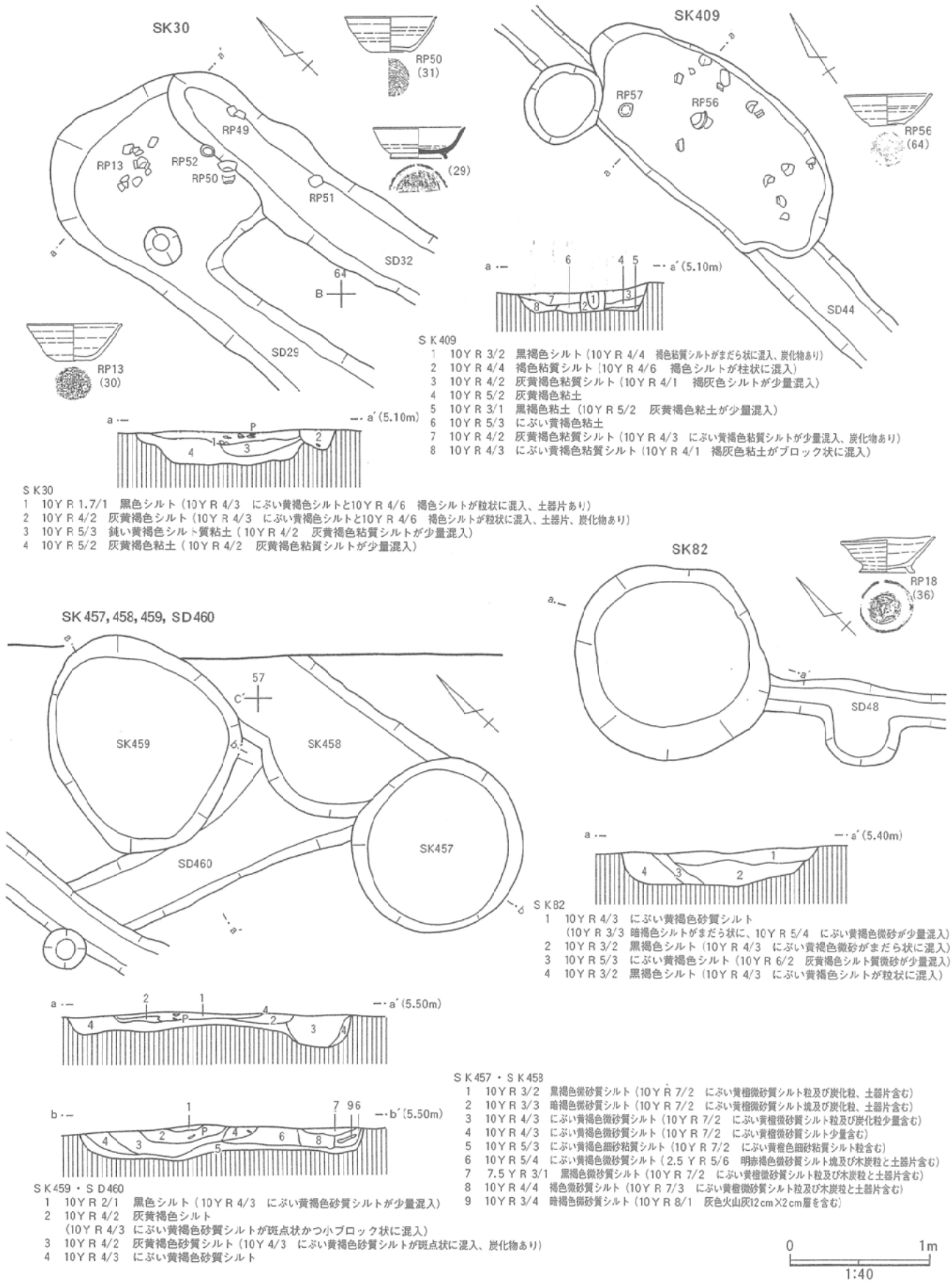


- SK 250
 1 10Y R 4/2 灰黄褐色シルト (10Y R 5/3 にぶい黄褐色砂質シルトが斑点状に混入、炭化物、土器片あり)
 2 10Y R 4/2 灰黄褐色シルト (10Y R 5/3 にぶい黄褐色砂質シルトが粒状に混入、炭化物あり)
 3 10Y R 4/1 褐色シルト質砂 (10Y R/6 褐色砂質シルトが少量混入)
 4 10Y R 5/2 灰黄褐色砂質シルト (10Y R 4/2 灰黄褐色シルトがまだら状に混入、炭化物少量あり)
 5 10Y R 4/1 褐色砂 (10Y R 5/2 灰黄褐色シルトが上層部にあり、火山灰あり)
 6 10Y R 4/1 褐色砂
 7 10Y R 2/3 黒褐色シルト (10Y R 4/2 灰黄褐色シルトが少量混入炭化物、赤焼土器片あり)
 8 10Y R 3/1 黒褐色シルト (10Y R 4/2 灰黄褐色シルトがまだら状に混入)
 9 10Y R 1.7/1 黒色シルト
 10 10Y R 4/2 灰黄褐色砂質シルト (10Y R 4/4 褐色シルトがまだら状に混入)



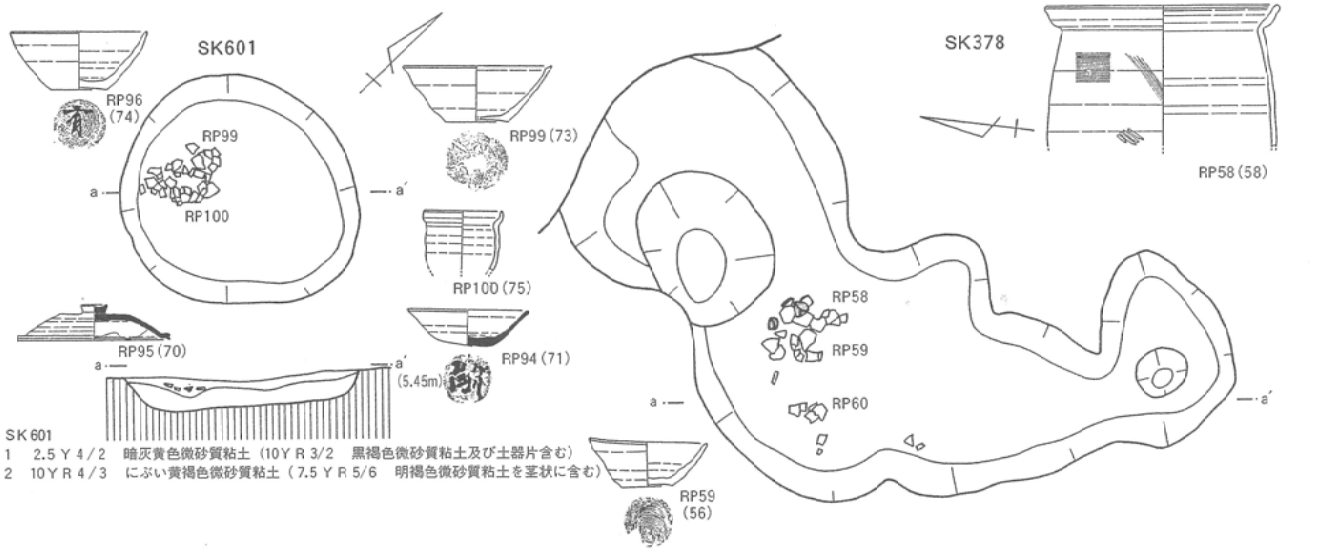
- SK 108
 1 10Y R 3/3 暗褐色砂質シルト
 2 10Y R 3/2 黒褐色砂質シルト
 3 10Y R 4/3 にぶい黄褐色シルト質砂 (10Y R 5/3 にぶい黄褐色微砂がまだら状に混入)
 4 10Y R 4/3 にぶい黄褐色砂
 5 10Y R 4/2 灰黄褐色砂 (10Y R 4/6 褐色砂がまだら状に混入)
 6 10Y R 4/2 灰黄褐色砂 (10Y R 4/6 褐色砂が粒状に混入)
 7 10Y R 4/6 褐色粘質シルト
 8 10Y R 5/3 にぶい黄褐色粘土

0 1m
 1:40
 第8図 土坑(1)

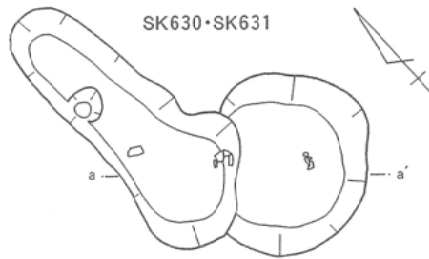


第9図 土坑(2)

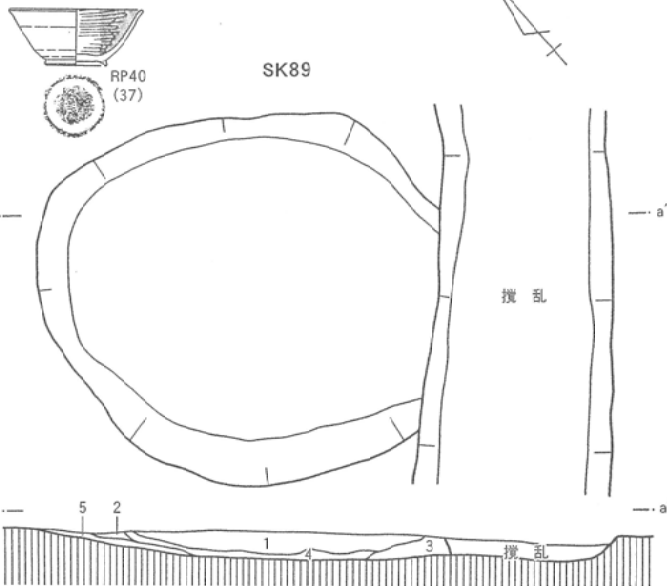
IV 検出された遺構



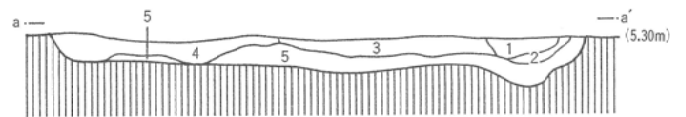
- SK 601
 1 2.5 Y 4/2 暗灰黄色微砂質粘土 (10Y R 3/2 黒褐色微砂質粘土及び土器片含む)
 2 10Y R 4/3 にぶい黄褐色微砂質粘土 (7.5 Y R 5/6 明褐色微砂質粘土を茎状に含む)



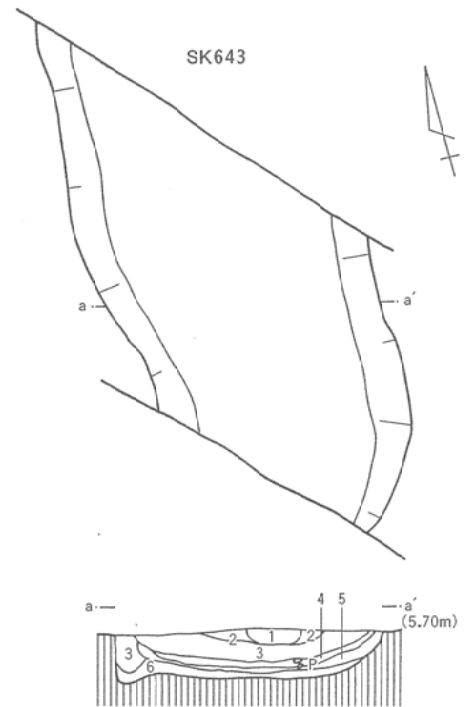
- SK 630・631
 1 10Y R 3/1 黒褐色シルト (10Y R 2/1 黒色シルトがまだら状に混入、焼土含む)
 2 10Y R 4/2 灰黄褐色シルト (10Y R 2/1 黒色シルトがまだら状に混入)
 3 10Y R 5/2 灰黄褐色粘質シルト



- SK 89
 1 10Y R 4/2 灰黄褐色シルト (10Y R 6/3 にぶい黄橙微砂が少量混入、赤焼片、炭化物あり)
 2 10Y R 4/2 灰黄褐色砂質シルト (10Y R 5/4 にぶい黄褐色シルト質砂が少量混入)
 3 10Y R 5/4 にぶい黄褐色砂
 4 10Y R 4/2 灰黄褐色シルト (10Y R 4/3 にぶい黄褐色シルトがまだら状に混入)
 5 10Y R 5/4 にぶい黄褐色シルト質砂



- SK 378
 1 10Y R 4/2 灰黄褐色粘土 (10Y R 4/4 褐色粘土が少量混入、炭化物、焼石あり)
 2 10Y R 4/2 灰黄褐色粘土 (10Y R 4/4 褐色粘土がまだら状に混入)
 3 10Y R 4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト (10Y R 5/3 にぶい黄褐色粘土がまだら状に混入、炭化物、土器片含む)
 4 10Y R 3/4 暗褐色粘土質シルト (10Y R 3/2 黒褐色シルトがブロック状に混入、炭化物、焼土あり)
 5 10Y R 5/3 にぶい黄褐色粘土



- SK 643
 1 10Y R 4/2 灰黄褐色シルト (10Y R 6/3 にぶい黄橙シルトが少量混入)
 2 10Y R 6/3 にぶい黄橙シルト (10Y R 4/2 灰黄褐色シルトが少量混入)
 3 10Y R 4/1 褐灰色シルト (10Y R 6/3 にぶい黄橙シルトが斑点状に混入、炭化物土器片含む)
 4 10Y R 1.7/1 黒色シルト (10Y R 4/1 褐灰色シルトが少量混入、土器片あり)
 5 10Y R 5/1 褐灰色粘土 (10Y R 5/3 にぶい黄褐色粘質シルトが少量混入)
 6 10Y R 5/3 にぶい黄褐色粘質シルト

0 2m

1 : 40
 第10図 土坑(3)

3 溝状遺構群

今回検出された畑の畝跡と考えられる溝跡は7区画より構成されている。

A区画(第11図) A～C--7～2Gにかけて位置している。南北50cm以上にわたって広がる。-7～5Gにかけてみた場合4時期の変遷が認められる。第1期はSD518～522・524の南北方向に走行する溝跡で構成され、長さ600cm前後、幅30cm、深さ10cm前後の溝跡が100cm前後の間隔で整然と配置されている。第2期はSD535・537により構成される東西方向の溝跡である。長さは確定できないが、深さは8cm前後を測る。第3期は第1期より13度西に傾くSD523・526により構成される。長さは15m以上になる。第4期は第2期より7度西に傾く溝跡で、SD529・530により構成される。

C区画(第14図) A～C-33～37Gにかけて位置し、2時期の変遷が認められる。第1期はSD205～208・500・212・495・496などにより構成される溝跡群で、南北方向から西に13度の傾きがある。第2期はSD494のみの検出であったが、第1期のものより40度東に傾く。また、この区域の南東方向にSG10が検出され、建物跡を検出するには至らなかったが、柱穴群との重複関係も認められる。

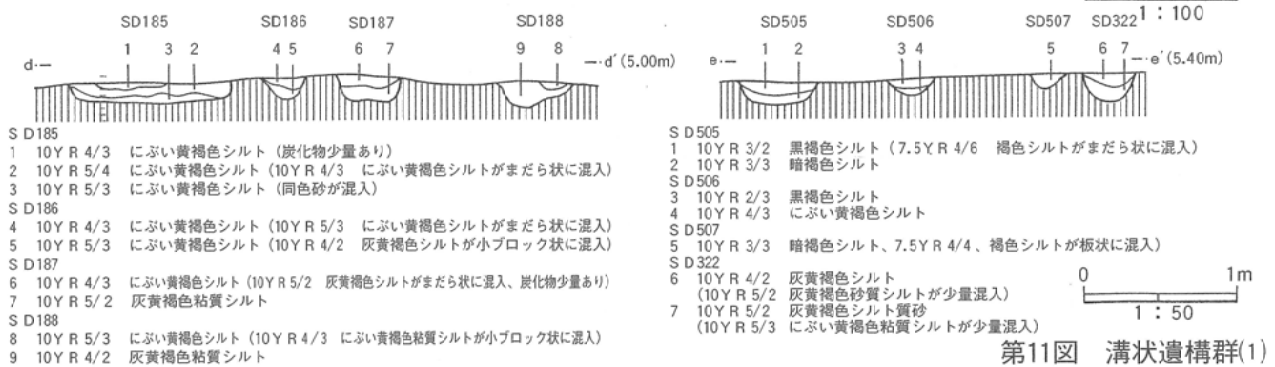
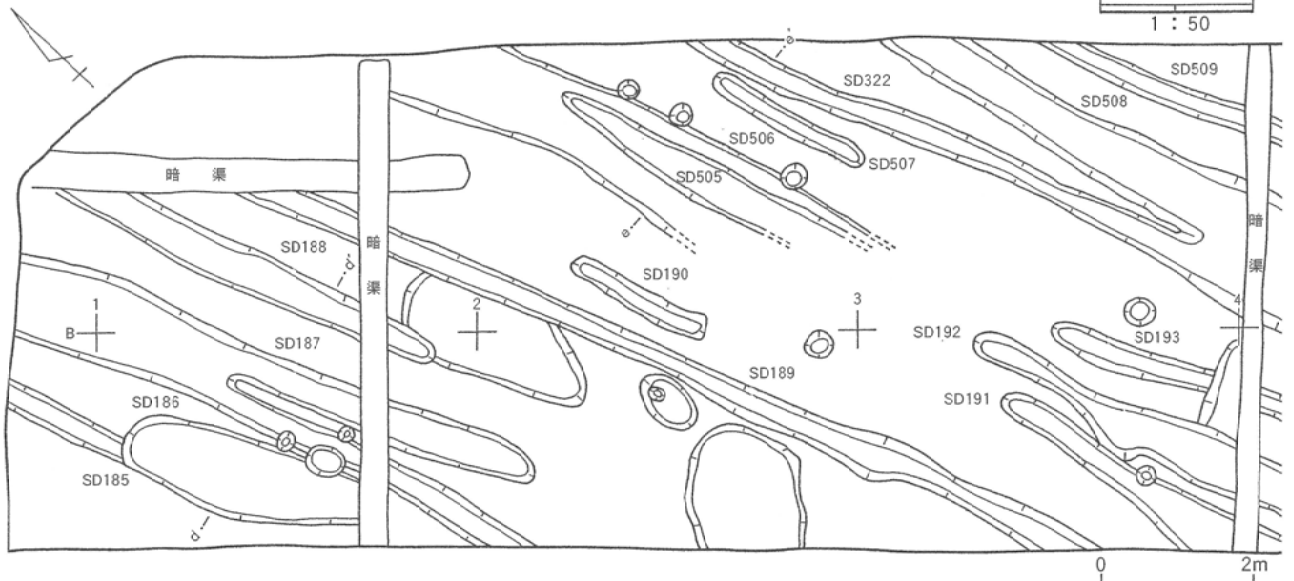
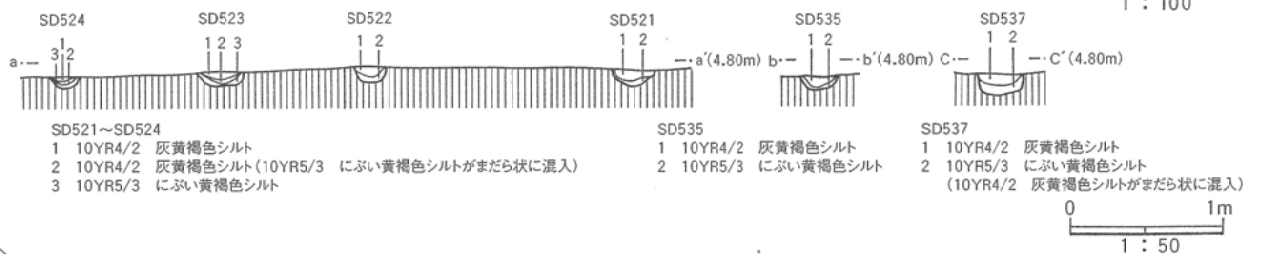
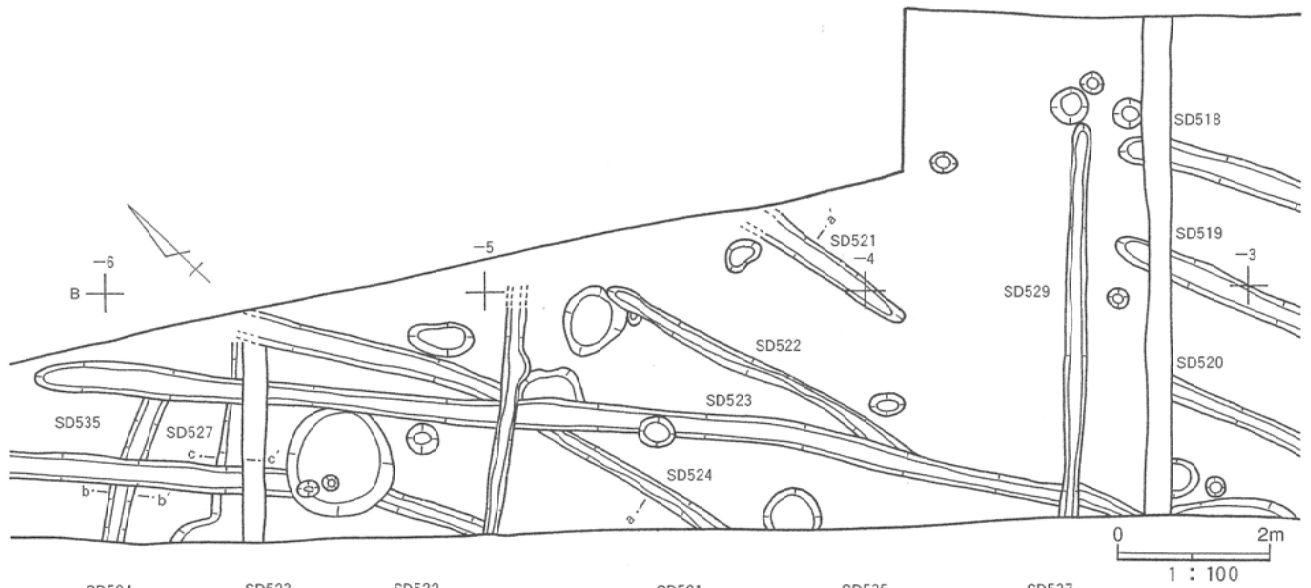
D区画 A～E-54～58にかけて位置する。この区域には、前述したSB1・2が検出されている。溝跡群との切り合いから、溝状遺構群を廃棄した後に居住区域としたものと推定される。B調査区に位置するSD231・280・513・461、E調査区に位置するSD634～641により構成される第1期と、SD413・460などにより構成される第2期があると推定される。また、SD231からは、赤焼土器坏(88～94)を含む多量の遺物が出土している。

E区画(第12図) A～B-62～67Gにかけて位置し、SD27～29・32・36・41～44・47～48・363～365・133等の溝跡により構成される。方位はN-6°-Wを測るが、長さは100～450cm以上と不規則的である。また、溝と溝の間隔も10～60cmと不規則的である。幅18cm前後、深さ10cm前後を測る。SD29・32はSK30と、SD44はSK409というように遺物を多く含んでいる土坑と重複関係を持つものもある。

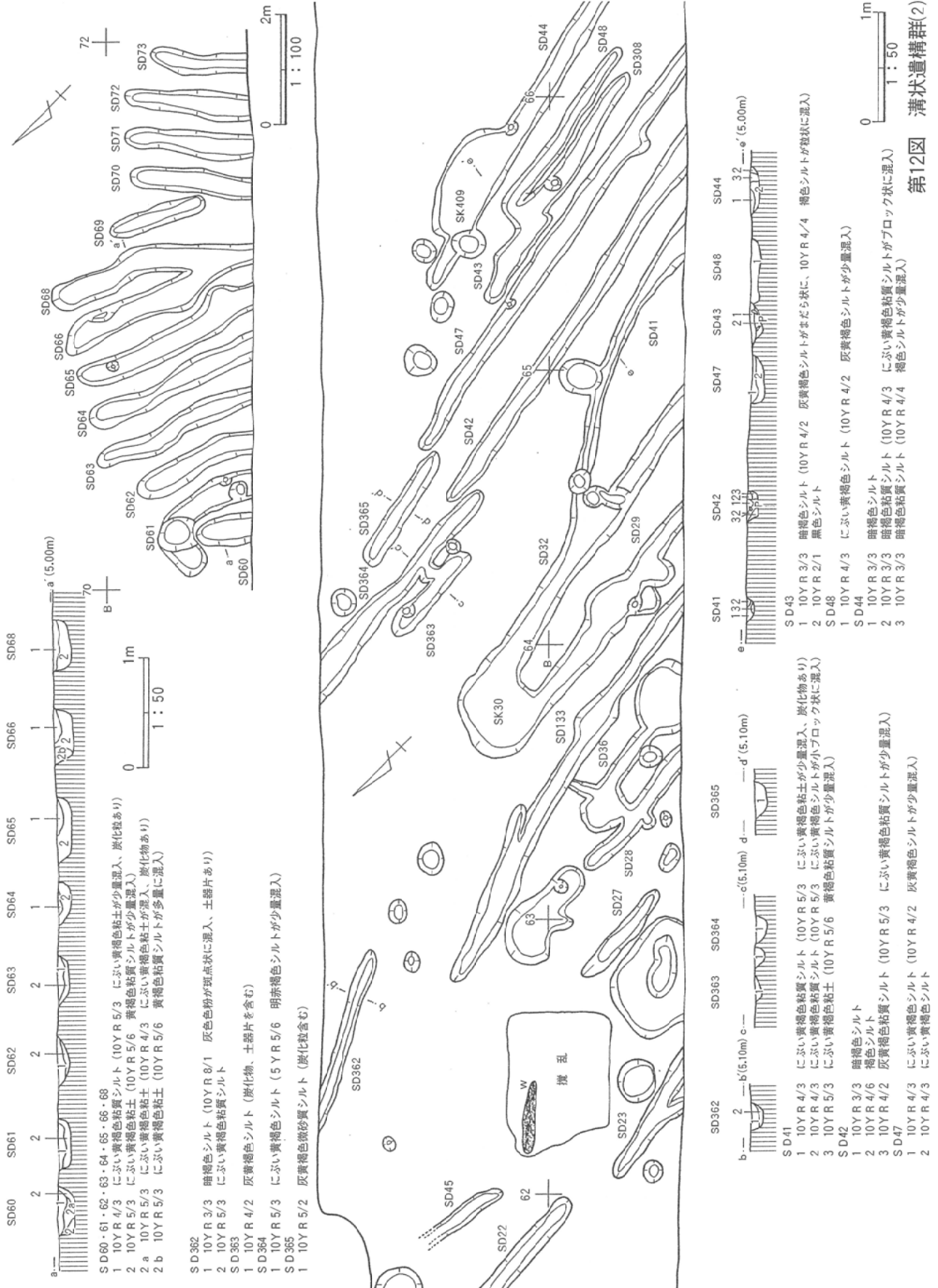
F区画(第12図) A～B-70～72Gにかけて位置している。SD60～66・68・69のA類と、SD70～73のB類との2時期があると考えられるが、切り合いが確認できるところがなく変遷順は不明である。A類は北から東側に15度傾く。長さ100～400cm以上、幅40cm前後、深さ10～15cmを測る。溝と溝との間隔は20cm前後で、規則的に走行している。B類はA類よりさらに27度東方に傾き、A類と同様20cm間隔で規則的に走行している。長さ230cm以上、幅40～45cm、深さ15cm前後を測る。

G区画(第13図) 国道345号をはさんでA～E-83～90Gにかけて位置する。溝状遺構群は3時期の変遷が認められる。第1期はSD351～353・355・356などの南北に走行する溝跡である。西半部については国道の下まで続き本来の長さを確定することはできない。80～100cm間隔で配されている。第2期はSD421・420・418・386・659・660などの東西方向に走行する溝跡である。約20cm間隔で配されている。第3期はSD666・667・684・685などの南北方向の溝跡である。第1期の溝に比べ、18度東に傾く。

IV 検出された遺構

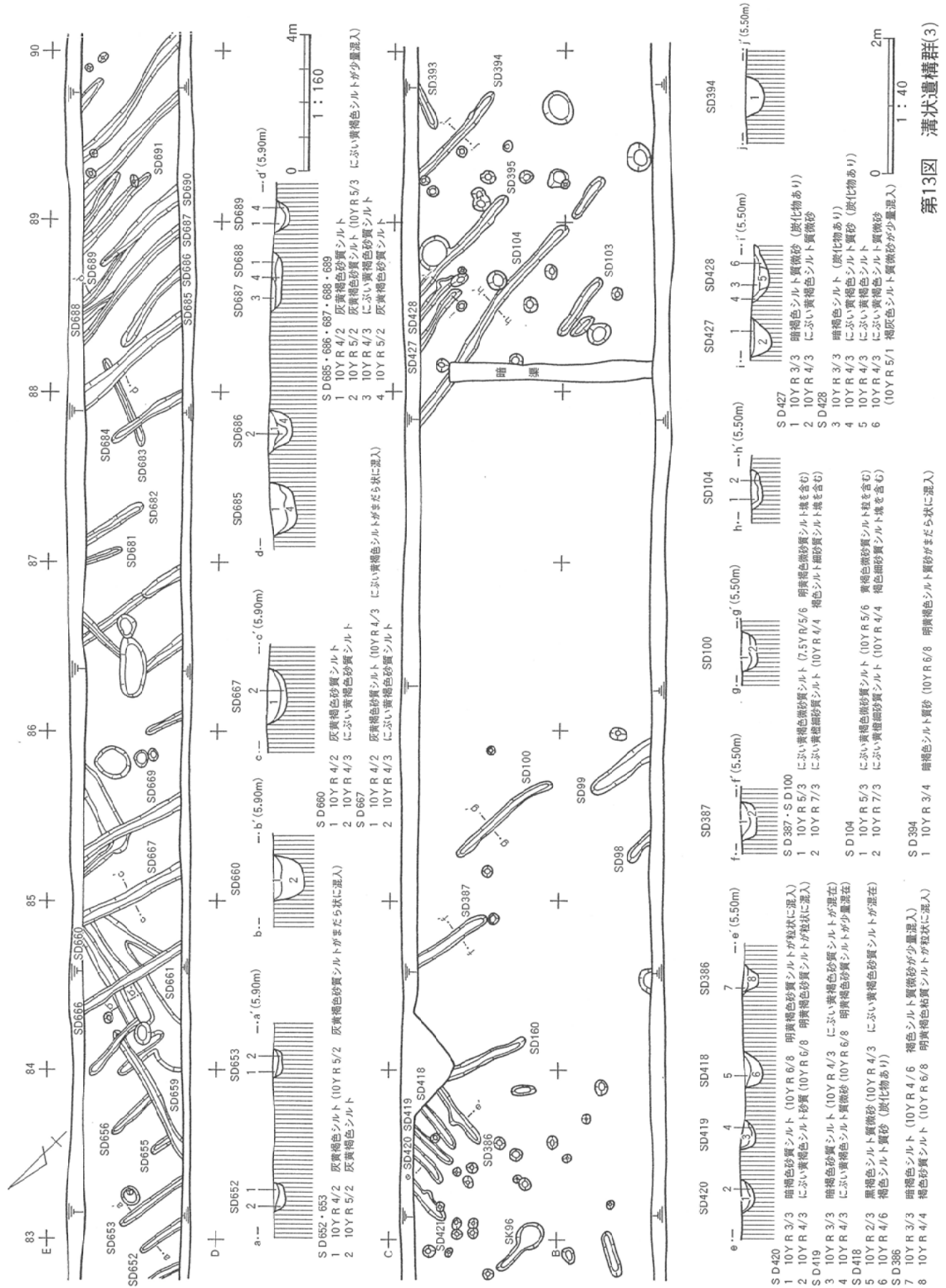


第11図 溝状遺構群(1)

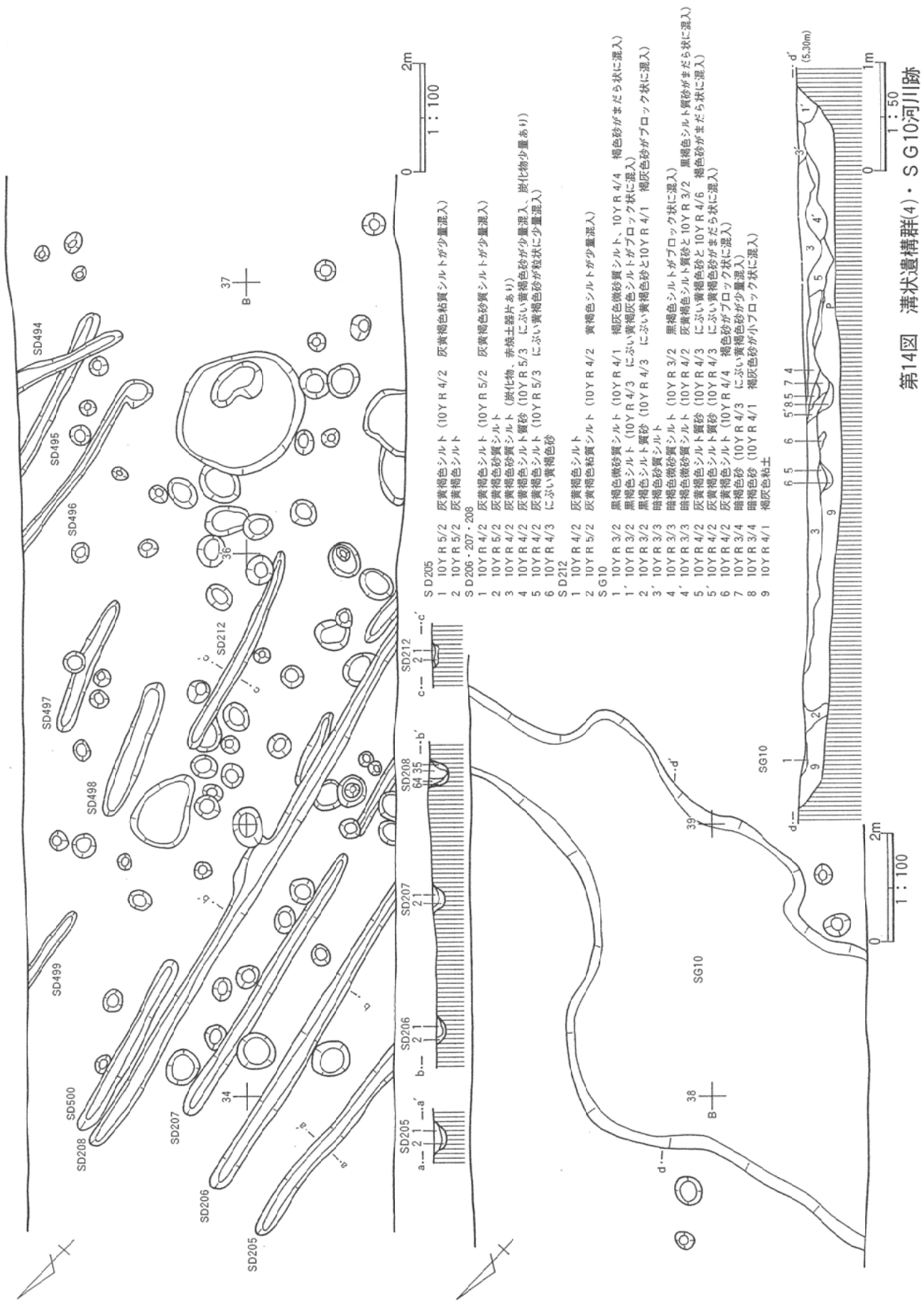


第12図 溝状遺構群(2)

IV 検出された遺構



第13図 溝状遺構群(3)



第14図 溝状遺構群(4)・SG10河川跡

4 河川跡

S G 702 (第15図、図版9)

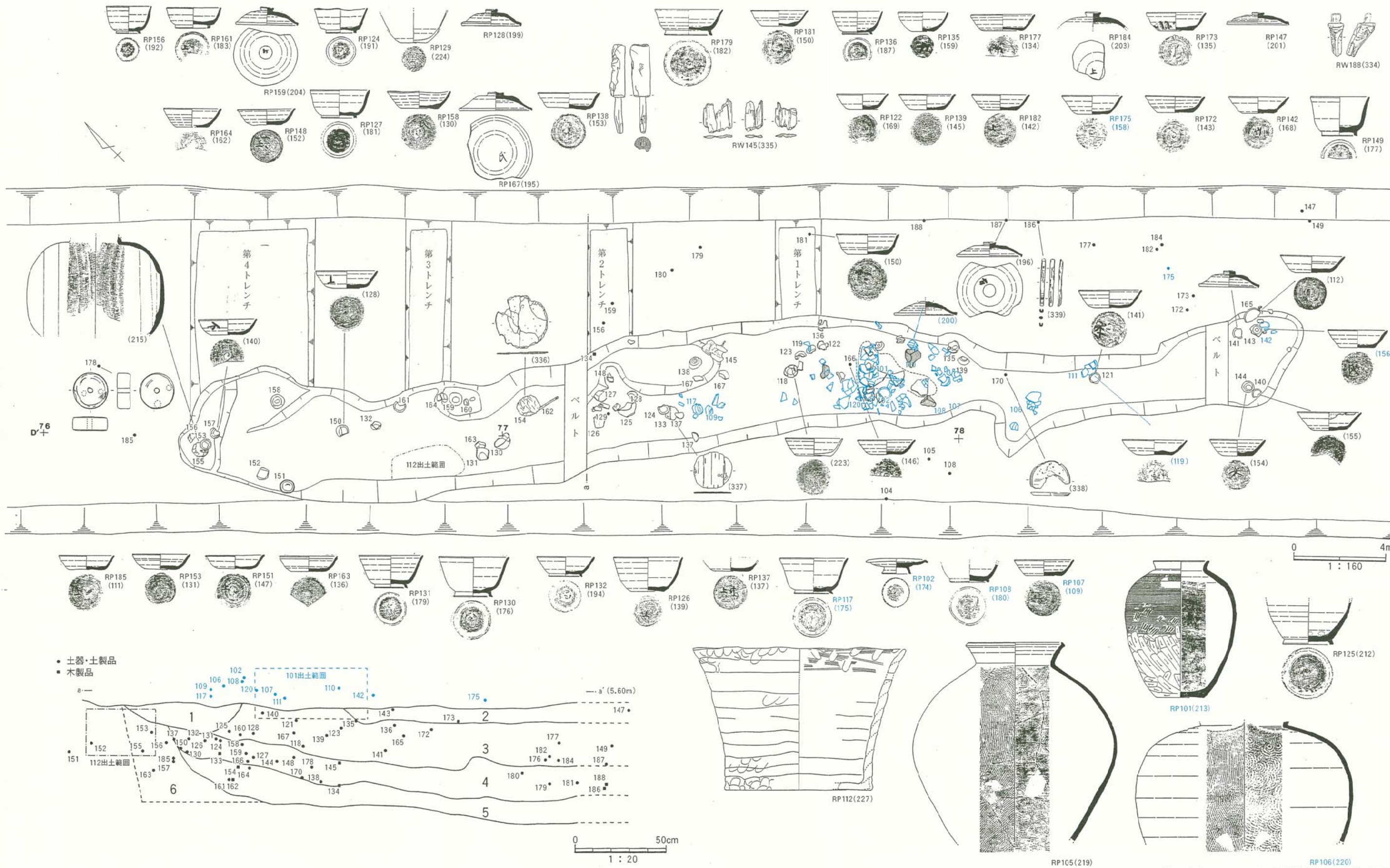
E 区の D'-76~78G にかけて確認された。覆土と地山の明確な区別が難しく、面整理段階で覆土と認識できた区域は、第15図に示した南北長約12m、幅1m余の溝状を呈した部分であった。しかし兩岸の立ち上がりが確認されなかったため、幅50cmのトレンチを4本設定し掘り上げた。第4トレンチは後に120cmに拡幅したが、東岸および旧河川の規模は把握できなかった。一方、西岸は当初、F5の立ち上がりで、S X 701性格不明遺構に切られていると思われた。しかし、F6からも須恵器を主体とした数点の土器が出土していることから、西岸の立ち上がりについても明確な判断ができなかった。ただ、現国道を挟んで西側のA区同グリッド付近においては、河川跡らしい区域は見つかっていない。よって、西岸は現国道の真下に当たる部分で捉えられる可能性が考えられる。

第2トレンチ北壁で土層観察を行った。川底はほぼ平坦に推移しており、確認面からの深さは50cm前後、最深部で65cmを測る。川底の地形や付近の標高などから見て、南から北へ向かって流れていたと考えられる。覆土は、下位のF5・6は砂の純層であることから、この河川が本来の機能を果たしていた時期の堆積層(I)、中位のF4は粘性を帯びた砂質シルト層であることから、河川としての機能が低下していった時期の堆積層(II)、上位のF2・3は下部の腐食土から上部の炭化物まで漸移している粘性を帯びたシルト層であることから、河川埋没期の堆積層(III)の3つに大別される。I層では、II層との境目に近い上層部から何点かの遺物が出土しているものの、ほとんど遺物は見られない。II・III層は、河川の周辺に古代の集落が存在していた時期の堆積層と考えられ、須恵器坏を主として豊富な遺物の出土量を得た。その中で墨書が認められた土器は、破片を含めて62点あったが、そのうち32点がII層から出土したものである。須恵器の坏・高台付坏に限っては、底部切り離しは回転ヘラ切りがほとんどで、回転糸切りのものは全体の2%ほどにすぎない。出土土器の詳細については後述に拠るが、第1次・第2次調査で捉えられていた、9世紀前葉から中葉代を中心とする土器群とは若干異なる様相を呈するものがあり、これまで可能性として指摘されていた8世紀後葉という年代観に、より近づく資料であると思われる。また、II層最西部において、製塩土器の破片が1,553点出土している。これは製塩土器をまとめて廃棄した土坑と見られるが、現国道の路盤によって遮られ大きさ、深さとも確認できなかったため詳細は不明である。

この河川跡は位置関係から判断して、第1次調査で指摘していた、遺跡範囲の境界線より北東部にある旧河道の存在を明確にするものといえる。

S G 10 (第14図、図版9)

B 区の A・B-37~39G にかけて確認された。覆土の堆積状況を見ると、これは氾濫等で一時的に多量の水が流れた跡で、河川としての本来の機能は果たしていなかったと考えられるが、幾度かの氾濫時に水が流れたものと思われる。底面の地形から、西から東へ流れたことが窺える。覆土は腐食土で、炭化物、流木片、火山灰等が認められた。遺物は須恵器・赤焼土器の小片が若干出土している。深さ20~36cm、幅360cmを測る。



第15図 S G 702 河川跡遺物垂直分布図

V 出土した遺物

本調査で出土した遺物は、包含層、遺構内をあわせて整理箱にして92箱を数える。点数にして51,357点が出土している。種別的には、土器・土製品・木製品・石製品・木製品・金属製品などであった。以下では、出土遺物の大半を占めた土器類を中心に種別器種ごとの概要を記していく。

1 土器

(1) 土師器・黒色土器

土師器には、坏・蓋・小壺の器種が出土している。全てS G 702河川跡からの出土である。坏は3点である。(105)は底部から体部下端にかけてヘラ削りが施され、体部は緩やかに丸みを帯びながら立ち上がる。(139)は器高が高く74mmを測り、深い碗上の形態をなす。底部は、回転糸切りの後ヘラ削りが施されている。内外面ともに酸化鉄を含む粘土により赤彩されており、底部には「上」の墨書がある。(223)は(139)と同様焼成がよく、内外面ともに赤彩されている。県内では類例として鶴岡市西谷地遺跡、遊佐町上高田遺跡、宮ノ下遺跡で出土している。(203)は蓋である。内外面ともに赤彩されており、内面には「上」の墨書もある。(139)の蓋と考えられる。小壺(106)は、下半部のみである。底部にはヘラによる調整痕が残る。

黒色土器は、内面に黒色処理を施した内黒土器のみの出土であった。出土遺物全体量の約4%と少量の出土である。図化したものは高台坏2点、坏2点、鉢1点の5点である。高台付坏は(1)と(37)である。(1)は包含層からの出土である。器高が低く皿形の器形で体部はわずかに内湾しながら立ち上がる。(37)はS K 89からの出土である。回転糸切りの後高台が付され、体部は内湾ぎみに立ち上がり口唇部がわずかに外反する。坏は(32)・(86)の2点である。(32)はS K 74の覆土内からの出土である。器高が高く、体部はわずかに内湾しながら立ち上がる。(86)はS D 231の覆土内からの出土である。底部から体部下端にかけてヘラ削りが施され、体部はやや直線的に立ち上がる。器高が高く大振りなものである。(107)は鉢の体部のみである。S G 702より出土している。内外面ともヘラミガキが不定方向に施されている。

(2) 須恵器

須恵器は調査区全域から出土しており、出土遺物全体量の約22%をしめる。特に、E区河川跡からの出土が多い。器種は坏・高台付坏・蓋・壺・甕・横瓶・鳥形土器などがある。

蓋は、その法量から、口径160mm内外の大振りなもの(9・11・70・195)と、140mm内外の小振りなもの(10・42・196・198・199・200・201・202・204・206)に大別され、それぞれに山笠型、平笠型とがある。(195)・(197)には「氏」、(196)には「古」の墨書がある。また(10)・(70)・(199)の内面には墨痕があり転用硯と考えられる。(207)は口径が70mmと小さく長頸壺の蓋と考える。

高台付坏は22点を図化した。そのうち、20点はS X 701・S G 702からの出土である。底部切り離しはすべて回転ヘラ切りである。形態と法量などから以下の5類に分類した。A：大振り

で器高が高く、口径と底径との差が小さいもの(175~181)。B：口径と底径との差が小さく、Aに比して器高が低いもの(5・29・182~186)。(183)・(185)・(186)には「上」、(184)には「十万」の墨書が底部にある。C：器形はAと似るが、Aに比して小振りなもの。体部が内弯ぎみに立ち上がるもの(187・188・192)と、体部が直線的に立ち上がるもの(189~191)とがある。(187)の底部には墨痕が残っており、転用硯とみられる。D：稜塊(193)。稜塊は1点のみの出土である。体部下半にヘラ削りを施し明瞭な稜を形成している。体部上半は直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。稜塊は周辺遺跡では吹浦遺跡で1点出土しているのみである。E：口径と底径との差が大きいもの(194)。高台形状、高台位置などにより細分が可能である。高台付皿は2点図下した。量的には僅少である。2点ともに底部は回転ヘラ切りによる切り離しである。(39)は底部が硯として使用されている。

須恵器の中で主体をなす坏は78点を図化した。そのうち、65点はE区河川跡から出土したものである。ここでは、河川跡から出土したヘラ切り須恵器坏について分類する。

A：器高が40mm以上と高く、体部の立ち上がりの角度が急なタイプ(120・149~151)。

(150)は、底部外面に「比口」の墨書がある。

B：底部の作りが丸底風になるタイプ(121~123・125・129)。(122)・(123)は、底部から体部下半にかけて回転ヘラ削りが施されている。墨書「上」が見られるものがある。

C：器高が30mm前後と低く、体部が直線的に開くタイプ(111・114~117・172)。

D：器高が30~40mm内外で、体部が直線的に開くタイプ(108~110・112・154~158)。「氏」の墨書を持つものがある。

E：底径65~80mm内外で、体部が緩やかに立ち上がるタイプ(130~132・134~138・160~166)。(136)は体部は緩やかに立ち上がり、口唇部は直立している。

F：底径が65~80mm内外で、体部は緩やかに立ち上がり口唇部で外反するタイプ(141~148・168~171)。(141)の底部には、「八部」の墨書がある。

年代観については、A・Bが古く8世紀第4四半期に比定できる。また、(173)は9世紀第2四半期に比定できる回転糸切りの須恵器坏であり、この時期を上限としているものと推定される。

A・B・C区出土の須恵器坏は底部回転糸切りが主体をなし、上記の河川跡出土の土器よりも新しい一群である。

甕は、須恵器全体の約30%をしめるが、破片での出土のため全形を知り得るものは少なく、河川跡から出土したものを中心に図示した。河川跡から出土したものは大型品が多くみられる。底部形状まで知り得るものは少なかったが、(221)は丸底を呈する。

壺は7点図化した。長頸壺と短頸壺に類別できるが、破片のため全形を知り得るものは少ない。(210)は長頸壺の頸部である。(213)は短頸壺である。体部はタタキ成形の後上半部はカキメ状の調整、下半部はナデによる調整が伺える。(212)の底部は、回転ヘラ削り調整の後高台を付けている。体部の下端部もヘラ削りが施され、内側には指押痕がみられる。

注目すべきは、鳥形土器が2点出土していることである。鳥形土器は平成6年度に堂田遺跡から当地域で初見され、平成7年度の本遺跡調査でも出土している。(24)は破片1点のみで全

形を知り得ることはできないが、胸部の様子が確認できる。(214)はE区河川跡からの出土である。羽～腹の部分、腹の部分が出土している。羽の部分は条線で表され、羽と体部の区別に隆線を用いている。体部には、脚部が剥落した痕跡がみられる。堂田遺跡出土のものと同様に、胴部は球形に整形され、脚を張り付けたものとみられる。

(3) 赤焼土器

調査区の全域から出土し、その出土量は今次の調査で出土した遺物の中で最も多く、破片集計で約70%にのぼる。これは、1次・2次調査でも同様の傾向にあり、遺跡の性格をよく表している。器種は坏・高台付坏・甕・小壺が出土している。破片集計では、坏と甕が約半数ずつであり、高台付坏はごく僅少である。

高台付坏は3点を図化した。すべて底部は回転糸切りの後高台が付されている。(18)は器高が低く、皿状を呈する。(36)は歪みが大きい。

坏は赤焼土器の中では最も図示点数が多く50点を図示した。以下の3類に分類した。A類：底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる一群(13・14・17・21・33・43・46・49・51・56・61・66・73・77・83・85・89・92・93・102・103)。口径は概して120mm内外の小振りなもの、130mm内外のもの、160mm内外の大振りなものの3種に分けられる。また、ロクロによる器面調整で肉厚になる稜を作り出しているものが多い。(33)・(83)は口唇部に油脂が付着しており灯明皿に使用したものと考えられる。(43)の底部には判読不明の墨書痕と、「×」のヘラ印痕がある。(89)の底部外面には「氏」の墨書が描かれている。B類：底部から口縁部にかけて丸みを帯びながら立ち上がる一群(16・27・38・41・67・68・74・76・82・88・90)。口径は120mm内外のものと、130mm内外のものに分けられ、大振りなものはみられなかった。(27)には底部に、(41)には体部にそれぞれ判読不明の墨書痕がある。(38)の底部には墨書「高」(74)には「有」がそれぞれ底部に描かれている。(67)は器高が33mmと低く、皿状を呈する。C類：底部から口縁にかけて緩やかに立ち上がり口唇部が外反する一群(15・28・30・31・47・48・50・52・63・64・79・91・94・98・104)。口径は120mm内外の比較的小振りなもの、130・140mm内外のもの、160mm内外の大振りなものの4種に分けられる。(30)・(64)は口唇部内面に油脂が付着しており、灯明皿に利用したものと考えられる。

甕は破片での出土量が多く、全形を知り得る資料は少なかったが、口径を計測できたものについては大型と小型の甕があることがわかる。大型の甕は(58・59・65・81・96)で口径は200～276mmを測る。口縁部は、「く」の字状に外反し口唇部が垂直に立っているものが多い。(65)は外面にハケメ痕が、(96)には内外面ともに平行タタキ痕が確認できる。いずれにも煮沸の痕跡を示す黒色の煤が付着している。小型の甕は(19・20・40・45・55・57・69・75・78・81・84)である。口径を計測できる資料は少なかったが、100～200mmの範囲に入るものと思われる。底部は平底で、(19)・(20)・(84)は静止糸切りによる切り離しである。小型の甕も大型の甕同様煮沸の痕跡を示す黒色の煤が付着しているものが多い。

小壺は(75)・(83)の2点である。口径は83mm・95mmであり、口縁部はいずれも「く」の字状に外反する。

(4) 製塩土器

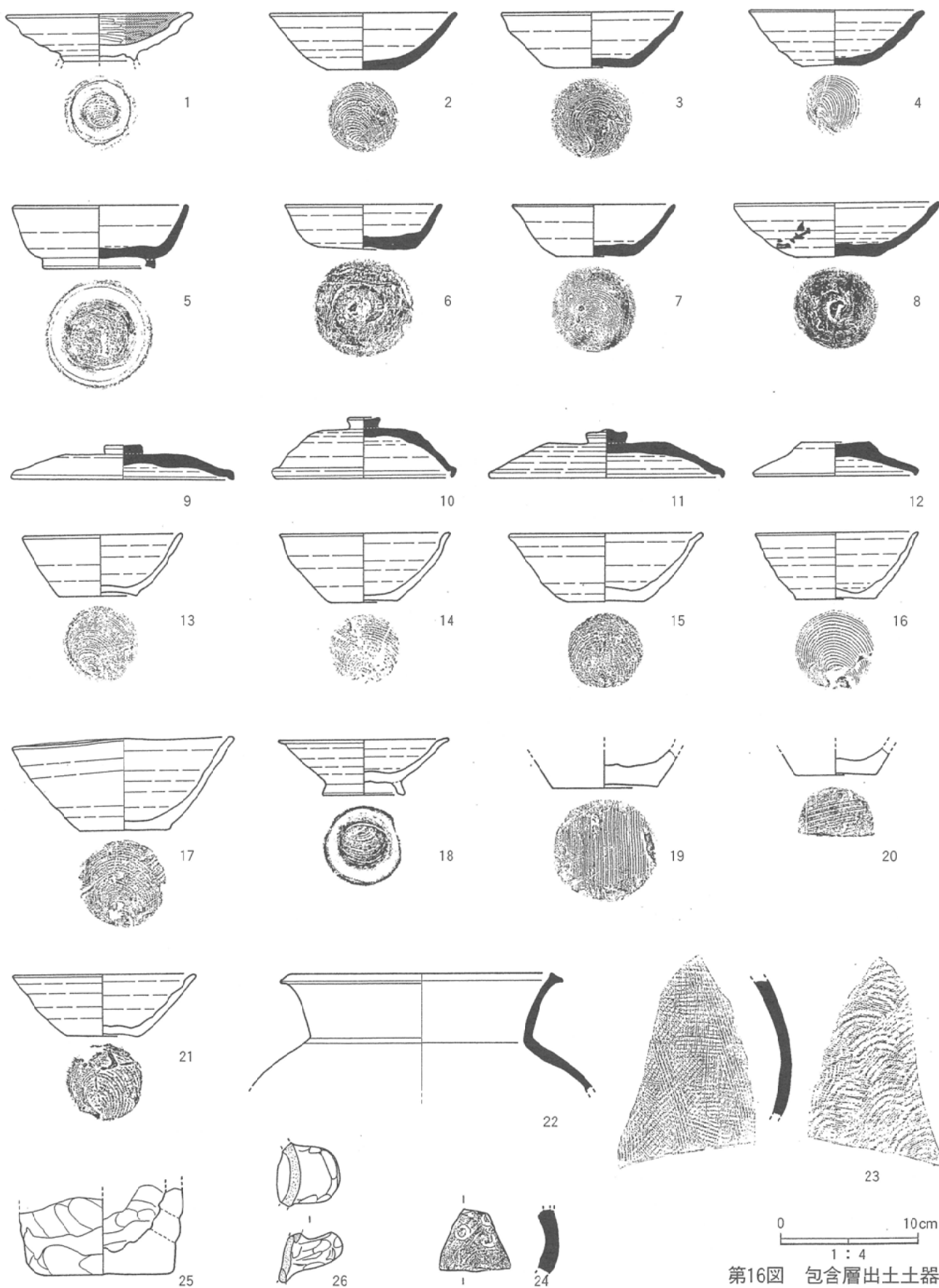
製塩土器は、調査区全域から出土しているがほとんどが小破片での出土であり、図化できたものは8点である。大型A類・B類と小型C類がある。(231)は筒状の支脚と考えられる。大型の製塩土器はバケツ状に開く深鉢形態をなす。口縁の形態で2種に分類できる。A類は底部から体部下半にかけては斜上方に立ち上がり、体部上半で外反するもの(227・228)。県内では、余目町千河原遺跡で出土している。口径は227が420mm、228が520mmを測る。円盤状の底部に粘土紐を輪積み状に巻き上げている。外面は輪積み痕が明瞭に残る。底部に指ナデ痕、口縁部に指ナデ痕とハケメ痕が確認できる。B類は底部から口縁部にかけて斜上方に立ち上がるタイプである(229)。県内では、境興野遺跡で出土している。体部上半のみの出土であるが口径は544mmを測る。A類と同様、口縁部には指ナデ痕とハケメ痕が確認できる。C類は小型の製塩土器である(25・44・226・232)。底径は90～135mmを測る。外面には輪積み痕、内面には指ナデとハケによる調整痕が残る。

(5) 灰釉陶器

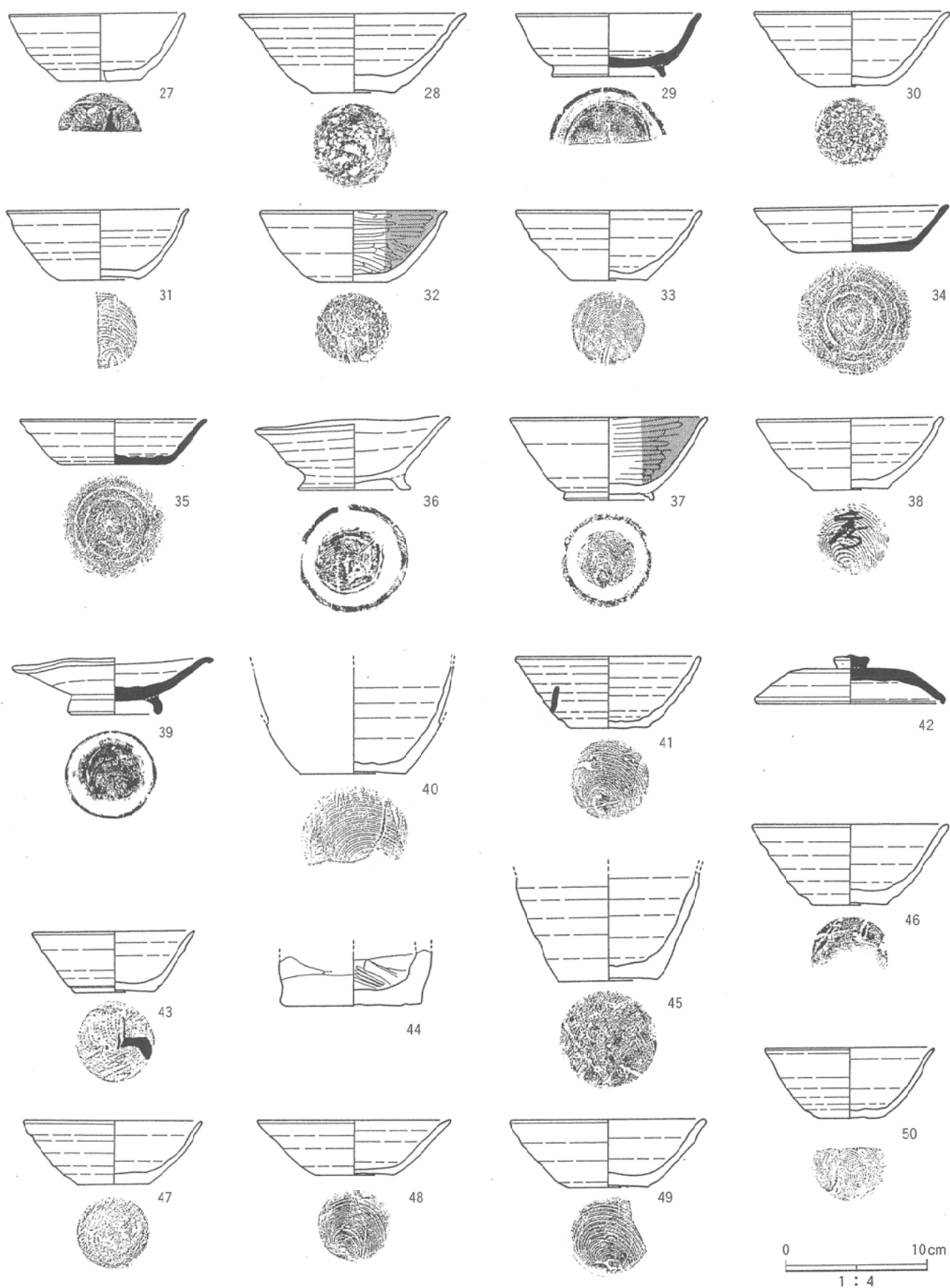
S D 460より3点出土している。99は皿、100・101は碗状の器形をなすものと考えられる。時期は猿投窯の黒笹90号窯期に比定され、9世紀後半と考えられる。(99)は口唇部が端返りの皿で、口縁部が施釉されていない。

2 陶磁器

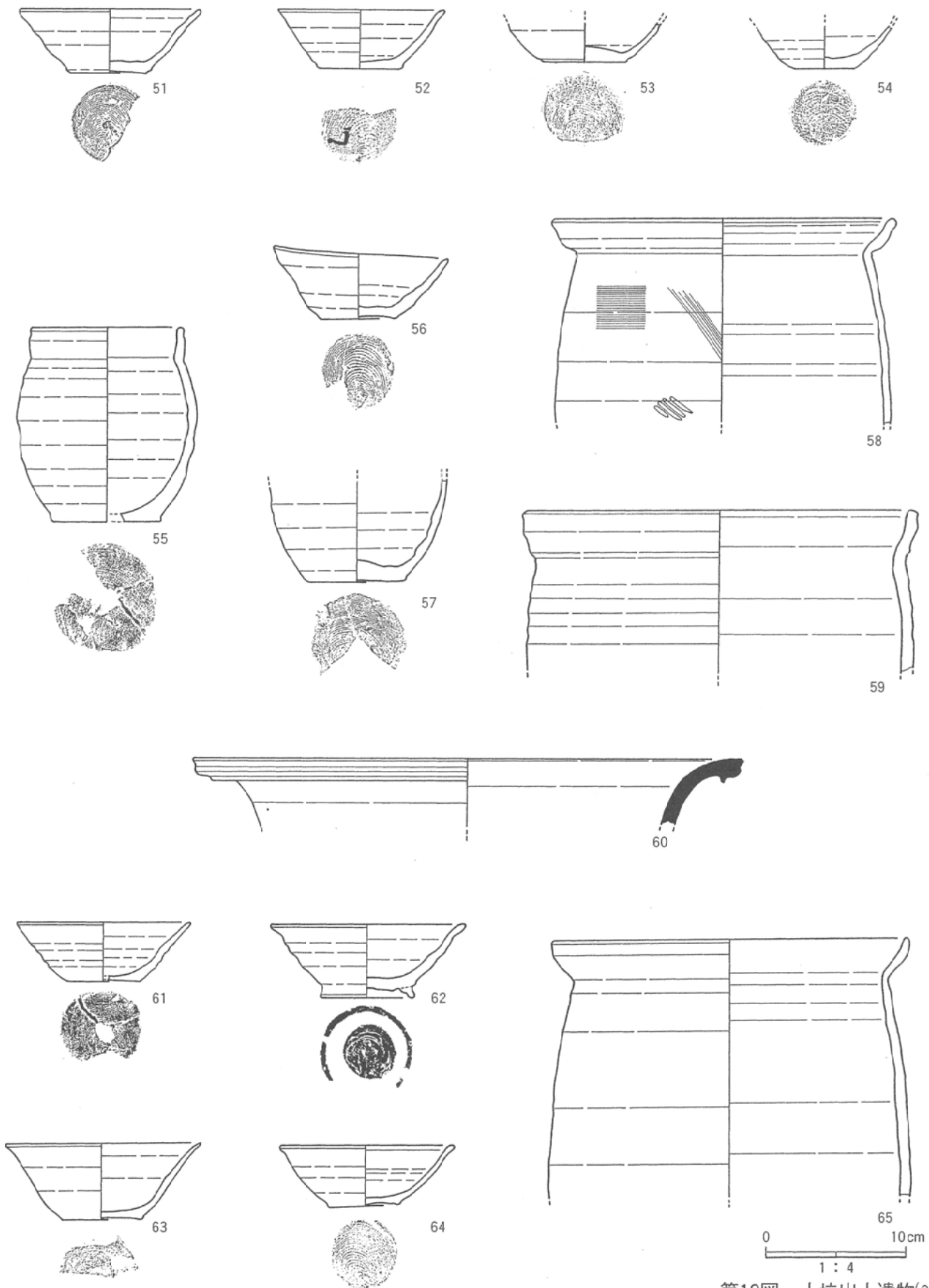
陶磁器は瀬戸・美濃(6点)、白磁(2点)、青磁(4点)、染付(8点)、朝鮮陶器(1点)が認められたが、全て包含層からの出土である。以下にその概要を述べる。〈瀬戸・美濃〉(233)は窖窯期の平碗である。体部外面下部に削り調整が見られる。(234)・(235)は碗である。(236)の小皿は見込みに蛇の目形に釉を剥ぎ取った痕がある。(237)は袴腰形香炉で釉に貫入が入る。体部内面は露胎である。(238)は窖窯期の天目茶碗片と見られる。〈白磁〉(239)は皿である。底部のみ1/2の残存であるが、高台の4カ所に抉りがあり見込みに4つの目跡があるものと考えられる。森田分類のD群にあたる(森田1982)。体部下半が露胎となる。(240)は小型の円筒形香炉である。態度が緻密で均一に施釉されている。〈青磁〉いずれも龍泉窯系のものと思われる。(241)は端返りの無紋碗で、濃い釉をかけているため体部外面にはわずかに凹凸が認められる。(242)は袴腰形香炉である。脚の付け根の胎部には、葉のような文が刻まれており、体部最下部のため釉の掛かりが厚い。内面と外面の釉色調が異なる。(243)は外面の体部上部に雷文帯がある丸碗である。内面は釉掛けにむらがある。(244)は端返りの碗である。〈染付〉(245～248)は碗である。(245)・(246)は口縁部小破片であるが、外面の波濤文帯から小野分類のC群I類にあたると考えられる(小野1982)。(246)の内外面には貫入が入る。(249～251)は皿である。(250)は見込みに玉取獅子を描かれる端返りの皿で、小野分類のB群VII類にあたる。(251)は見込み中央部を残して釉を剥ぎ取っている。以上の染付は16世紀代のものと思われる。(252)は肥前系の染付碗である。焼成が悪く、釉が灰褐色を呈している。高台外面は一部釉が流れるが、高台内は露胎となる。(253)は朝鮮陶器の蕎麦茶碗である。口唇部が若干内側に入り、釉肌はざらめいている。



第16図 包含層出土土器

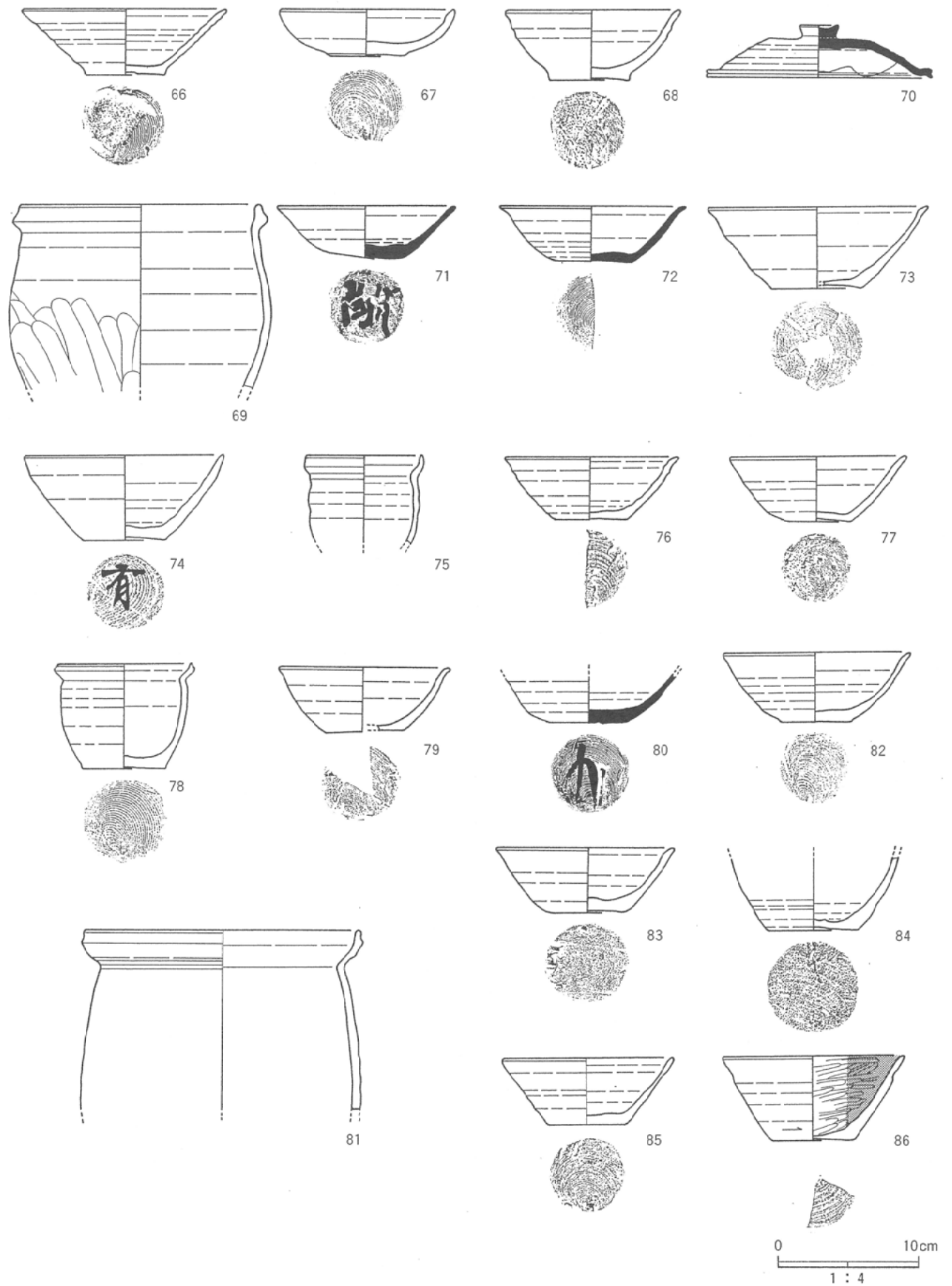


第17図 掘立柱建物跡・土坑出土遺物(1)

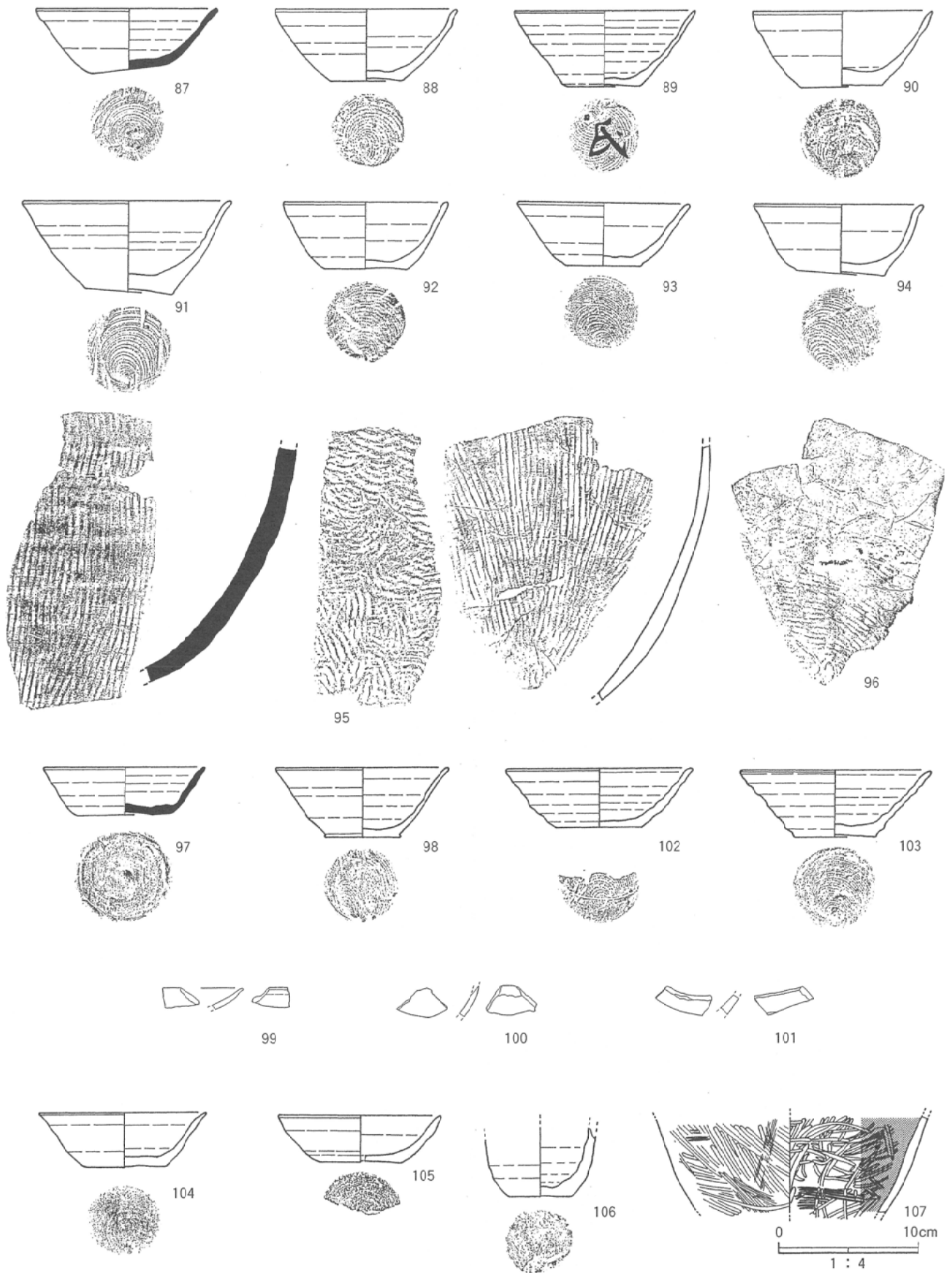


第18図 土坑出土遺物(2)

V 出土した遺物

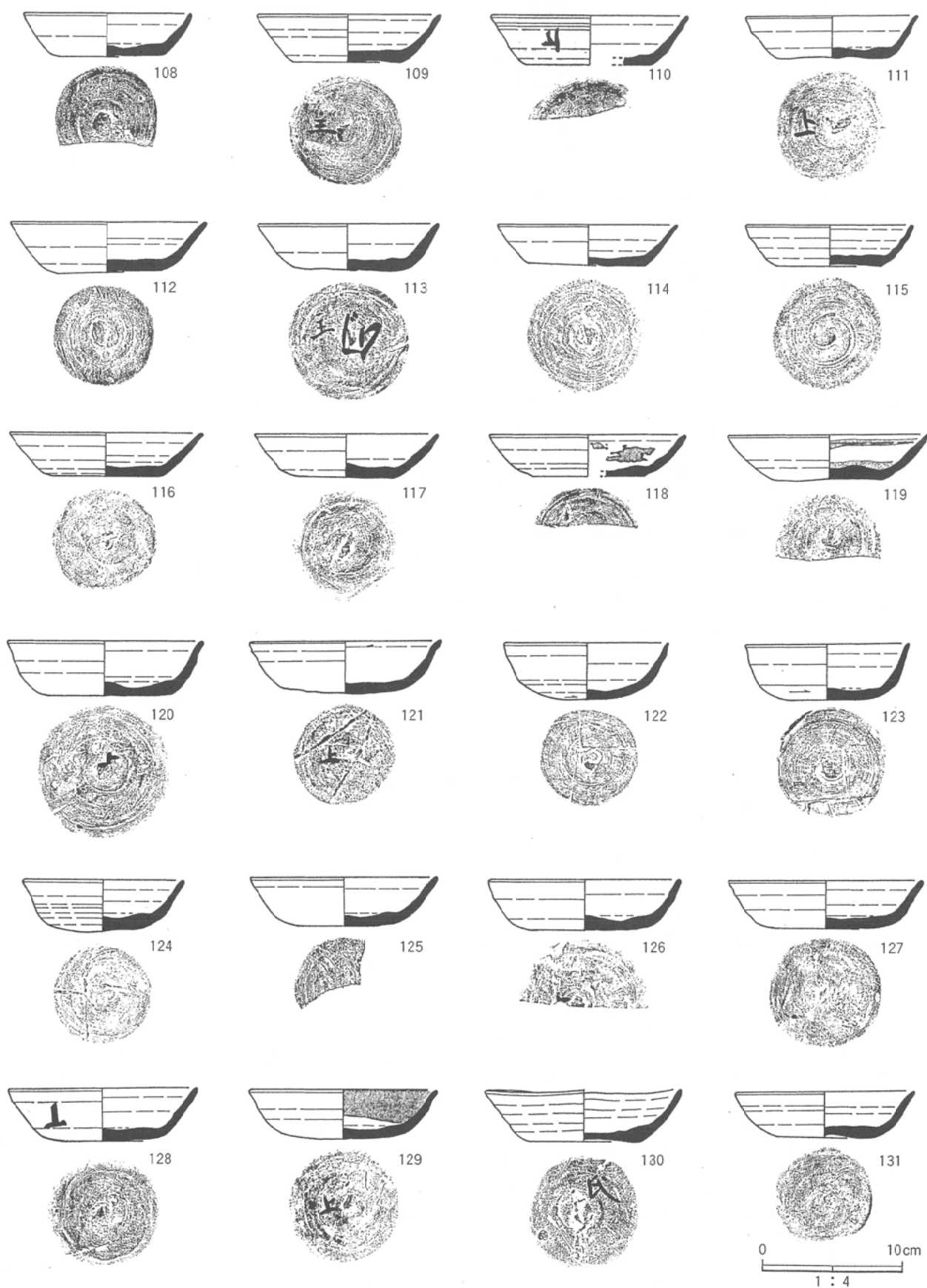


第19図 土坑出土遺物(3)・溝跡出土遺物(1)

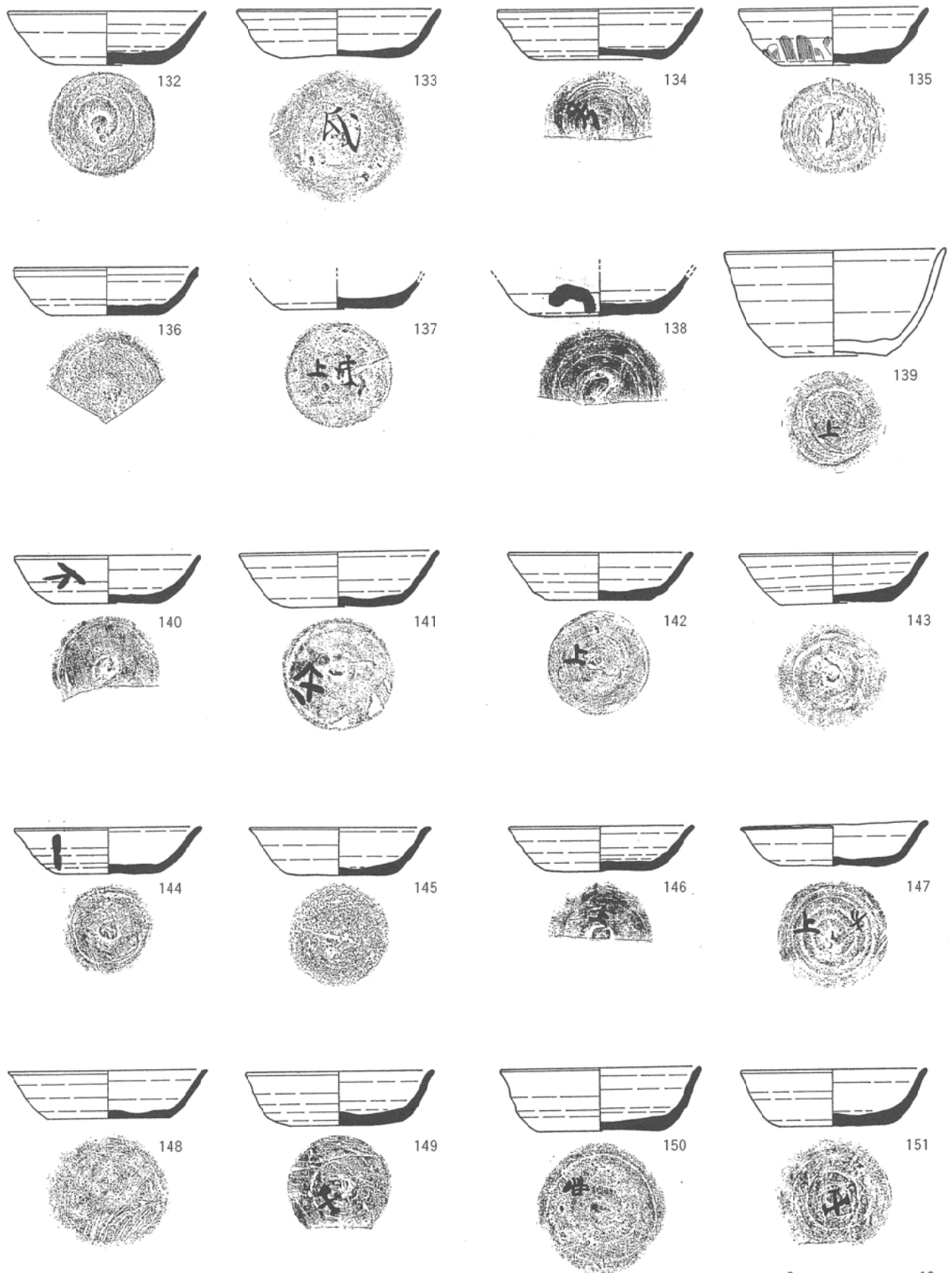


第20図 溝跡出土遺物(2)・河川跡出土遺物(1)

V 出土した遺物



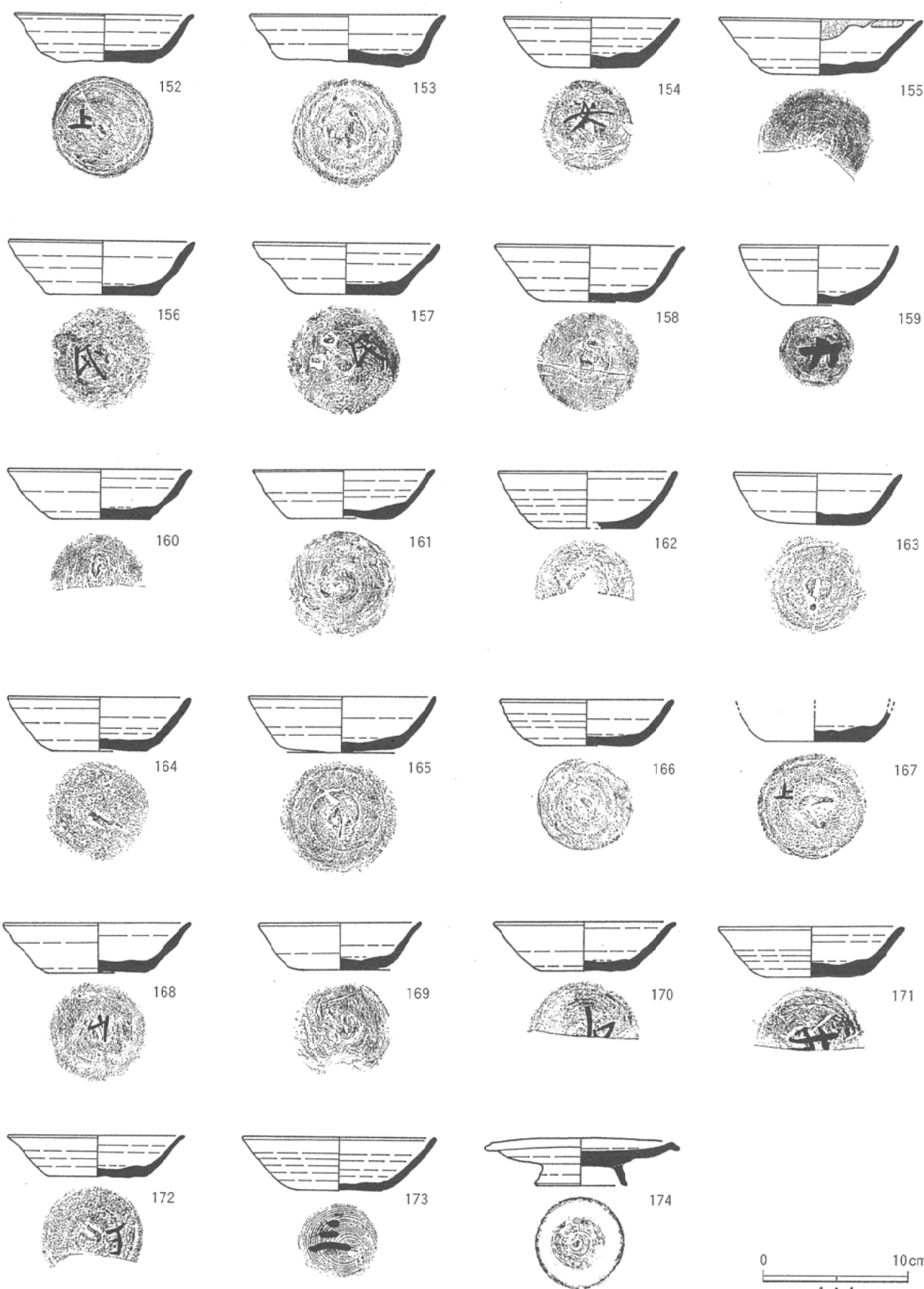
第21図 河川跡出土遺物(2)



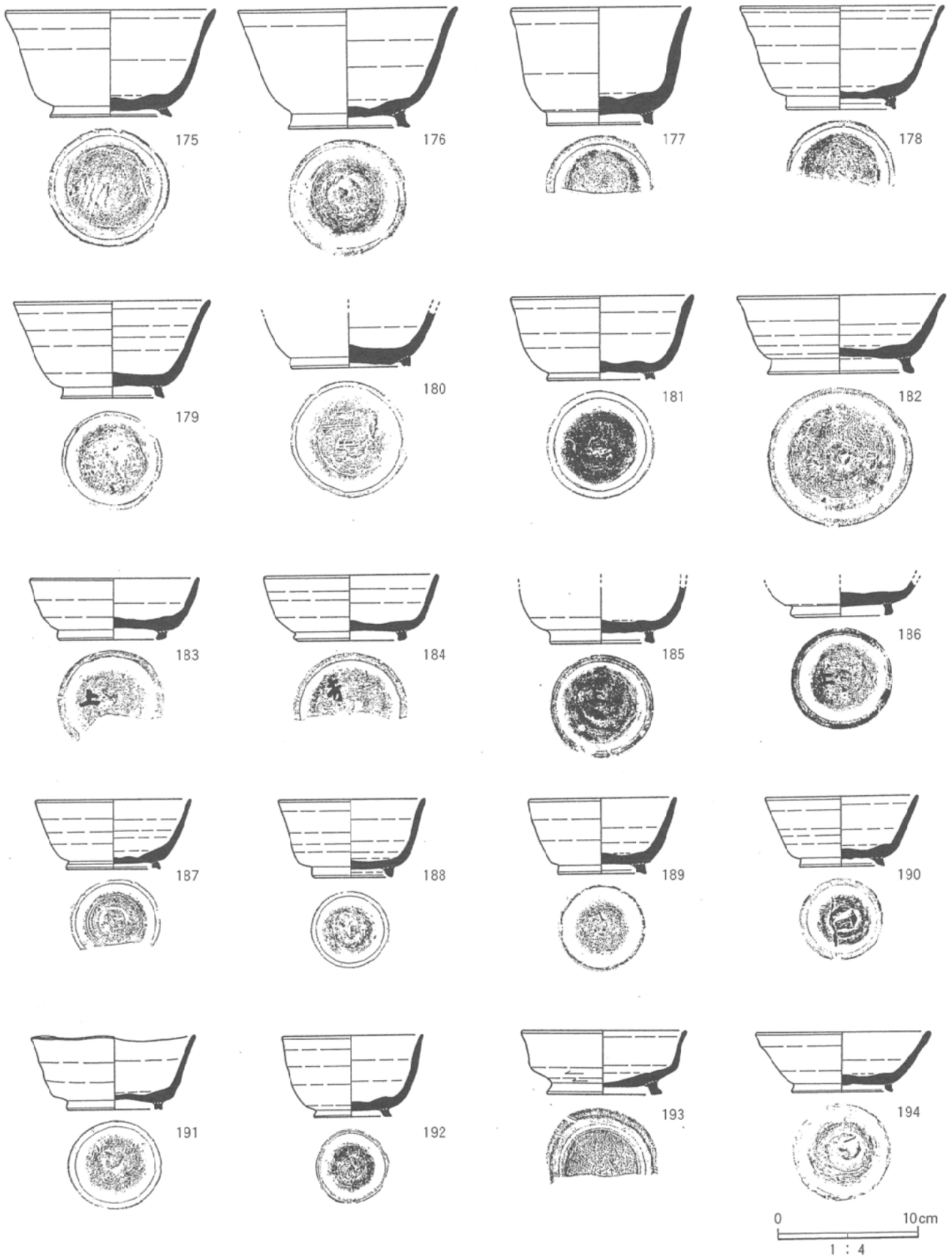
0 10cm
1 : 4

第22図 河川跡出土遺物(3)

V 出土した遺物

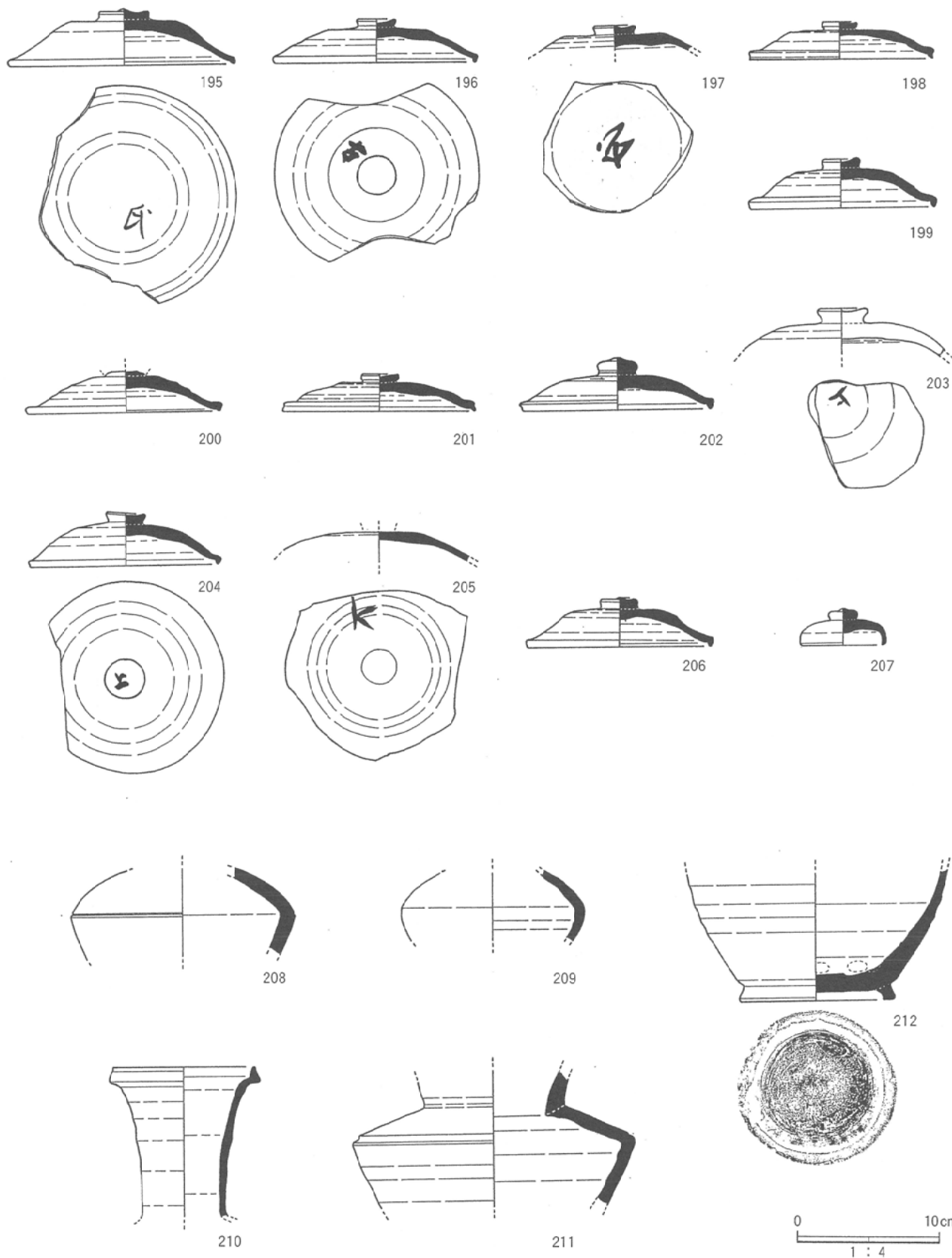


第23図 河川跡出土遺物(4)

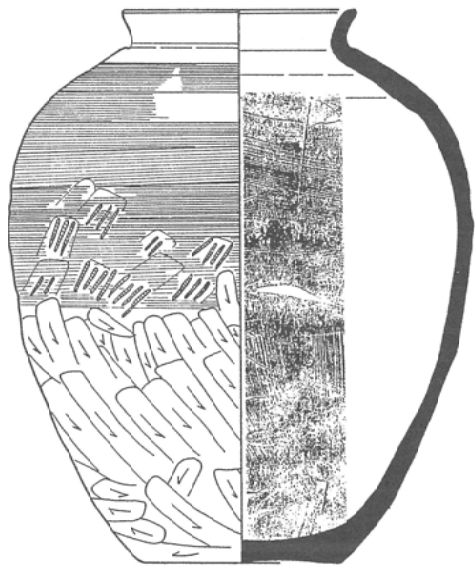


第24図 河川跡出土遺物(5)

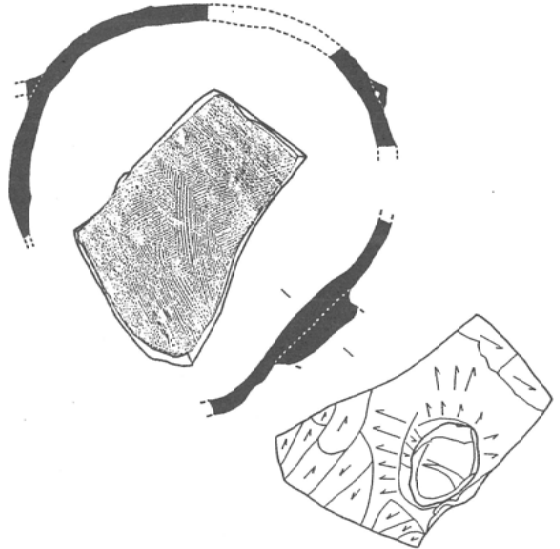
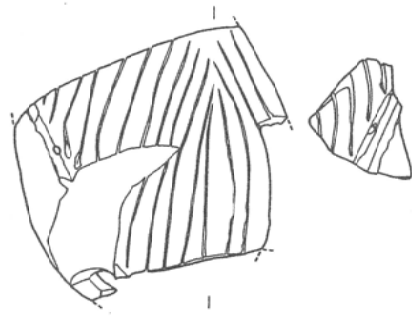
V 出土した遺物



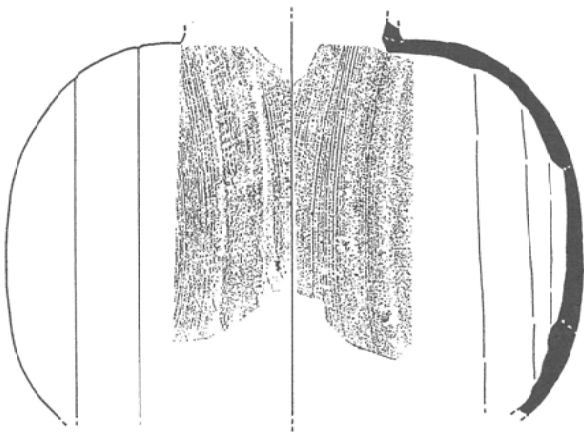
第25図 河川跡出土遺物(6)



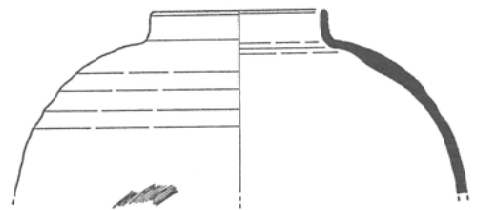
213



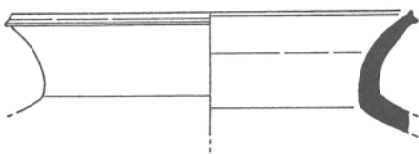
214



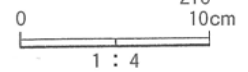
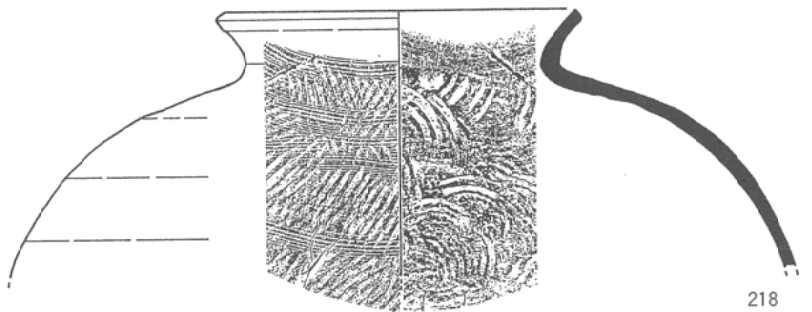
215



216

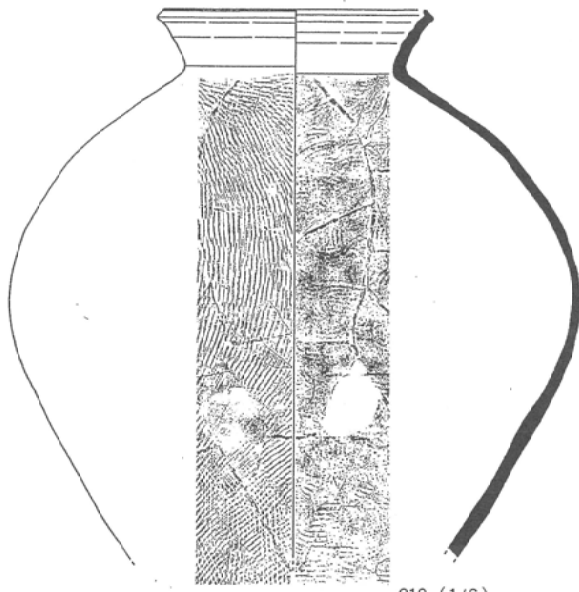


217

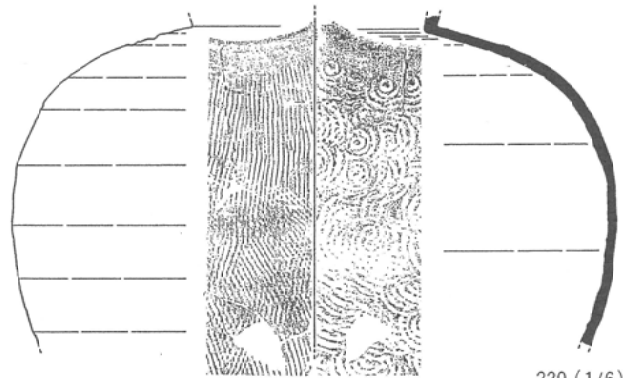


第26図 河川跡出土遺物(7)

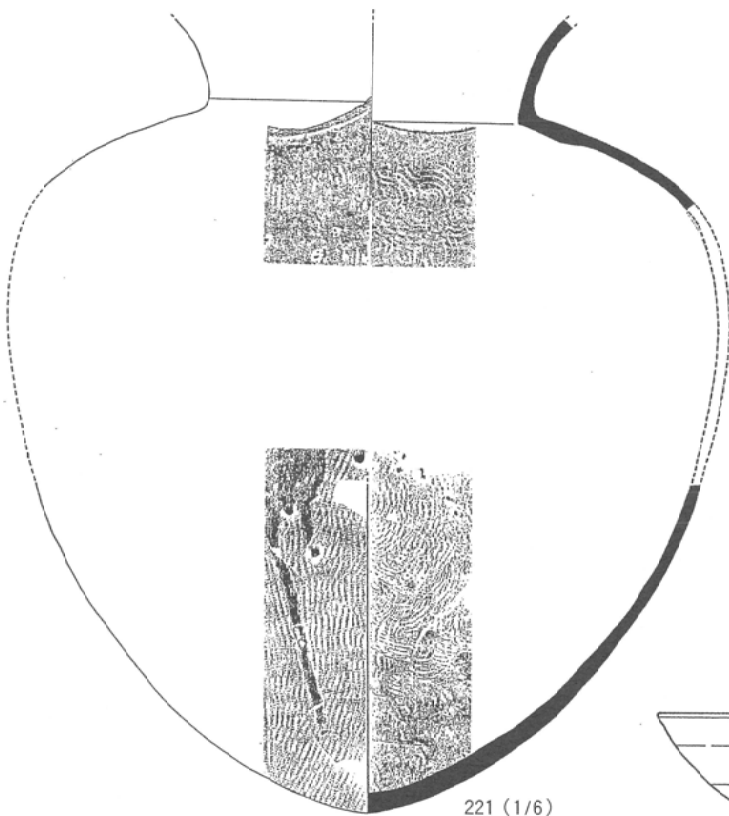
V 出土した遺物



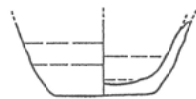
219 (1/6)



220 (1/6)



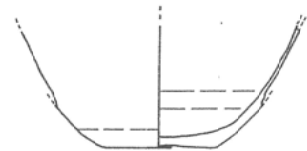
221 (1/6)



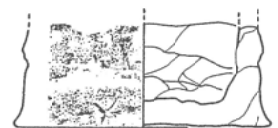
222



223



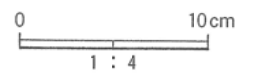
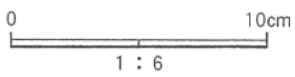
224



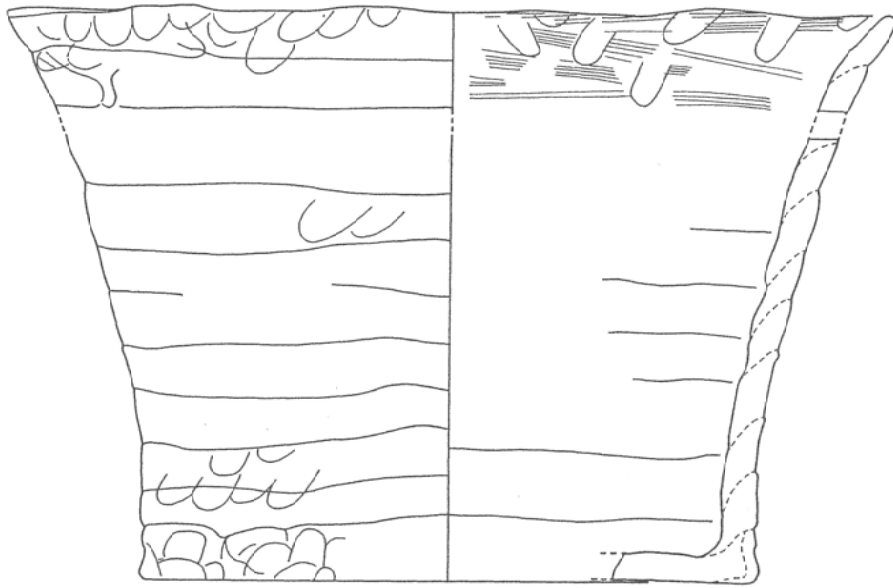
226



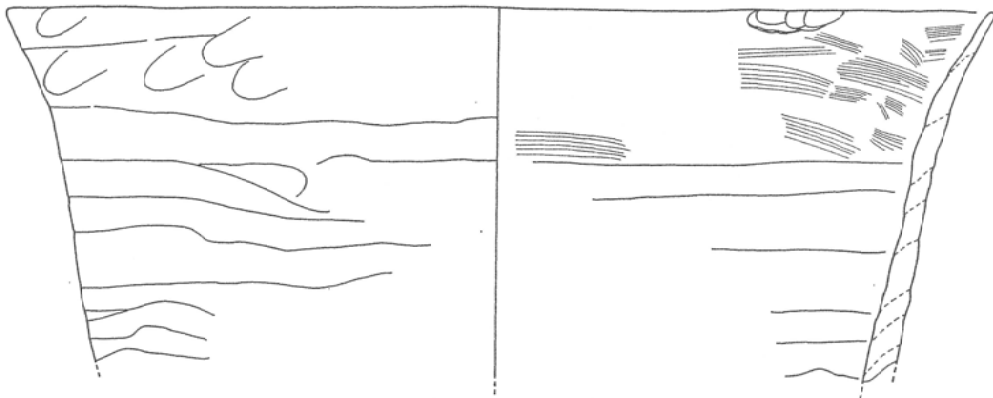
225



第27図 河川跡出土遺物(8)



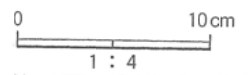
227



228



229



第28図 製塩土器(1)

V 出土した遺物



第29図 製塩土器(2)・陶磁器

表-2 出土土器観察表(1)

挿図 番号	遺物 番号	種別	器種	計測値(mm)				底部切	調整技法		出土地点	登録 番号	備考		
				口径	底径	器高	器厚		内面	外面					
16	1	黒色土器	高台付坏	134			6	回転糸切	ロクロ、ミガキ	ロクロ	A-1Ⅲ	RP1	内黒、高台部剥離		
	2	須恵器	坏	134	50	42	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	A-1Ⅲ		重ね焼き痕		
	3	須恵器	坏	130	56	40	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	A-1Ⅲ		重ね焼き痕		
	4	須恵器	坏	125	44	40	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	B-1Ⅲ	RP2	重ね焼き痕		
	5	須恵器	高台付坏	126	80	46	4.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	A-50Ⅲ	RP32			
	6	須恵器	坏	112	72	33	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	D-23Ⅲ	RP90		重ね焼き痕	
	7	須恵器	坏	116	58	38	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ・ナデ	A-82Ⅲ	RP19			
	8	須恵器	坏	148	60	39	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	D-72Ⅲ			体部墨書	
	9	須恵器	蓋	162		26	5		ロクロ	ロクロ・ケズリ	A-65Ⅲ	RP7			
	10	須恵器	蓋	134		44	4.5		ロクロ	ロクロ・ケズリ	D-44Ⅲ			内面墨痕、転用硯カ	
	11	須恵器	蓋	170		35	5		ロクロ	ロクロ・ケズリ	D-15Ⅲ				
	12	須恵器	蓋	118		24	5		ロクロ	ロクロ・ケズリ	A-62Ⅲ	RP6		つまみ部剥離	
	13	赤焼土器	坏	116	55	44	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	A-1Ⅲ				
	14	赤焼土器	坏	122	54	49	3.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	A-21Ⅲ				
	15	赤焼土器	坏	140	57	49	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	B-63Ⅲ	RP5			
	16	赤焼土器	坏	118	58	48	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	D-58Ⅲ				
	17	赤焼土器	坏	162	64	67	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	A-62Ⅲ	RP4		ゆがみあり	
	18	赤焼土器	高台付皿	122	58	40	4.3	回転糸切	ロクロ	ロクロ	B-4Ⅲ	RP84			
	19	赤焼土器	甕		75			静止糸切	ロクロ	ロクロ	B-4Ⅲ				
	20	赤焼土器	甕		59			静止糸切	ロクロ	ロクロ	D-54Ⅲ			二次焼成	
	21	赤焼土器	坏	132	55	44	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK250F1	RP10			
	22	須恵器	甕	188			6		ロクロ	ロクロ	D-15Ⅲ				
	23	須恵器	甕				16		アテ・タタキ	タタキ	B-3Ⅲ			格子目状タタキ	
	24	須恵器	鳥型土器				9		沈線	タタキ	A-78Ⅲ			胸部羽毛痕	
	25	製塩土器			100		18	平底	指ナデ	指ナデ	B-1Ⅲ	RP3		二次焼成	
	26	赤焼土器	双耳坏								A-6Ⅲ			ヘラ削り成形	
17	27	赤焼土器	坏	126	60	48	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SB1-EB1			墨書	
	28	赤焼土器	坏	160	60	56	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK24				
	29	須恵器	高台付坏	130	80	45	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SK30				
	30	赤焼土器	坏	138	50	53	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK30	RP13		内外面口縁部煤付着	
	31	赤焼土器	坏	130	54	50	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK30	RP50			
	32	黒色土器	坏	130	52	51	4.5	回転糸切	ヘラミガキ	ロクロ	SK74	RP14		内黒	
	33	赤焼土器	坏	130	52	50	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK74	RP15		口縁部黒色煤付着	
	34	須恵器	坏	137	80	32	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SK81	RP17		重ね焼き痕	
	35	須恵器	坏	134	74	32	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SK81	RP16		重ね焼き痕	
	36	赤焼土器	高台付坏	137	80	47	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK82	RP18		ゆがみあり	
	37	黒色土器	高台付坏	140	65	59	4	回転糸切	ヘラミガキ	ロクロ	SK89	RP40		内黒、焼成不良	
	38	赤焼土器	坏	132	54	51	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK108F8	RP20		墨書「高」	
	39	須恵器	高台付皿	144	66	40	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SK108F9	RP21		転用硯、ゆがみあり	
	40	赤焼土器	甕		75		7	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK108F9	RP42		底部二次焼成、内面煤付着	
	41	赤焼土器	坏	131	58	51	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK108F9	RP43		体部墨書痕	
	42	須恵器	蓋	134		35	5		ロクロ	ロクロ・ケズリ	SP121				
	43	赤焼土器	坏	116	56	43	3	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK196F1	RP29		墨書、底部「×」ヘラ書き	
	44	製塩土器			100		11	平底	指ナデ	指ナデ	SK211			輪轡み痕	
	45	赤焼土器	甕		70		5.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SP220F1	RP33		二次焼成	
	46	赤焼土器	坏	138	54	57	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK250F1	RP10			
	47	赤焼土器	坏	128	52	45	3.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK250F1	RP37			
	48	赤焼土器	坏	136	56	39	3.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK250	RP76			
	49	赤焼土器	坏	138	57	48	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK250	RP38		内外面煤付着	
	50	赤焼土器	坏	120	52	50	3.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK250	RP39			
	18	51	赤焼土器	坏	130	55	46	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK250	RP68		
		52	赤焼土器	坏	120	62	42	4.2	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK250	RP76		墨書、内面煤付着
		53	赤焼土器	坏			60	3.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK250	RP76		
		54	赤焼土器	坏			47	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK250	RP70		

V 出土した遺物

表一 3 出土土器観察表(2)

挿図 番号	遺物 番号	種 別	器 種	計測値(mm)				底部切	調 整 技 法		出土地点	登録 番号	備 考
				口径	底径	器高	器厚		内 面	外 面			
18	55	赤焼土器	甕	110	80	140	7	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SP278		外面黒色煤付着
	56	赤焼土器	坏	127	55	48	5.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK378	R P 59	ゆがみあり
	57	赤焼土器	甕		70		6	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK378		外面煤付着
	58	赤焼土器	甕	246			8		ロクロ	ロクロ	SK378F1	R P 58	二次焼成
	59	赤焼土器	甕	276			8		ロクロ	ロクロ	SK378F1	R P 58	
	60	須恵器	甕	394			9		ロクロ	ロクロ	SK378		
	61	赤焼土器	坏	126	55	43	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK378		
	62	赤焼土器	高台付坏	140	68	53	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK378		焼成不良
	63	赤焼土器	坏	140	56	55	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK382	R P 66	
	64	赤焼土器	坏	125	50	44	4.3	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK409F1	R P 56	口縁部黒色煤付着
65	赤焼土器	甕	260			7.5		ロクロ	ロクロ	SP503	R P 74	内外面煤付着	
19	66	赤焼土器	坏	144	56	47	4.4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK455		皿状
	67	赤焼土器	坏	124	55	33	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SP504		外面煤付着
	68	赤焼土器	坏	124	57	50	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SP504		内外面煤付着
	69	赤焼土器	甕	172			7		ロクロ	ロクロ・ミガキ	SK504	R P 82	転用硯
	70	須恵器	甕	159		37	4.5		ロクロ	ロクロ	SX601	R P 95	墨書、重ね焼き痕
	71	須恵器	坏	126	52	37	4.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SK601	R P 94	内面煤付着
	72	須恵器	坏	132	56	39	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SX601	R P 91	外面黒色煤付着
	73	赤焼土器	坏	156	66	58	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SX601	R P 100	
	74	赤焼土器	坏	138	57	61	7	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK601	R P 96	墨書「有」
	75	赤焼土器	小型壺	83			4		ロクロ	ロクロ	SX601	R P 100	外面煤付着
	76	赤焼土器	坏	124	54	45	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK628		
	77	赤焼土器	坏	126	50	47	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD 44		
	78	赤焼土器	小型壺	95	60	75	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD185		外面煤痕
	79	赤焼土器	坏	122	56	46	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD185	R P 24	口唇部煤付着
	80	須恵器	坏		56		4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD185F1	R P 23	転用硯、墨書「力」
	81	赤焼土器	甕	200			5.7		ロクロ	ロクロ	SD186		
	82	赤焼土器	坏	134	50	49	3.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD187	R P 28	
	83	赤焼土器	坏	127	58	46	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD187F1	R P 26	内面煤付着
84	赤焼土器	甕		66		4.5	制止糸切	ロクロ	ロクロ	SD188F2	R P 27	内外面煤付着	
85	赤焼土器	坏	123	56	47	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD225			
86	黒色土器	坏	130	58	60	4.5	回転ヘラ	ヘラミガキ	ロクロ	SD231F1	R P 79	内黒、底部下端ヘラ削り	
87	須恵器	坏	132	54	45	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD231F1	R P 67	重ね焼き痕	
88	赤焼土器	坏	130	53	52	4.3	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD231F1	R P 71	体部外面煤付着	
89	赤焼土器	坏	130	54	55	3	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD231F1	R P 72	墨書「氏」	
90	赤焼土器	坏	128	58	55	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD231F1	R P 78	焼成不良	
91	赤焼土器	坏	150	64	65	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD231F1	R P 36		
92	赤焼土器	坏	118	60	49	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD231F2	R P 80		
93	赤焼土器	坏	124	54	46	4.3	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD231F1	R P 34		
94	赤焼土器	坏	122	61	50	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD231F1	R P 81		
95	須恵器	甕				14		アテ	タタキ	SD231	R P 73		
96	赤焼土器	甕				8		アテ	タタキ	SD231	R P 35		
97	須恵器	坏	116	70	34	3.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SD359F2	R P 55	重ね焼き痕	
98	赤焼土器	坏	124	54	50	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD460		内面煤付着	
99	灰釉陶器	皿								SD460		猿投産K90様式	
100	灰釉陶器	椀								SD460		猿投産K90様式	
101	灰釉陶器	椀								SD460		猿投産K90様式	
102	赤焼土器	坏	134	62	42	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD525		内外面煤付着	
103	赤焼土器	坏	136	58	48	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD525	R P 86		
104	赤焼土器	坏	120	62	39	3.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SX431F1	R P 61		
105	土師器	坏	116	60	34	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX701F1	R P 123	口縁部煤付着、底部～体部下端ケズリ	
106	土師器	小壺		46		7	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		体部下端ケズリ	
107	黒色土器	鉢				6		ミガキ	ミガキ	SG702F3		内黒	
21	108	須恵器	坏	120	76	31	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	D-76Ⅲ		重ね焼き痕

表-4 出土土器観察表(3)

挿図 番号	遺物 番号	種 別	器 種	計測値(mm)				底部切	調 整 技 法		出土地点	登録 番号	備 考
				口径	底径	器高	器厚		内 面	外 面			
21	109	須恵器	坏	130	80	34	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX701F1	R P 107	墨書「主」、重ね焼き痕
	110	須恵器	坏	140	90	35	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F2		体部外面墨書「上」
	111	須恵器	坏	122	80	30	3	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	R P 185	墨書「上」、重ね焼き痕
	112	須恵器	坏	140	72	36	5.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	R P 165	重ね焼き痕
	113	須恵器	坏	130	84	33	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	R P 169	墨書「主」「氏」
	114	須恵器	坏	128	84	29	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	R P 146	刻書「十」、重ね焼き痕
	115	須恵器	坏	119	79	28.5	3	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		重ね焼き痕
	116	須恵器	坏	138	75	31	4.2	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		
	117	須恵器	坏	130	80	31	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		内外面煤付着
	118	須恵器	坏	140	80	33	4.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX701F1		内面漆付着
	119	須恵器	坏	142	77	32	4.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX701F1	R P 111	内面漆付着
	120	須恵器	坏	140	95	39	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX701F1		墨書「上」
	121	須恵器	坏	136	70	37	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX701F1	R P 109	墨書「上」、火禱痕
	122	須恵器	坏	116	50	41	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ・ケズリ	SG702F3		底部黒色煤付着
	123	須恵器	坏	116	62	40	4.3	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ・ケズリ	SG702F3		内外面黒色煤付着
	124	須恵器	坏	116	70	36	3	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		火禱痕、内面墨痕付着
	125	須恵器	坏	132	70	35	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		墨書「上」カ
	126	須恵器	坏	136	90	36	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702		外面黒色煤付着
	127	須恵器	坏	136	80	34	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		重ね焼き痕、外面墨書「T」
	128	須恵器	坏	136	80	38	4.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	R P 150	墨書「上」、内外面煤付着、火禱痕
	129	須恵器	坏	134	80	35	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		墨書「氏」
130	須恵器	坏	140	82	37	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	R P 158	重ね焼き痕	
131	須恵器	坏	126	68	32	4.2	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	R P 153	重ね焼き痕	
132	須恵器	坏	136	70	37	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		墨書「氏」	
133	須恵器	坏	140	95	32	4.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	R P 171	墨書「十万」	
134	須恵器	坏	140	80	35	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	R P 177	口縁部内面煤付着、底部ヘラ削り	
135	須恵器	坏	130	70	40	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ・ハケメ	SG702F3	R P 173	火禱痕、口縁部直立蓋付き坏カ	
136	須恵器	坏	126	80	33	4.6	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	R P 163	底部墨書「上」「？」	
137	須恵器	坏		75		3.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	R P 137	体部外面墨書	
138	須恵器	坏		88		3.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		墨書「上」、底部～体部下端ケズリ、赤彩	
139	土師器	坏	152	72	74	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG702F3	R P 126	体部外面墨書「下」重ね焼き痕	
140	須恵器	坏	128	75	33	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F4	R P 157	墨書「八部」	
141	須恵器	坏	138	76	38	3.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX701F1	R P 121	墨書「上」、重ね焼き痕	
142	須恵器	坏	126	72	33	3.8	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	R P 182	内面黒色煤付着	
143	須恵器	坏	132	80	34	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	R P 172	内面墨書「I」	
144	須恵器	坏	130	60	32	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	R P 183	二次焼成	
145	須恵器	坏	126	68	33	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	R P 139	墨書「上」	
146	須恵器	坏	128	70	31	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	R P 166	墨書「上」「十万」、重ね焼き痕	
147	須恵器	坏	130	79	27	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	R P 151	重ね焼き痕	
148	須恵器	坏	137	86	33	3.7	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		墨書	
149	須恵器	坏	130	70	37	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		墨書「比口」	
150	須恵器	坏	139	92	44	4.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	R P 181	墨書、重ね焼き痕	
151	須恵器	坏	128	76	39	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		墨書「上」、重ね焼き痕	
152	須恵器	坏	126	72	33	3.7	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F4	R P 148	外面黒色煤付着	
153	須恵器	坏	136	74	33	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F4	R P 138	墨書「安」、体部下端部煤付着	
154	須恵器	坏	122	65	35	4.8	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX701F1	R P 144	口縁部内面黒色煤付着	
155	須恵器	坏	140	80	39	30	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX701F1	R P 140	墨書「氏」、重ね焼き痕	
156	須恵器	坏	132	74	38	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	R P 143	墨書「氏」	
157	須恵器	坏	130	76	36	4.3	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		重ね焼き痕	
158	須恵器	坏	130	68	40	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	R P 175	墨書「力」カ、口縁部煤付着	
159	須恵器	坏	110	50	42	3.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX701F1	R P 135		
160	須恵器	坏	130	70	35	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX701F1		底部ヘラ調整	
161	須恵器	坏	126	75	34	3.8	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX701F1	R P 120		
162	須恵器	坏	126	68	40	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	R P 164		

V 出土した遺物

表一5 出土土器観察表(4)

挿図 番号	遺物 番号	種 別	器 種	計測値(mm)				底部切	調 整 技 法		出土地点	登録 番号	備 考
				口径	底径	器高	器厚		内 面	外 面			
23	163	須恵器	坏	116	64		5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		
	164	須恵器	坏	129	70	35	4.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F2		内外面黒色煤付着、二次焼成
	165	須恵器	坏	130	80	38	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F4		火襷痕
	166	須恵器	坏	122	67	39	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		外面黒色煤付着、重ね焼き痕
	167	須恵器	坏		76	32	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		墨書「上」
	168	須恵器	坏	132	70		5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX701F1	R P 142	墨書「氏」、口縁部煤付着
	169	須恵器	坏	112	67	35	3.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ・ナデ	SG702F3	R P 122	重ね焼き痕
	170	須恵器	坏	128	76	33	3.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		墨書「氏」カ
	171	須恵器	坏	130	80	34	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	R P 168	墨書「十万」
	172	須恵器	坏	125	70	35	3	回転ヘラ	ロクロ 10	ロクロ	SG702F3	R P 176	墨書「?」「上」
173	須恵器	坏	135	54	29	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG702F2		墨書「三」	
24	174	須恵器	高台付皿	136	63	37	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX701F1	R P 102	
	175	須恵器	高台付坏	150	86	33	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX701F1	R P 117	
	176	須恵器	高台付坏	156	86	73	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	R P 130	
	177	須恵器	高台付坏	128	76	85	6.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F4	R P 149	灰被り
	178	須恵器	高台付坏	146	79	84	3.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		灰被り
	179	須恵器	高台付坏	140	73	74	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	R P 131	
	180	須恵器	高台付坏		85	69	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	D-78Ⅲ	R P 108	
	181	須恵器	高台付坏	130	78		4.6	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	R P 127	
	182	須恵器	高台付坏	148	105	60	5	回転ヘラ	ロクロ 20	ロクロ	SG702F3	R P 179	内外面黒色煤付着
	183	須恵器	高台付坏	120	77	56	3	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	R P 161	墨書「上」
	184	須恵器	高台付坏	125	80	44	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		墨書「十万」
	185	須恵器	高台付坏		75	47	4.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		墨書「上」
	186	須恵器	高台付坏		73		5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		墨書「上」
	187	須恵器	高台付坏	110	66		3.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX701F1	R P 136	転用硯、重ね焼き痕
	188	須恵器	高台付坏	104	57	50	3.2	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		
	189	須恵器	高台付坏	106	61	56	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		
	190	須恵器	高台付坏	108	61	54	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		
191	須恵器	高台付坏	117	66	50	3.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	R P 124	ゆがみあり	
192	須恵器	高台付坏	100	54	52	3.6	回転ヘラ	ロクロ 30	ロクロ	SG702F4	R P 156		
193	須恵器	稜碗	118	82	58	3	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3			
194	須恵器	高台付坏	126	72	46	4.2	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	R P 132		
25	195	須恵器	蓋	160		43	4		ロクロ	ロクロ・ケズリ	SG702F3	R P 167	内面墨書「氏」
	196	須恵器	蓋	144		40	5		ロクロ	ロクロ・ケズリ	SG702F3	R P 187	外面墨書「古」
	197	須恵器	蓋			31	3.5		ロクロ	ロクロ・ケズリ	SG702F3		墨書「氏」
	198	須恵器	蓋	130			4		ロクロ	ロクロ・ケズリ	SG702F3		
	199	須恵器	蓋	132		27	5		ロクロ	ロクロ・ケズリ	SG702F3	R P 128	転用硯
	200	須恵器	蓋	140		35	5		ロクロ	ロクロ・ケズリ	D-77Ⅲ	R P 110	
	201	須恵器	蓋	136		30	6		ロクロ	ロクロ・ケズリ	SG702F2	R P 147	
	202	須恵器	蓋	136		26	7		ロクロ 40	ロクロ・ケズリ	SG702		重ね焼き痕
	203	土師器	蓋			37	4		ロクロ	ロクロ・ケズリ	SG702F3	R P 184	内面墨書「上」、赤彩、139の蓋カ
	204	須恵器	蓋	136			5		ロクロ	ロクロ	SG702F3	R P 159	つまみ墨書「上」、重ね焼き痕
	205	須恵器	蓋			37	5		ロクロ	ロクロ・ケズリ	SG702F3		墨書外面
	206	須恵器	蓋	130			4.3		ロクロ	ロクロ・ケズリ	SG702F4	R P 141	
	207	須恵器	蓋	60		35	4.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ・ケズリ	SG702F3		長頸壺の蓋カ
	208	須恵器	壺			26	9		ロクロ	ロクロ	D-77Ⅲ		灰被り
209	須恵器	壺				6.5		ロクロ	ロクロ	SX701F2			
210	須恵器	長頸壺	102			6.5		ロクロ	ロクロ	SX701F2			
211	須恵器	壺				8		ロクロ	ロクロ・ケズリ	SG702F3			
212	須恵器	壺		110		8	回転ヘラ	ロクロ 50	ロクロ・ケズリ	SG702F3	R P 125	体部内面下端指押痕	
26	213	須恵器	壺	120	112		7	回転ヘラ	ロクロ	タタキ・カキメ	SX701	R P 101	
	214	須恵器	鳥形壺			293	8		ナデ・タタキ	沈線・ケズリ	SG702F3		
	215	須恵器	横瓶				8		ロクロ	ロクロ・ハケメ	SG702F4	R P 155	
	216	須恵器	短頸壺	92			5		ロクロ	ロクロ	SG702F3		

表一 6 出土土器観察表(5)

挿図 番号	遺物 番号	種 別	器 種	計測値(mm)				底部切	調 整 技 法		出土地点	登録 番号	備 考
				口径	底径	器高	器厚		内 面	外 面			
26	217	須恵器	甕	210			9		ロクロ	ロクロ	D-79Ⅲ		
	218	須恵器	甕	190			7		アテ	タタキ・ハケメ	SG702		
27	219	須恵器	甕	216			5		アテ	タタキ	D-77Ⅲ	R P 105	
	220	須恵器	甕				7		アテ	タタキ・ハケメ	D-78Ⅲ	R P 106	
	221	須恵器	甕				10		アテ	タタキ	SG702 F 3		
	222	赤焼土器	小型甕		52		4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG702 F 3		
	223	土師器	坏	127	76	38	3.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ・ケズリ	SG702 F 3	R P 118	焼成堅め、内外面筆により赤彩
	224	赤焼土器	甕		55		4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG702 F 3	R P 129	内外面煤痕
	225	赤焼土器	坏	144	54	50	4.2	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG702 F 3		内外面煤付着、灯明皿使用カ
	226	製塩土器			135		15	平底	指ナデ	指ナデ、輪積痕	SG702 F 3		二次焼成
28	227	製塩土器		420	320		18	平底	指ナデハケメ	指ナデ	SK648	R P 112	輪積み巻き上げ痕、指整形
	228	製塩土器		520			13		指ナデハケメ	指ナデ	SK648	R P 112	輪積み巻き上げ痕、指整形
	229	製塩土器		544			13		指ナデハケメ	指ナデ	SK648	R P 112	輪積み巻き上げ痕、指整形
29	230	製塩土器					15		指ナデ	指ナデ	SK648	R P 112	輪積み巻き上げ痕、指整形
	231	製塩土器	支脚カ	150			13		指ナデハケメ	指ナデ	SK648	R P 112	内外面二次焼成
	232	製塩土器		116	90		13		指ナデハケメ	指ナデ	SK648	R P 112	輪積み巻き上げ痕、指整形

表一 7 陶磁器観察表

挿図 番号	遺物 番号	種 別	器 種	計測値(mm)			出土位置	色 調			備 考
				口径	底径	器高		内 面	外 面	胎 土	
29	233	瀬戸・美濃	平碗				A-75Ⅲ	5Y7/3浅黄色	5Y7/3浅黄色	2.5Y6/3にぶい黄色	灰釉、窰窯期
	234	瀬戸・美濃	碗				D-50Ⅲ	2.5Y7/4 浅黄色	2.5Y7/4 浅黄色	2.5Y7/3浅黄色	灰釉
	235	瀬戸・美濃	碗				B-50Ⅲ	10YR5/4にぶい黄褐色	10YR5/4にぶい黄褐色	10YR7/4にぶい黄褐色	灰釉
	236	瀬戸・美濃	皿		(48)		A-3Ⅲ	7.5Y7/2 灰白色	7.5Y4/3暗オリーブ色	2.5Y6/3にぶい黄色	灰釉
	237	瀬戸・美濃	香炉				B-41Ⅲ	10Y4/2オリーブ灰色	10Y4/2オリーブ灰色	N7/0灰白色	灰釉、袴腰形香炉
	238	瀬戸・美濃	天目茶碗	(110)			B-53Ⅲ	7.5Y2/1 黒色	7.5Y2/1 黒色	10YR8/2灰色	鉄釉、窰窯期
	239	白磁	皿		(44)		D-15Ⅲ	2.5Y8/2 灰白色	2.5Y8/2 灰白色	2.5Y7/3浅黄色	白磁釉、明15C
	240	白磁	香炉				D-106Ⅲ	10Y8/1 灰白色	10Y8/1 灰白色	N8/0灰白色	白磁釉、円筒形香炉
	241	青磁	碗				B-50Ⅲ	10Y6/2オリーブ灰色	10Y6/2オリーブ灰色	5Y7/1灰白色	青磁釉、元14C
	242	青磁	香炉				B-104Ⅲ	7.5Y6/2オリーブ灰色	10Y6/2オリーブ灰色	7.5Y7/1灰白色	青磁釉、袴腰形香炉、刻紋、明15C
	243	青磁	碗				A-81Ⅲ	10Y5/2オリーブ灰色	10Y5/2オリーブ灰色	N6/0灰色	青磁釉、雷紋帯
	244	青磁	碗				A-86Ⅲ	5Y5/4オリーブ色	5Y5/4オリーブ色	5Y6/1灰色	青磁釉、15C
	245	染付	碗				A-62Ⅲ			2.5Y8/1灰白色	透明釉、波濤紋帯、明
	246	染付	碗				A-62Ⅲ			2.5Y8/1灰白色	透明釉、波濤紋帯
	247	染付	碗				B-58Ⅲ			2.5Y7/1灰白色	透明釉
	248	染付	碗				B-91Ⅲ			N8/0灰白色	透明釉
	249	染付	皿				B-82Ⅲ			N8/0灰白色	透明釉
	250	染付	皿		(64)		B-89Ⅲ			N8/0灰白色	透明釉、玉取獅子
	251	染付	皿		40		B-97Ⅲ			N8/0灰白色	透明釉
	252	染付	碗		45		D-64Ⅲ	2.5Y8/1 灰白色	10Y5/2 灰色	2.5Y7/2灰黄色	透明釉、17C
	253	朝鮮陶器	碗				B-87Ⅲ	5Y6/1 灰色	5Y5/4灰色	5Y7/1灰白色	蕎麦茶碗、李朝16C



第30図 墨書集成(1)



0 5cm
1 : 2

第31図 墨書集成(2)

V 出土した遺物

表一 8 墨書集成(1)

挿図 番号	遺物 番号	種別	器種	底部切離	墨書部位	墨書名	出土地点	登録 番号	備考
	254	赤焼土器	高台付坏	回転糸切	底部	十万	S D 194		
	255	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	十万	S X 431F		
	256	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	十万	S G 702		
	257	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	十	D—41Ⅲ		
	258	須恵器	高台付坏	回転ヘラ	底部	十カ	S P 225		
	259	赤焼土器	坏	回転糸切	底部	万カ	A—63Ⅲ		
	260	須恵器	坏	回転糸切	底部	七	X O—Ⅲ		
	261	赤焼土器	坏	回転糸切	底部	式カ	B—33Ⅲ		内面墨痕
	262	須恵器	蓋	回転ヘラ	底部	十万	B—63Ⅲ		ヘラ書
	263	須恵器	蓋	回転ヘラ	底部	十万	B—57Ⅲ		ヘラ書
	264	須恵器	蓋	回転ヘラ	底部	十	A—60Ⅲ		ヘラ書
	265	須恵器	蓋	回転糸切	底部	三川カ	A—2Ⅲ		
	266	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	氏	S G 702F2		
	267	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	氏	S G 702F2		
	268	須恵器	坏		内面	上	S G 702F2		
	269	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	上	D—78Ⅲ		
	270	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	氏カ	S G 702F2		
	271	赤焼土器	高台付皿	回転糸切	体部外面	不明	S K 108F		
	272	赤焼土器	甕	回転糸切	底部	有	D—25Ⅲ	R P 91	
	273	須恵器	甕	回転糸切	底部	有	A—9Ⅲ		
	274	黒色土器	坏		体部外面	不明	A—12Ⅲ		内黒
	275	須恵器	甕	回転ヘラ	体部外面	不明	S D 359F		
	276	須恵器	甕	回転ヘラ	底部	王	A—78Ⅱ		
	277	須恵器	鳥型土器	回転ヘラ	底部	不明	D—54Ⅱ		
	278	須恵器			底部	夷	S D 189		内面漆付着
30	279	赤焼土器	双耳坏	回転糸切	体部外面	カカ	B—4Ⅲ		
	280	赤焼土器	坏		底部	カ	A—3Ⅲ		
	281	赤焼土器	坏	回転糸切	体部外面	不明	D—3Ⅲ		
	282	赤焼土器	高台付坏	回転糸切	底部	カカ	A—1Ⅲ		
	283	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	山カ	S G 702F2		
	284	須恵器	坏		底部	不明	A—81Ⅲ		
	285	赤焼土器	坏		体部外面	不明	B—34Ⅲ		
	286	須恵器	坏	回転糸切	体部外面	不明	D—5Ⅲ		
	287	赤焼土器	坏	回転ヘラ	底部	不明	B—34Ⅲ		
	288	須恵器	坏		底部内面	十万カ	A—3Ⅲ		
	289	赤焼土器	高台付坏		体部内面	不明	S K 31 F		
	290	赤焼土器	高台付坏		体部外面	不明	D—92Ⅲ		
	291	赤焼土器	坏	回転ヘラ	体部外面	不明	S G 702 F 2		
	292	須恵器	高台付皿	回転糸切	底部	不明	B—4Ⅲ		
	293	赤焼土器	甕	回転ヘラ	底部	不明	S G 702 F 2		
	294	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	不明	S G 702 F 2		
	295	須恵器	蓋	回転ヘラ	底部	不明	S G 702 F 2		
	296	須恵器	坏	回転糸切	底部	不明	S D 194		
	297	赤焼土器		回転糸切	底部	不明	A—2Ⅲ		
	298	赤焼土器	甕	回転糸切	底部	不明	A—5Ⅲ		
	299	須恵器	坏		体部外面	不明	S G 702 F 2		
	300	須恵器	坏	回転糸切	体部外面	ヘカ	D—4Ⅲ		
	301	赤焼土器	坏	回転糸切	底部	不明	S P 276 F		
	302	赤焼土器	坏	回転糸切	体部外面	不明	S D 323		
	303	赤焼土器	坏	回転ヘラ	底部	不明	D—77Ⅲ		
	304	須恵器	坏		底部	不明	D—77Ⅲ		
	305	須恵器	坏	回転糸切	体部外面	不明	S K 108 F		
	306	赤焼土器	坏	回転ヘラ	体部外面	不明	S G 702 F 2		
	307	須恵器	坏		体部外面	不明			

表一 9 墨書集成(2)

挿図 番号	遺物 番号	種別	器種	底部切離	墨書部位	墨書名	出土地点	登録 番号	備考
21	129	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	上	S G 702F 3		内外面煤付着
24	186	須恵器	高台付坏	回転ヘラ	底部	上	S G 702F 3		
23	167	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	上	S G 702F 3		
22	139	須恵器	坏	回転糸切	底部	上	S G 702F 3	R P 126	
22	152	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	上	S G 702F 4	R P 148	
24	183	須恵器	高台付坏	回転ヘラ	底部	上	S G 702F 3	R P 161	
22	142	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	上	S G 702F 3	R P 182	
21	121	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	上	S X 701F 1	R P 109	
21	111	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	上	S G 702F 3	R P 185	
22	146	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	上	S G 702F 3	R P 166	
22	147	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	上	S G 702F 3	R P 151	
22	137	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	上	S G 702F 3	R P 137	
21	120	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	上	S X 701F 1		
24	185	須恵器	高台付坏	回転ヘラ	底部	上	S G 702F 3	R P 184	
21	110	須恵器	坏	回転ヘラ	体部外面	上	S G 702F 2		
25	203	須恵器	蓋		体部内面	上	S G 702F 3	R P 142	口唇部煤付着
23	157	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	氏	S G 702F 3	R P 171	
23	168	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	氏	S X 701F 1		
22	133	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	氏	S G 702F 3	R P 167	
23	170	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	氏	S G 702F 3	R P 158	
25	195	須恵器	蓋		体部内面	氏	S G 702F 3	R P 143	
21	130	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	氏	S G 702F 3	R P 169	
23	156	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	氏	S G 702F 3	R P 72	
21	113	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	氏	S G 702F 3	R P 23	転用硯
20	89	赤焼土器	坏	回転糸切	底部	氏	S D 231F 1	R P 135	口唇部煤付着
19	80	須恵器	坏	回転糸切	底部	力	S D 185F 1	R P 144	
23	159	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	力	S X 701F 1	R P 96	
23	154	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	安	S X 701F 1	R P 20	
19	74	赤焼土器	坏	回転糸切	底部	有	S K 601	R P 169	
17	38	赤焼土器	坏	回転糸切	底部	高	S K 108	R P 107	
21	113	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	主	S G 702F 3		
21	109	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	主	S X 701F 1	R P 151	
23	173	須恵器	坏	回転糸切	底部	三	S G 702F 2	R P 177	
23	147	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	十万	S G 702F 3		
22	134	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	十万	S G 702F 3	R P 108	
24	184	須恵器	高台付坏	回転ヘラ	底部	十万	S G 702F 3	R P 121	
23	171	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	十万	D-78Ⅲ	R P 181	
22	141	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	八部	S X 701F 1	R P 94	
22	150	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	比口	S G 702F 3		
19	71	須恵器	坏	回転糸切	底部	不明	S K 601	R P 176	内面煤付着
22	149	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	不明	S G 702F 3	R P 137	
22	151	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	不明	S G 702F 3	R P 76	
23	172	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	不明	S G 702F 3	R P 29	
22	137	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	不明	S G 702F 3		
18	52	赤焼土器	坏	回転糸切	底部	不明	S K 250	R P 150	
17	43	赤焼土器	坏	回転糸切	底部	不明	S K 196F 1	R P 157	
21	126	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	不明	S G 702	R P 183	
17	27	赤焼土器	坏	回転糸切	底部	不明	S B 1-EB1		
21	128	須恵器	坏	回転ヘラ	体部外面	T	S G 702F 3		
22	140	須恵器	坏	回転ヘラ	体部外面	下カ	S G 702F 4	R P 187	
22	144	須恵器	坏	回転ヘラ	体部外面	不明	S G 702F 3	R P 184	
22	138	須恵器	坏	回転ヘラ	体部外面	不明	S G 702F 3	R P 159	
25	197	須恵器	蓋		体部内面	氏	S G 702F 3		
25	196	須恵器	蓋		体部外面	古	S G 702F 3		
25	203	須恵器	蓋		体部内面	上	S G 702F 3		139の蓋か
25	204	須恵器	蓋		つまみ	上	S G 702F 3		
25	205	須恵器	蓋		体部外面	不明	S G 702F 3		

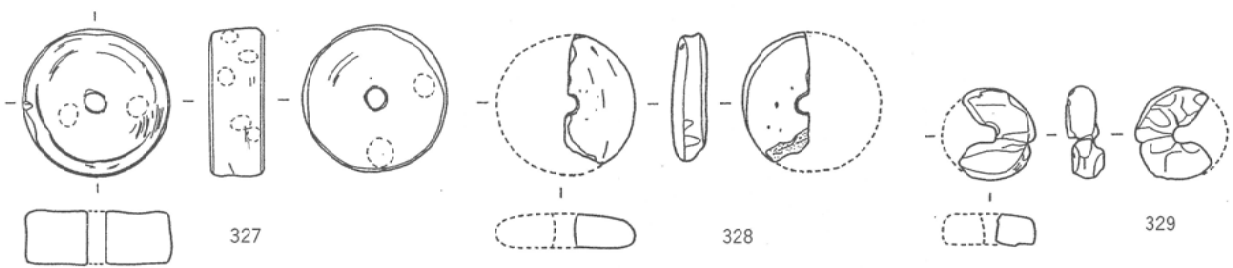
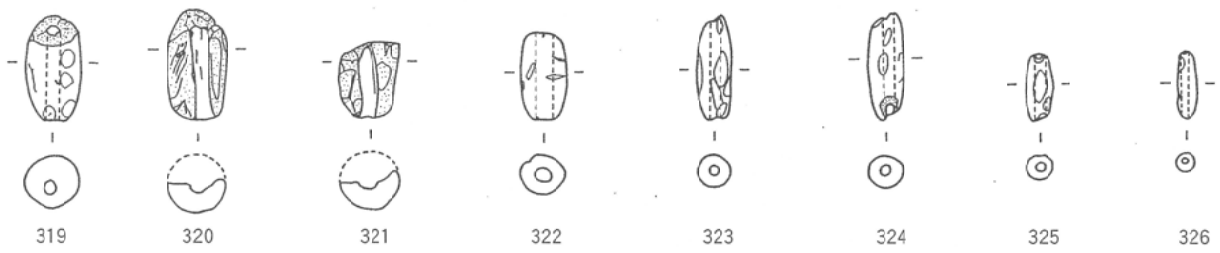
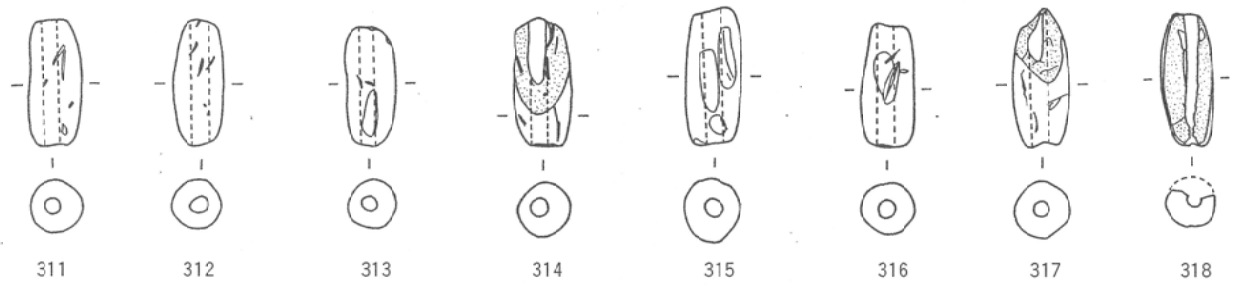
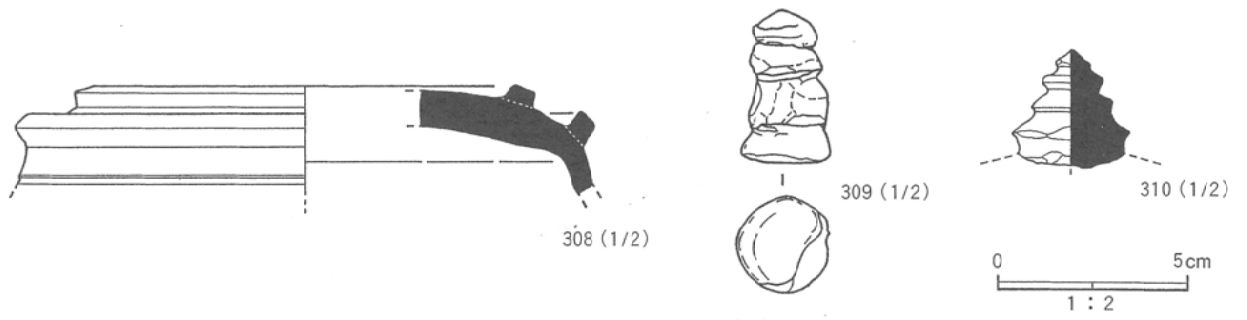
3 土製品・石製品・木製品・金属製品・銭貨

土製品は、円面硯、土塔、土錘他が出土した。円面硯(308)は、B調査区の包含層Ⅲ層からの出土である。破片のみの出土であり、歪みもあるが、口径151mm、外堤・内堤を有する圈脚円面硯と考えられる。高瀬川流域では初めての出土であり、山形県内でも最北での出土となる。土塔(309)は、五輪塔と考えられる。(310)は、須恵製で蓋のつまみと考えられる。経筒の一部とも考えられる。管状土錘は16点出土している。全て手捏で作られており、平面形は縁に丸みを持つ円柱形または楕円形である。その大小から次の4類に分類できる。A類—最大径25mm以上で長さ70mm内外、軸径8mm内外を測るもの(311~321)。B類—最大径20~25mm、長さ50mm内外を測り、軸径はA類に同じもの(322)。C類—最大径18mm内外、長さ55mm、軸径5mm内外を測るもの(323・324)。D類—最大径10~15mmの小型のもの(325・326)。このうち、A類、B類はA~B-90G付近のⅢ層下面からまとまって出土している。また、漁に使ったと思われる浮子(330)が出土している。材質は火山岩で、径70mmの円形と推定される。中央に10mmの網を通す孔がある。他に土製・石製の紡錘車、砥石などが出土している。

木製品は、今調査ではS G 702河川跡からの出土品と、包含層からの出土品を合わせて整理用コンテナ6箱の木製品を得た。全般に遺存状態は良いといえない。(333)は砧である。柄部は良好に遺存しているが、先端はだいぶ摩耗しており、槌部の1/3ほどが欠落している。(334)はその形状から、ほぞ穴で天板などと結合し「ハ」の字に開く足を想定できる。断面は二等辺三角形を呈し、その底辺部を外側に、斜辺部を内側に配置するように思われる。ほぞの外に向く面には断面半円形の横溝が刻まれる。脚内側上端近くには横方向に切込みが見られるが、意図は不明である。(335)は板状木製品で、下端部を面取りしている。腐食が著しく接合できないため、分割して図示した。用途は不明である。(336・337・348)は曲物底板である。(337)は縁辺部に断面弧状の溝が数条走り、何らかの加工痕かとも思われる。(338)は皿と思われる。(339)は全長200mmほどの角棒状を呈するが、両端を斜めに切り落とし、側面形は台形状を呈する。台形の上底部が上と思われ、中央部が削られて緩く窪んでいる。両端から35mmほどの位置に方形のほぞ穴が2つ穿たれるが貫通していない。(340~343)は棒状木製品である。(344・346・347)は箸で、長さ200mm位と推定する。(346・347)は残存部を図示した。(345)は長さ200mm位、幅50mm位の板状を呈する。両面に丁寧な削りが施されており、一端に穴が穿たれる。他端は残存部の形状から剣形を呈するように見受けられるが、遺存状態が悪いため工作の痕を詳かにし得なかった。(349)は小型の漆器椀である。口縁部は遺存していないが、口径100~120mmと推定する。内外面とも赤漆が塗られる。(350)は円板状を呈し、中央に直径12mmの孔が穿たれる。片面の一部は半分の厚さに削り取ってある。蓋の可能性が考えられる。

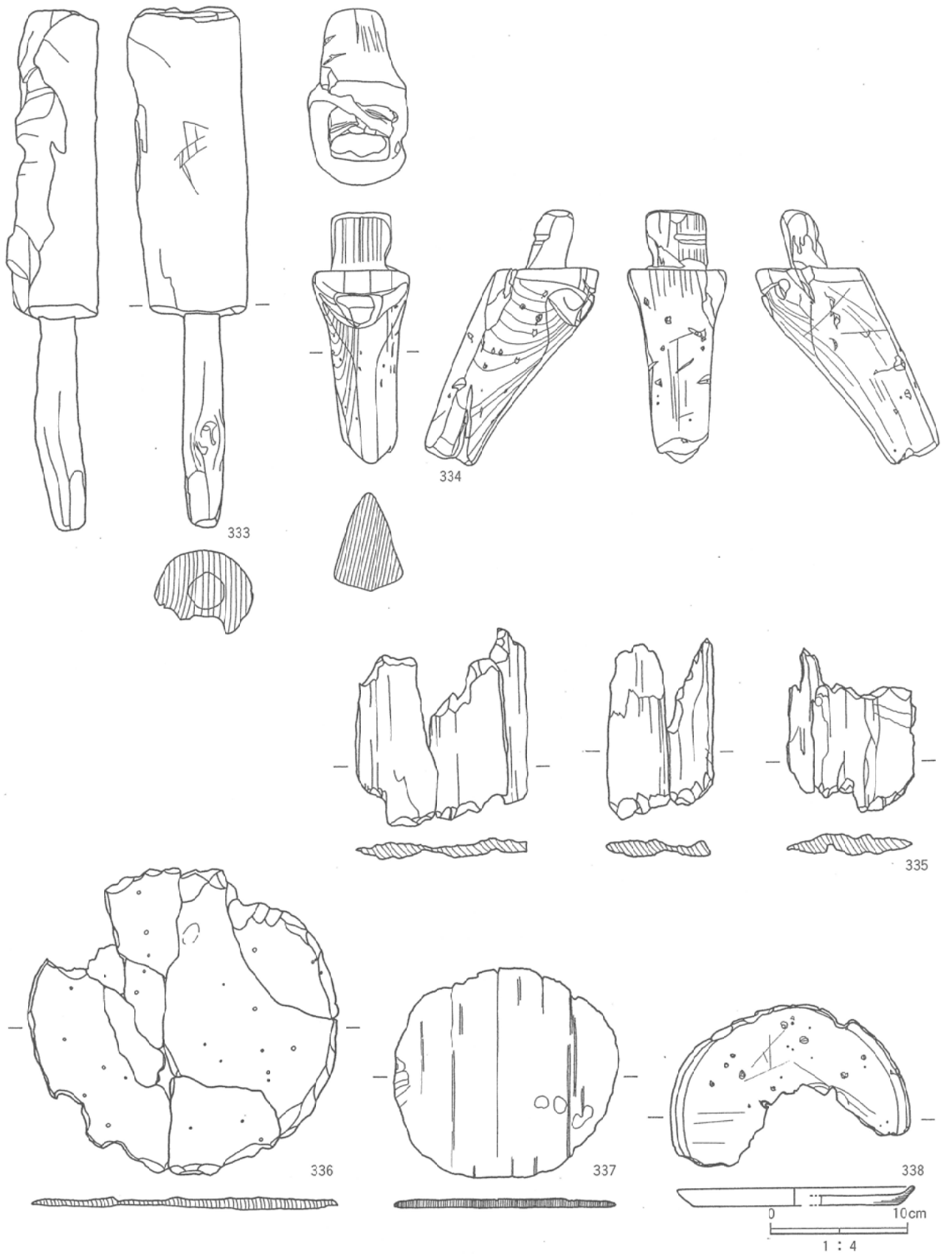
金属製品は包含層から3点出土している。(351)は鑿である。身の部分の長さは192mm、厚さ4mmと推定される。(351)は煙管の吸口である。(353)は蹄鉄の可能性はある。

銭貨は10点出土している。353は皇宋通寶、356元符通寶、360景祐元寶の北宋銭がある。寛永通寶である361は背に「文」の一字が認められる。寛文8年(1668)鑄造の「文銭」である。

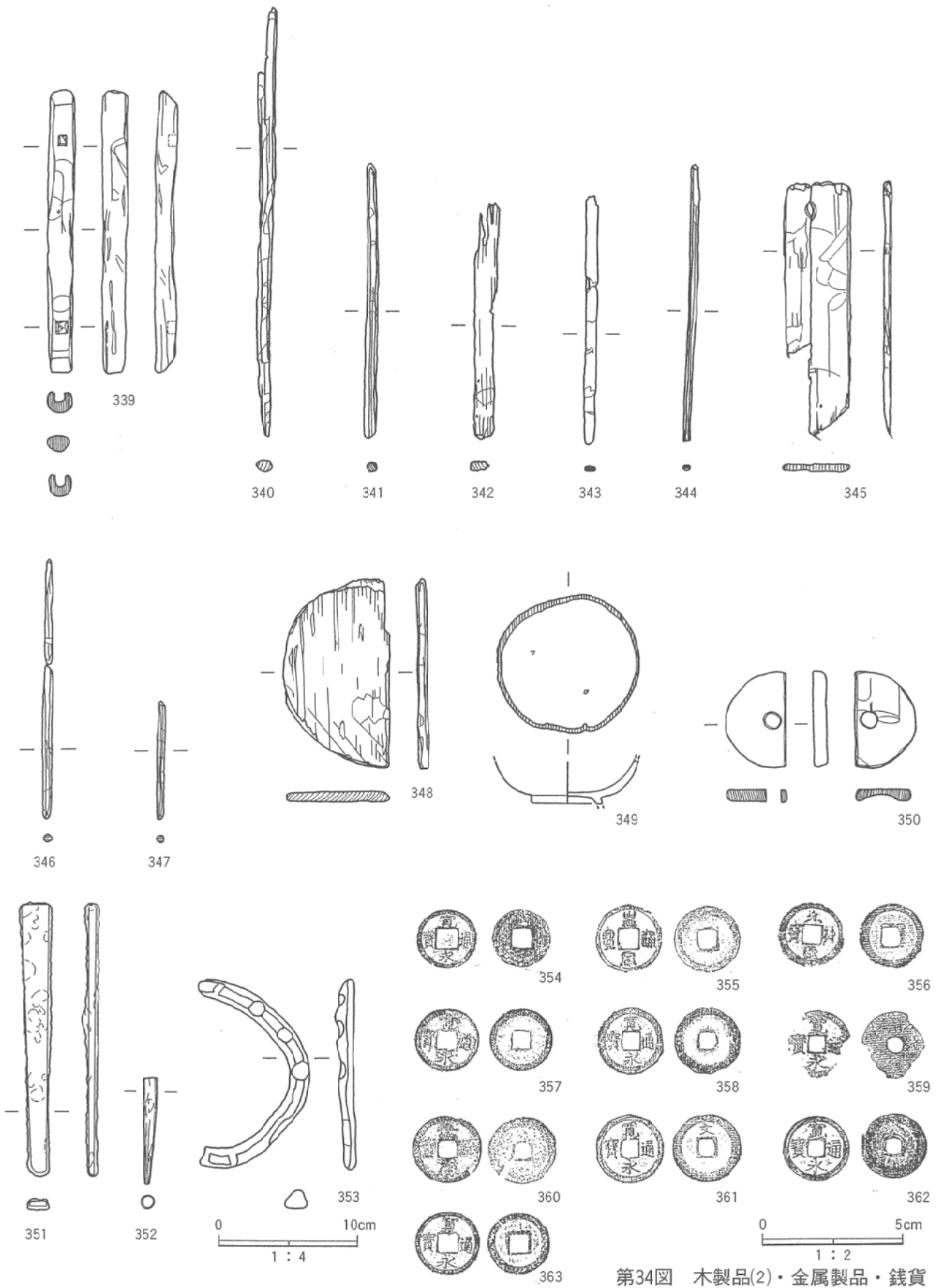


第32図 土製品・石製品

V 出土した遺物



第33図 木製品(1)



第34図 木製品(2)・金属製品・銭貨

V 出土した遺物

表一10 土製品・石製品・木製品・金属製品・銭貨観察表
土製品

挿図 番号	遺物 番号	器 種	計測値(mm・g)				出土地点	登録 番号	備 考
			最大径	軸 径	長 さ	重 さ			
32	308	円面硯	151		10		A-29Ⅲ		内堤・外堤あり、歪みあり
	309	土塔	24		41		A-93Ⅲ		酸化焙焼成
	310	蓋つまみ	15		30		A-79Ⅲ		陶製経筒の摘みカ
	311	管状土鍾	27	8	67	54.4	A-95Ⅲ	R P 8	
	312	〃	26	9	67	36.6	B-91Ⅲ	R P 45	
	313	〃	27	8	64	47.2	B-91Ⅲ	R P 46	
	314	〃	29	9	67		B-91Ⅲ	R P 48	
	315	〃	34	9	72	69	B-91Ⅲ	R P 47	
	316	〃	27	9	66	46.5	SX396 F 1	R P 62	
	317	〃	30	8	73	48.8	A-85Ⅲ		
	318	〃	27	8	70		A-95Ⅲ		
	319	〃	29	7			A-91Ⅲ		
	320	〃	31	8			B-91Ⅲ		
	321	〃	31	9	9		B-92Ⅲ	R P 63	
	322	〃	23	8	46	21.9	A-91Ⅲ		
	323	〃	18	5	55	16	SX396 F 1	R P 92	
	324	〃	18	6	56	15.9	SD525		
	325	〃	14	5	35	5.6	D-33Ⅲ	R P 178	
	326	〃	10	3.5	35	3.3	SK233		
	327	紡錘車	71	12	(厚さ)28	216.5	SG702 F 2		

石製品

挿図 番号	遺物 番号	器 種	計測値(mm・g)				出土地点	登録 番号	備 考
			最大径	軸 径	長 さ	重 さ			
32	328	紡錘車	(径)76	(軸径)10	18		D-60Ⅲ		
	329	〃	(径)48	(軸径)8	13		SG702 F 2		
	330	浮子	(径)70	(軸径)10	20	8.9	A-95Ⅲ	RQ 9	
	331	砥石	54~	33	30		A-72Ⅲ		
	332	〃	35~	39	15		B-77Ⅲ		

木製品

挿図 番号	遺物 番号	器 種	計測値(mm)				出土地点	登録 番号	備 考
			最大径	軸 径	長 さ	厚 さ			
33	333	砧	334	82	82		SG702 F 2		ほぞ：断面長方形、長さ・幅43mm
	334	脚	185	70	70		SG702 F 2	R W180	最大部材計測
	335	板状部材	130	124	124		SG702 F 2	R W188	柾目
	336	曲物底板		(径)227	(径)227		SG702 F 2	R W145	柾目
	337	曲物底板		(径)160	(径)160		SG702 F 2	R W154	器高13mm、板目
	338	皿カ	(口径)173	(底径)147	(底径)147		SG702 F 2	R W133	中央部計測
	339	棒状部材	203	16	16		SG702 F 2	R W170	
34	340	棒状木製品	311	13	13		SG702 F 2	R W186	
	341	〃	198	9	9		SG702 F 2	R W162	
	342	〃	170	11	11		SG702 F 2		
	343	〃	179	8	8		SG702 F 2		
	344	箸	199	6	6		SG702 F 2		
	345	板状木製品	185	47	47		SG702 F 2		穿孔、柾目
	346	箸	187	7	7		SG702 F 2		
	347	〃	[85]	5	5		SG702 F 2		
	348	曲物底	(径)136	[76]	[76]		A-103Ⅲ		柾目
	349	漆器椀	(底径)50	(器厚)6	(器厚)6		B-97Ⅲ		推定口径100~120mm
	350	〃	(径)70	[43]	[43]		B-73Ⅲ	R W 44	孔径12mm、柾目

金属製品・銭貨

挿図 番号	遺物 番号	種 別	器 種	計測値(mm・g)			出土地点	登録 番号	備 考
				長 さ	幅 (径)	厚 さ			
34	351	鉄製品	鑿	196	22	8.5	A-86Ⅲ		
	352	鉄製品	煙管	77	(径)10		D-33Ⅲ	R M93	
	353	鉄製品	踏	212	15	13	A-1Ⅲ		
	354	古銭	寛永通寶		(径)21.3	1	A-22		
	355	古銭	寛永通寶		(径)24.5	1	A-71		初鑄1038年北宋
	356	古銭	元符通寶		(径)24	1.2	A-61		初鑄1098年北宋
	357	古銭	寛永通寶カ		(径)23	1	D-27Ⅲ		
	358	古銭	寛永通寶		(径)24.2	1	B-35Ⅲ		
	359	古銭	寛永通寶		(径)24.5	1	B-35Ⅲ		
	360	古銭	景祐元寶		(径)25	1.2	A-58Ⅲ		初鑄1034年北宋
	361	古銭	寛永通寶		(径)25	1.2	B-35Ⅲ		「文」初鑄1668年
	362	古銭	寛永通寶		(径)23.8	1.1	B-35Ⅲ		
	363	古銭	寛永通寶		(径)23	1	B-35Ⅲ		

[] は残存値

VI 総括

今調査は、一般国道345号道路改築工事に係る緊急発掘調査である。調査では、第1・2次調査と同じような畑の畝跡と考えられる溝状遺構群、溝状遺構群と重複する土坑群や柱穴、掘立柱建物跡が検出された。溝状遺構群は7区画が確認され、それぞれ2～4時期の変遷が認められた。SB1・2が検出されたA～B-53～58Gはその切り合いから耕作地を廃棄して居住域を作り出したと推測される。また、建物跡の周辺には土坑や建物と主軸を同じにする溝跡が検出されており、その土地の利用法や企画性を伺い知ることができる。また、E調査区で検出された河川跡からは土器や木製品などの多量の遺物が出土している。

遺物では、第1・2次調査で出土している土器と同じような9世紀から10世紀の中葉を主体とする土器がA・B・C調査区の土坑や溝跡、包含層から出土している。この他に8世紀後半まで遡ると考えられる土器群が河川跡からまとまって出土している。以下、今調査で出土した墨書土器と、遺跡の性格について若干の考察を加えたい。

1 墨書土器について

墨書土器は、律令制下における地方行政や、集落内での生活・祭祀の様子を追求するための貴重な資料となっている。これまで庄内地方では2,500点以上の墨書土器が出土しており、本遺跡でもこれまでの調査で137点が出土している。今調査では107点の墨書土器が出土しており、遊佐町管内では大坪遺跡131点、宮ノ下遺跡126点とともに有数の出土量となる。種別的には、須恵器79点、赤焼土器27点、黒色土器1点である。須恵器の器形別では無台坏64点、有台坏8点、蓋7点となる。赤焼土器、黒色土器については全て坏に描かれている。一般的に墨書土器は供膳形態の土器に多く見られ、本遺跡においてもその例外ではないといえる。無台坏、有台坏の底部切り離しで見た場合、ヘラ切りが63点、回転糸切りが9点となり、ヘラ切り無台坏への墨書が主体をなすといえる。墨書部位については、体部が24点、蓋のつまみが1点の他は全て底部外面に描かれている。底部外面に、一文字の墨書が二つある土器も3点確認される。出土地点からみると、E区河川跡からの出土が54点と群を抜いており、また、墨書が描かれている器には比較的使用痕が認められないものがあることから、日常的でない特別の用途に使用されたものと考えられる。

今調査で出土した墨書土器の文字に着目すると、一字資料のものでは「上」が最も多く21点、「氏」13点、「安」、「高」、「力」、「夷」などがある。二文字資料のものでは、「十万」10点、(内、2点はヘラ書き)、「八部」、「比口」、「三川」がある。「上」は、県内では地正面遺跡、生石2遺跡、南興野遺跡などで出土しており、東日本各地で確認できる文字である。21点の中には筆跡が似るものもある。「氏」は、1次調査でも畝状遺構から1点出土している。その筆跡では、①(130)・(157)・(195)、②(133)・(156)・(197)・(266)、③(89)の3種があることが分かる。①・②は河川跡から出土したもので、須恵器坏の底部外面や蓋の体部の一部に記されている。8世紀後半から9世紀初めに比定できる土器群である。一方、③はSD231から出土した土

器である。赤焼土器の底部外面に記されており、9世紀中葉に否定できる。このように、①・②と③では土器編年において半世紀以上の差があり、この「氏」が姓を表すものかは断言できないが、この文字を持つ集団がこの地に存続していたものと推測される。

また、第1・2次調査で出土しているが数字の墨書が多い。これまでの調査では「七」、「十」、「千」、「万」、「千万」などが出土している。今調査では、「弐」、「三」、「七」、「十」、「万」、「十万」の文字が記されたものが出土している。数字が記されている墨書土器は庄内地方でも多数出土しており、これらの文字も特定の者、或いは集団の所属か所有を表すと考えると、前述の墨書と同じ性格を持つと考えられる。

2 遺跡の性格と年代観について

今次の調査で北目長田遺跡は3次の調査となった。調査面積は第1次調査=3,300m²、第2次調査=7,920m²、第3次調査=6,600m²、計17,800m²となる。北目長田遺跡は東西に長い遺跡で推定遺跡面積は117,600m²にのぼる。つまり、この第1～3次調査で遺跡面積の約15%を調査したことになる。ここで、これまでの調査と今次の調査成果を合わせ、遺跡の性格や年代観についてふれたい。

今調査区は、北目長田遺跡の中央を縦断する国道345号に沿い、南端から北端まで全長625mを範囲としている。前述の通り、全長625mの間には遺構の密な区域と希薄な区域があり、15～33Gにかけてはほとんど遺構が確認されず、包含層からの遺物出土量も少ない。これは、第2次調査のトレンチ調査区からも同じ結果が得られている。このことから、当初予想された遺跡の分布とは様相が異なり、遺跡の南端から北端までは連続していないことが推定される。また、北端部の-7～5Gはさらに北側に拡がる様相を呈しており、現在の丸子集落の方に続いていくものと考えられる。

また、第1・2次調査で出土した遺物は9世紀中葉から10世紀中葉を主体としていた。しかし、今調査ではその年代よりも若干遡る土器群が出土した。即ち、E調査区で検出された河川跡出土の土器群である。この河川跡からは、破片数で1,258点の土器が出土している。器種別では須恵器が約70%をしめ、赤焼土器は他の遺構に比べ少ない比率である。須恵器は前述したとおりほとんどが底部ヘラ切りによる切り離しで、8世紀第4四半期から9世紀第1四半期に比定できるものが主体をなす。高瀬川流域では宮ノ下遺跡のSG1200出土土器にこの年代の土器群が見られるが、他の遺跡が9世紀から10世紀にかけて継続していることを考慮すれば、本遺跡が比較的早い時期から集落として成立していたことが推測できる。一方、国道345号の西側の土器群は9世紀中葉から10世紀にかけてのものが主体をなし、隣接する第2次調査区と同じ時期に比定できる。これらのことから、本遺跡は8世紀後葉から10世紀中葉にかけて継続していたものと考えられる。

最後に、今調査によって検出された資料の理化学分析結果（分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託）について列記しておく。分析は樹種同定2点を行った。資料①はSP504から出土

した炭化材と②S K 648から出土した炭化材である。

S P 504の覆土から出土した炭化材には2種類が認められた。落葉広葉樹のブナ属(図版24-1)とハリギリ(図版24-3)であった。炭化材は柱材の可能性があるが、2種類認められたことも考慮すると他の部材も混入していることが考えられる。この中で、秋田県弘田柵跡の門柱などに利用されているハリギリが柱材として利用され、ブナ属も柱以外の部材に利用された可能性があるかと推定している。

②は落葉広葉樹のカエデ属(図版24-2)に同定され燃料材として使用されたことが推定される。S K 648から出土した多量の製塩土器片とともにこの燃料材が出土していることから、資料が少ないため明確には断言できないが本遺跡内で製塩活動が行われたことも考えられる。

参考文献

- 川崎 利夫他 「境興野遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第46集 1981(以下、山埋文報と略す)
- 野尻 侃他 「千河原遺跡発掘調査報告書」 山埋文報80集 1984
- 伊藤 邦弘他 「大橋遺跡第1次発掘調査報告書」 山埋文報121集 1988
- 斎藤 俊一他 「大坪遺跡第2次発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第23集 1995(以下、山埋文セン報と略す)
- 阿部 明彦他 「北日長田遺跡・櫛待遺跡・堂田遺跡発掘調査報告書」 山埋文セン報24集 1995
- 阿部 明彦他 「上高田・木戸下遺跡発掘調査報告書」 山埋文セン報25集 1995
- 野尻 侃他 「北日長田遺跡・櫛待遺跡第2次発掘調査報告書」 山埋文セン報31集 1996
- 斎藤 俊一他 「宮ノ下遺跡発掘調査報告書」 山埋文セン報32集 1996
- 浅黄 喜悦他 「西谷地遺跡第3次発掘調査報告書」 山埋文セン報33集 1996
- 高橋 敏他 「西町田下遺跡発掘調査報告書」 山埋文セン報44集 1997
- 国土調査 「土地分類基本調査 吹浦・鳥海山」 1994
- 阿部 明彦他 「東北地方の古代集落 庄内平野」 第24回古代城柵官衙遺跡検討会 1997
- 近藤 義郎編 「日本土器製塩研究」 青木書店 1994
- 中島町教育委員会 「ヤトン谷内遺跡発掘調査報告書」 1995
- 平川 南 「墨書土器とその字形」『国立歴史民俗博物館研究紀要第35集』 1991
- 森田 勉 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』 1982
- 小野 正敏 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』 1982
- 齊藤 孝正 「東海地方の施釉陶器生産」

報告書抄録

ふりがな	きためながたいせきだいさんじはくつちようさほうこくしよ							
書名	北目長田遺跡第3次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第56集							
編集者名	伊藤 元・豊野 潤子							
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301							
発行年月日	西暦1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きためながた 北目長田	やまがたけん 山形県 あかみぐん 飽海郡 ゆざまち 遊佐町 おあぎため 大字北目 あぎた 字長田	6461	平成3年 度登録	39度 02分 28秒	139度 54分 00秒	19970506～ 19971120	6600	一般国道345 号道路改築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
北目長田	集落跡	平安時代	掘立柱建物跡	2	須恵器	南北に走行する遺構 群を多数検出。河川 跡からは、須恵器を 中心に多量の土器が 出土している。墨書 土器も多く認められ る。		
			土坑	145	赤焼土器			
			溝状遺構	237	黒色土器			
			河川跡	2	製塩土器			
			ピット	202	陶磁器			
					土製品 (土錘・円面硯・他)			
					石製品 (砥・浮子・他)			
					木製品 (碇・脚・他)			
					金属製品 (鑿・煙管・古銭)			

版 圖



遺跡近景（西から）



遺跡遠景（東から）



重機械表土除去



グリッド設定



遺構検出



遺構精査



記録 (平面実測)



調査説明会



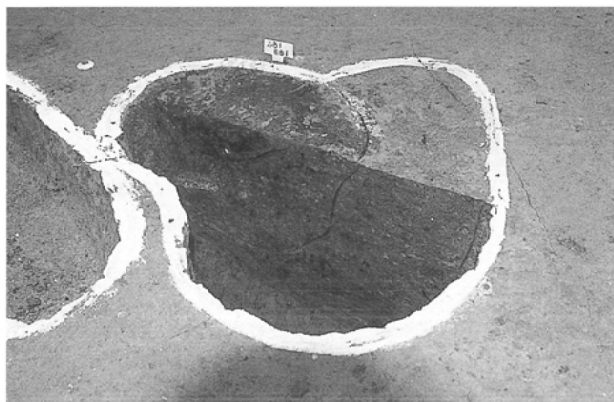
基本層序A-78 (東から)



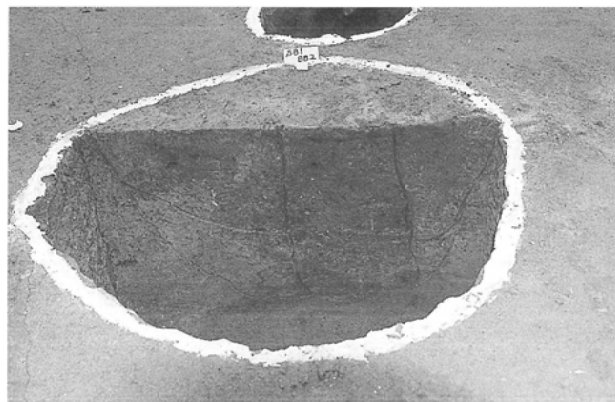
基本層序D-52 (西から)



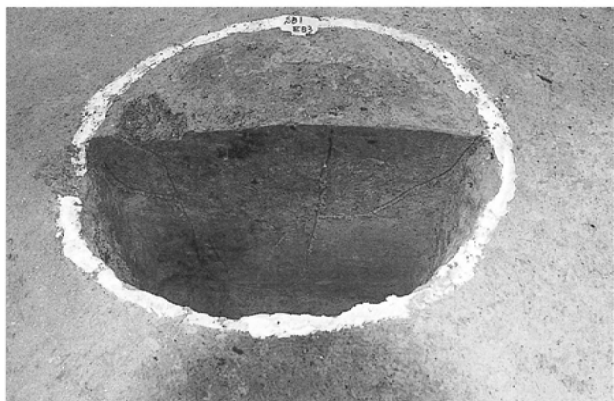
S B 1 掘立柱建物跡検出状況 (北から)



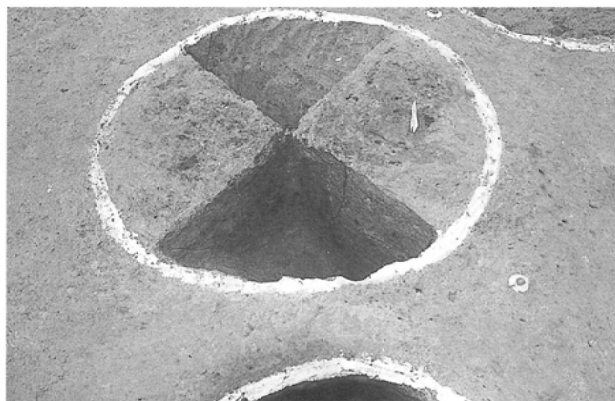
S B 1 - E B 1 土層断面 (東から)



S B 1 - E B 2 土層断面 (東から)

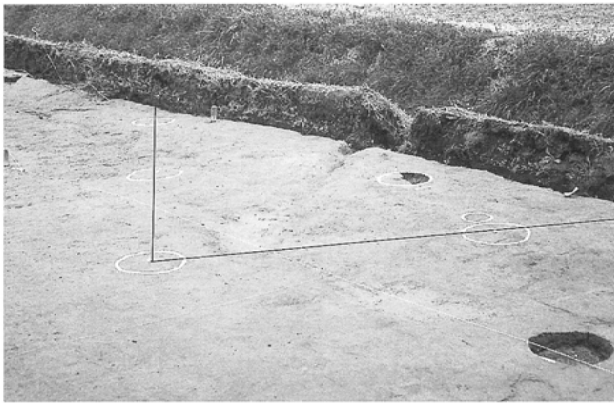


S B 1 - E B 3 土層断面 (東から)

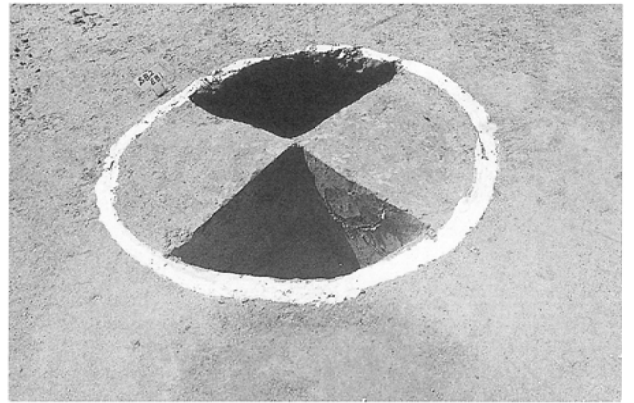


S B 1 - E B 5 土層断面 (東から)

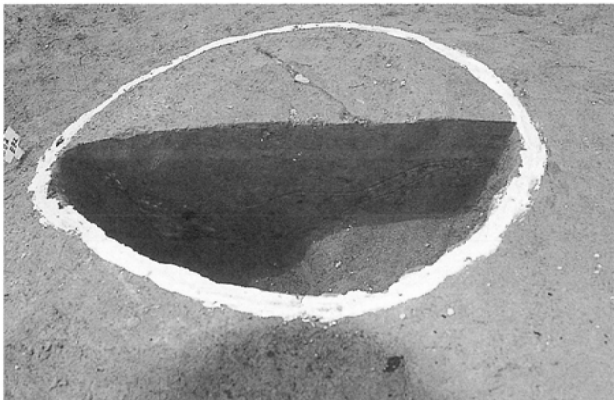
図版 4



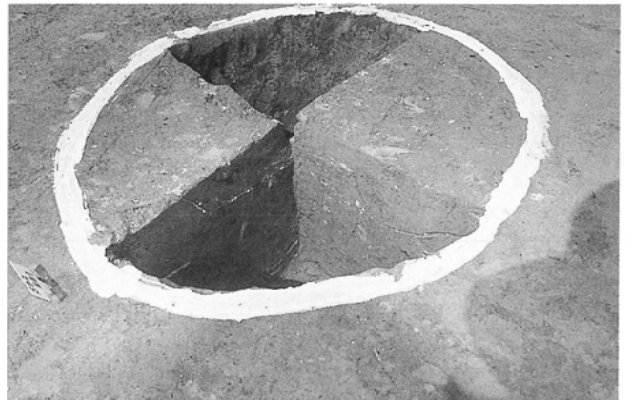
S B 2 掘立柱建物跡検出状況 (北から)



S B 2-E B 1 土層断面 (東から)



S B 2-E B 2 土層断面 (東から)



S B 2-E B 3 土層断面 (東から)



S K 250 土坑土層断面・遺物出土状況 (南から)



S K 250土坑検出状況（北から）



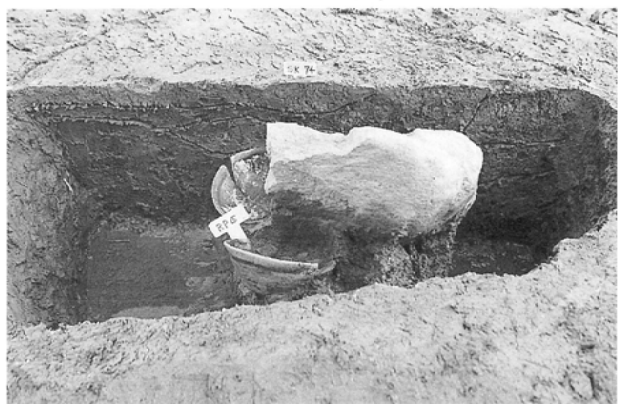
S K 81土坑土層断面（北から）



S K 108土坑遺物出土状況（東から）



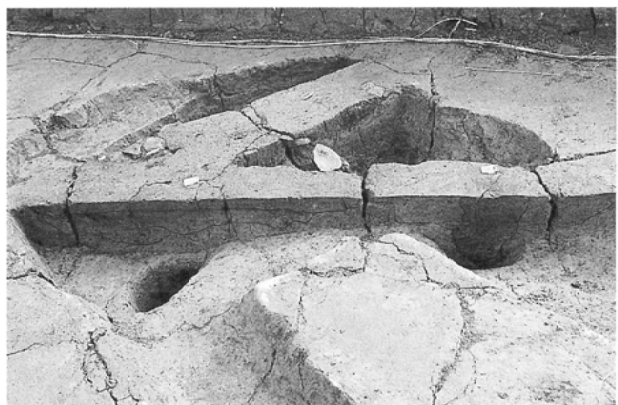
S K 108土坑土層断面（東から）



S K 74土坑土層断面・遺物出土状況（西から）



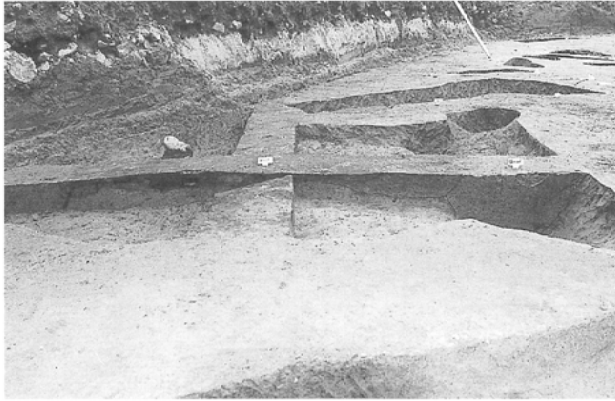
S K 527土坑土層断面（南から）



S K 30・33土坑土層断面（西から）



S D 44溝跡, S K 409土坑土層断面（南から）



S K 459土坑, S D 460溝跡土層断面 (北西から)



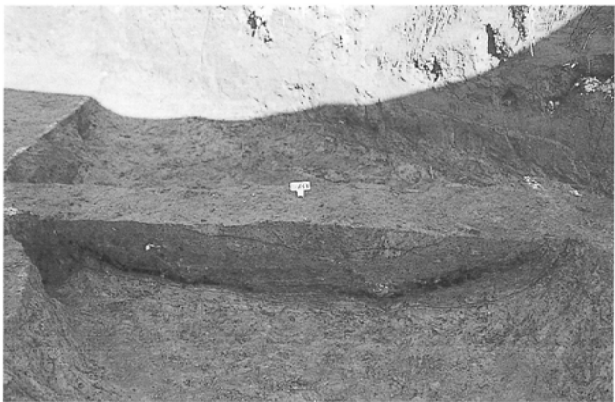
S K 457・458土坑土層断面 (南東から)



S K 82土坑土層断面 (西から)



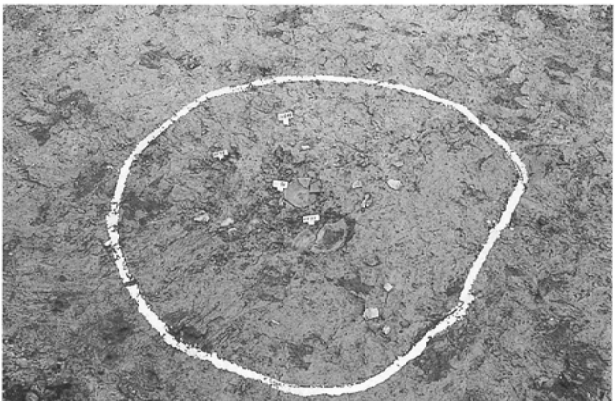
S K 631・630土坑土層断面 (東から)



S K 643土坑土層断面 (南から)



S K 89土坑土層断面 (西から)



S K 601土坑検出・遺物出土状況 (南から)



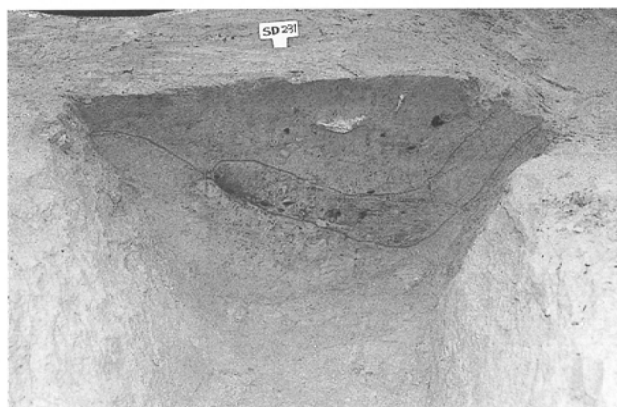
S K 601土坑土層断面 (南から)



S K 378土坑遺物出土状況（北から）



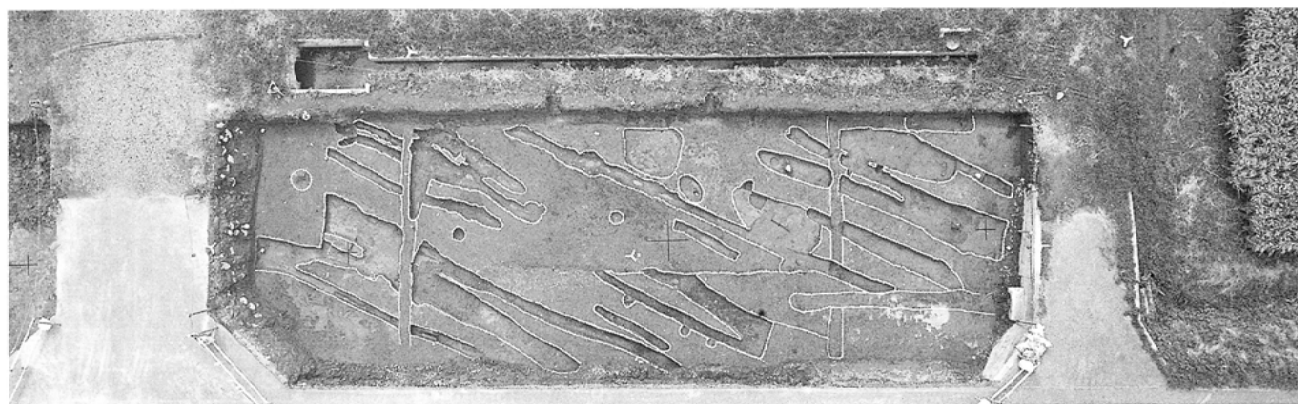
S K 378・379・380土坑土層断面（南西から）



S D 231溝跡土層断面（南西から）



S D 231溝跡遺物出土状況（南西から）



B区1～4G完掘状況（手前東）



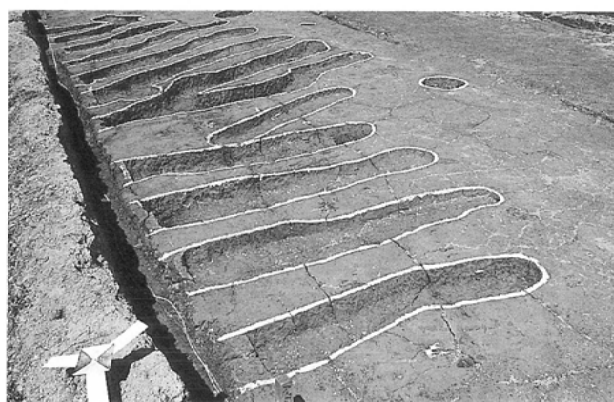
B区S G 10河川跡，35G溝状遺構群完掘状況（手前東）



E区89G 溝状遺構群検出状況 (南から)



A区71G 溝状遺構群土層断面 (南から)



A区71G 溝状遺構群完掘状況 (南から)



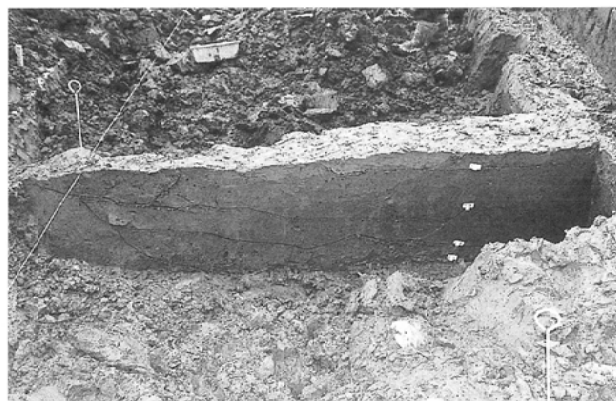
B区53~58G 遺構検出状況 (南から)



B区53~58G 完掘状況 (南から)



S G 10河川跡土層断面 (南西から)



S G 702河川跡, S X 701土層断面 (南から)



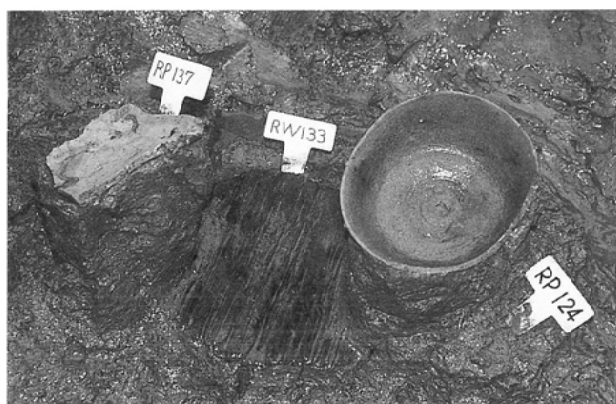
S G 702河川跡遺物出土状況 (手前西)



S G 702河川跡遺物出土状況 (手前西)



S G 702河川跡遺物出土状況



S G 702河川跡遺物出土状況

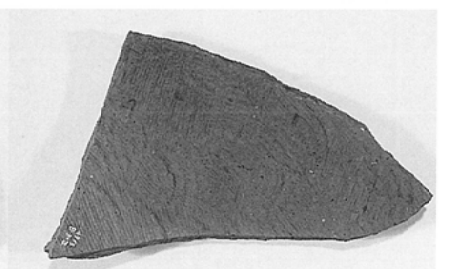
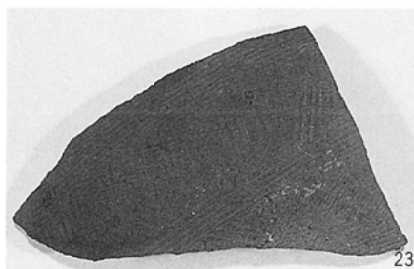
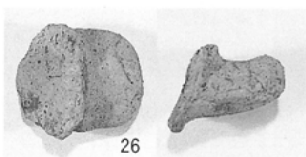
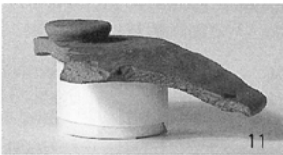
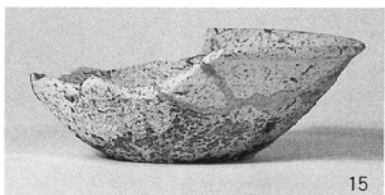
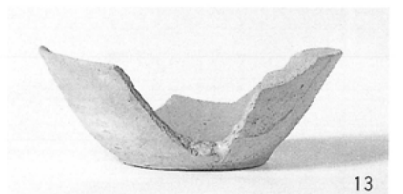
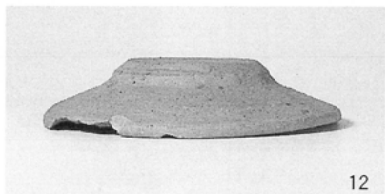
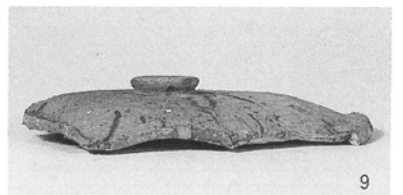
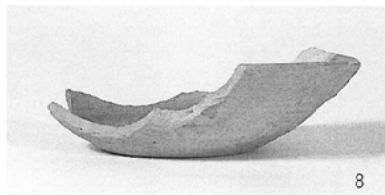
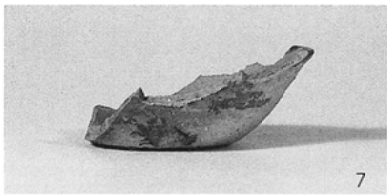
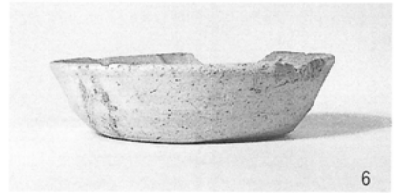
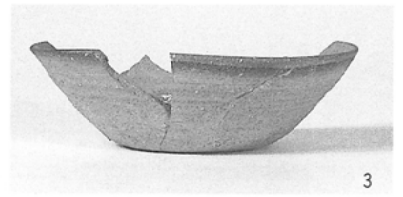
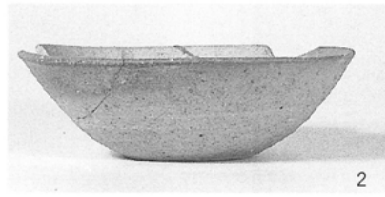
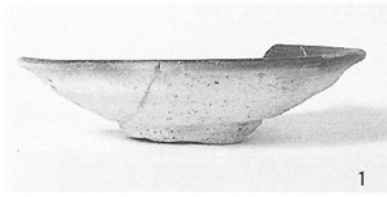


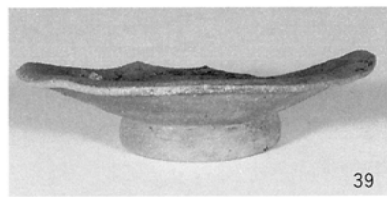
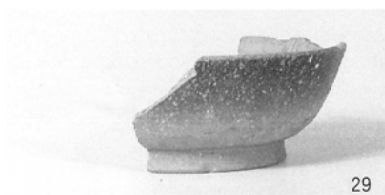
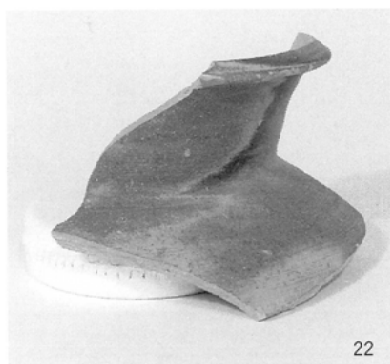
S G 702河川跡墨書土器出土状況

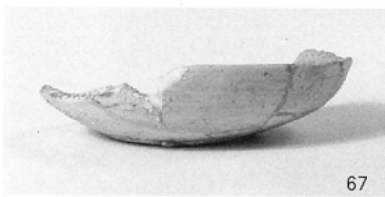
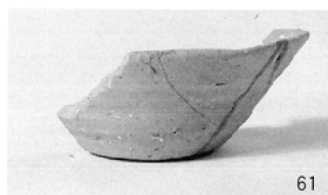


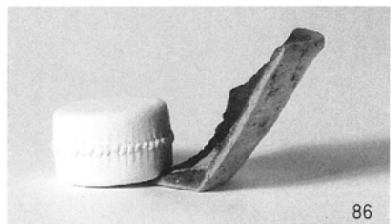
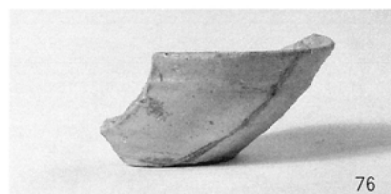
S K 648土坑製塩土器群出土状況 (東から)

图版10

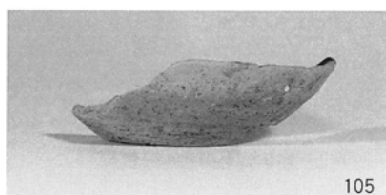
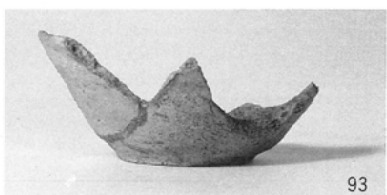
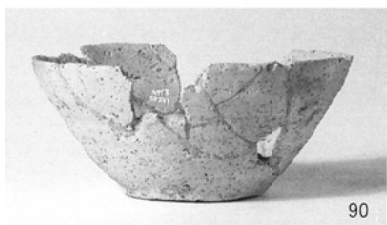


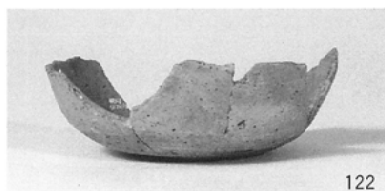
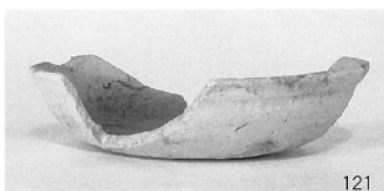
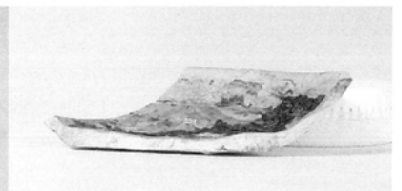
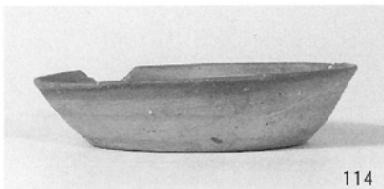
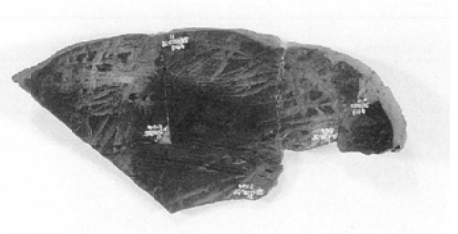
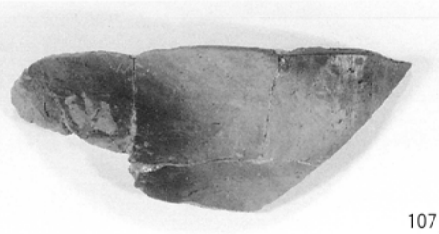
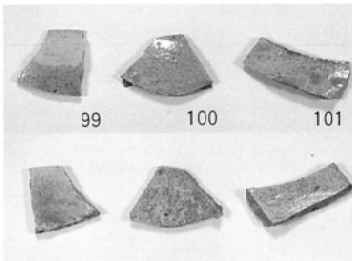
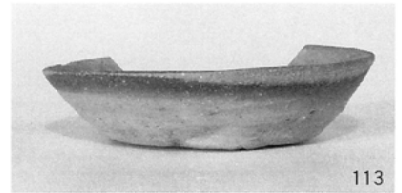


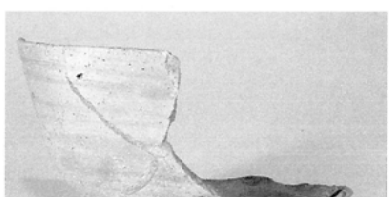
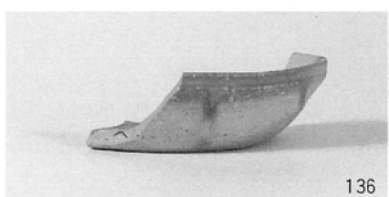
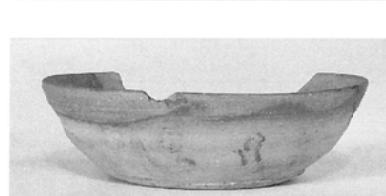
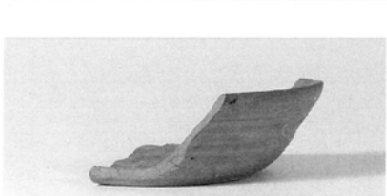
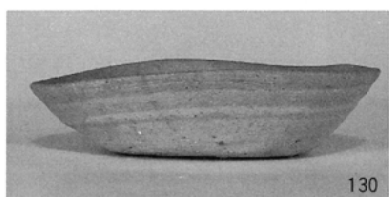
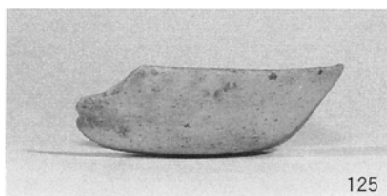


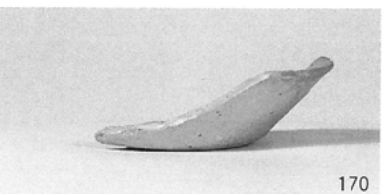
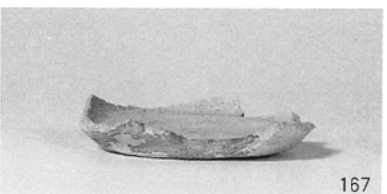
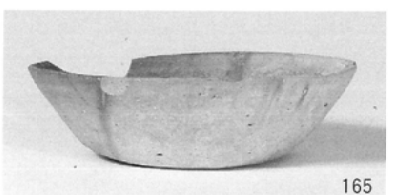
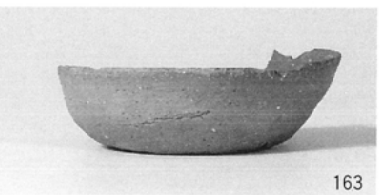
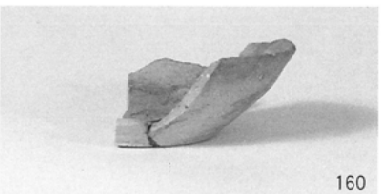
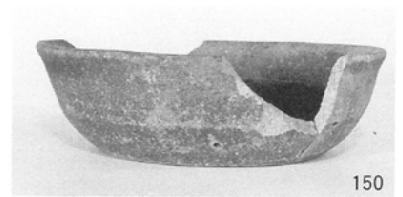
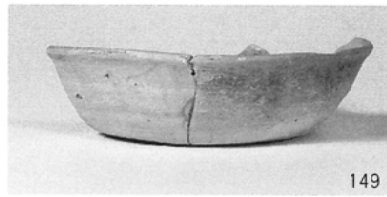
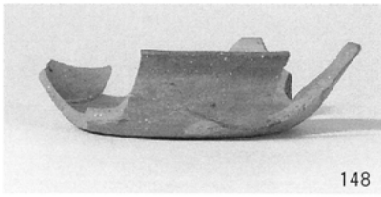


图版 14

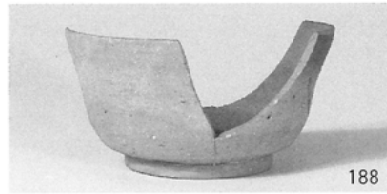
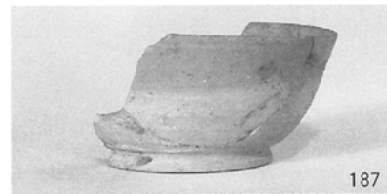
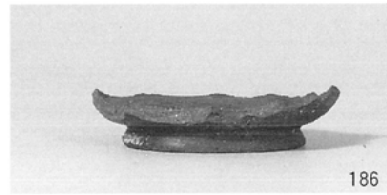
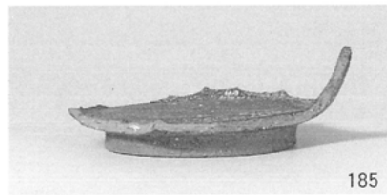
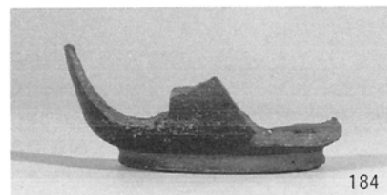
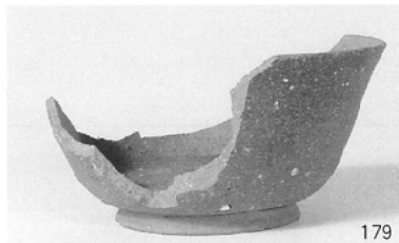
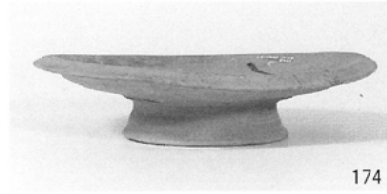
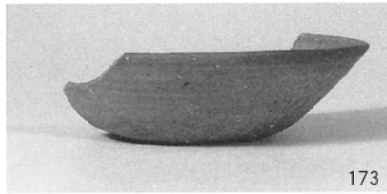
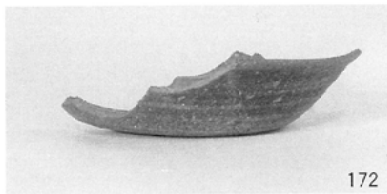


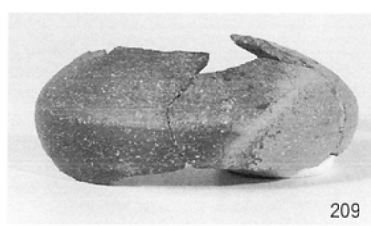
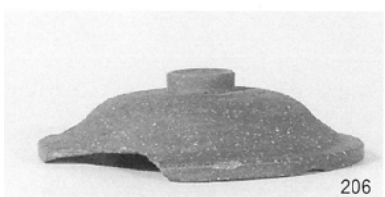
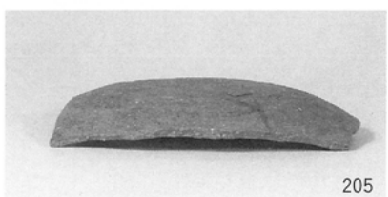
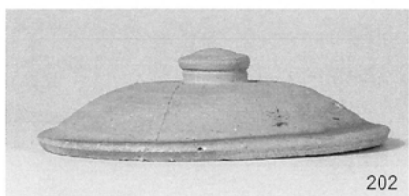
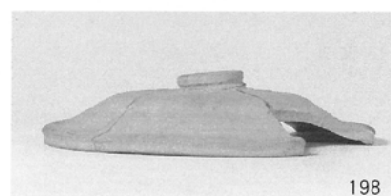
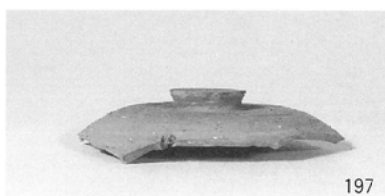
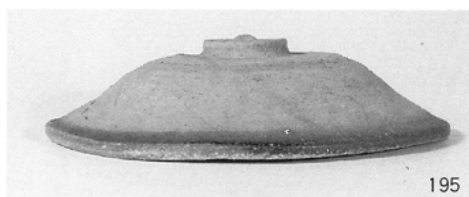
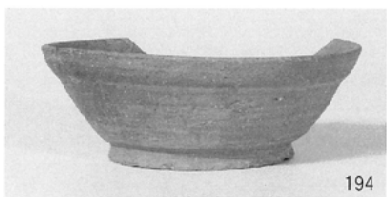
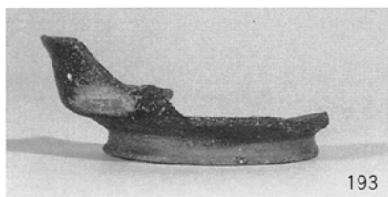


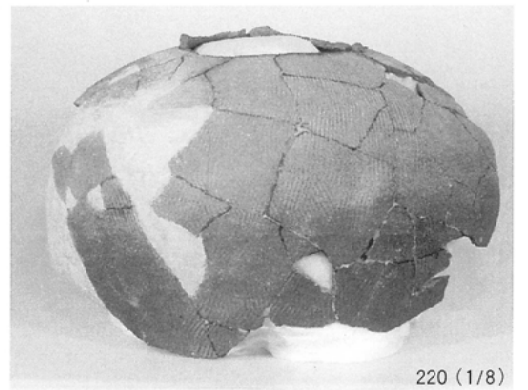
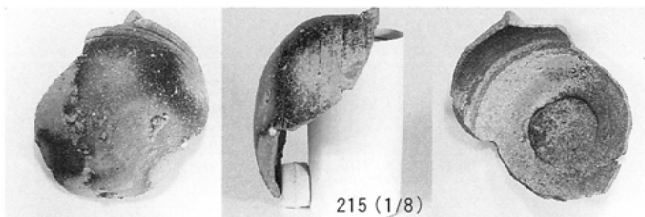
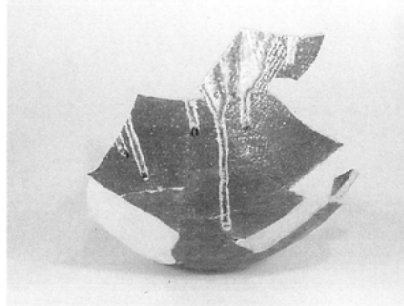
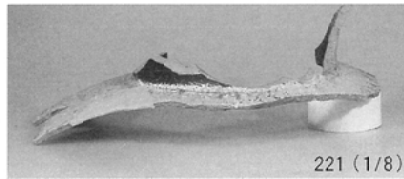
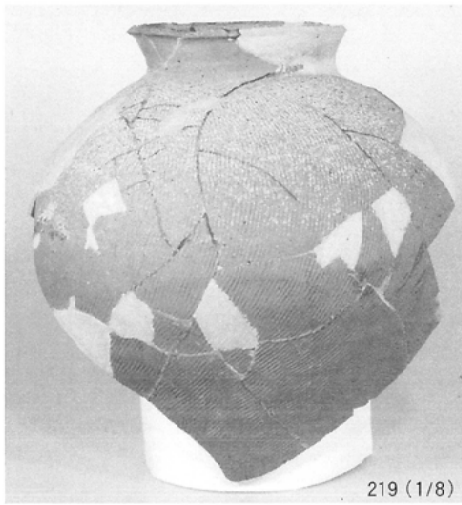
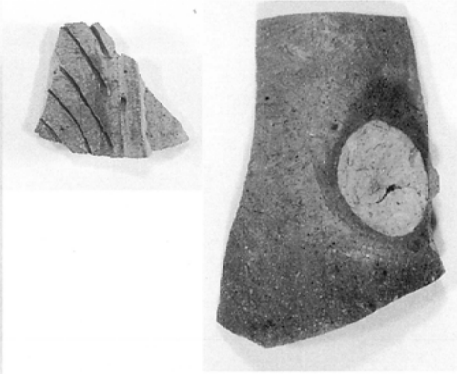
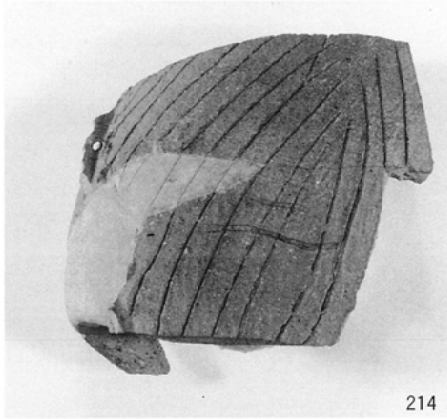
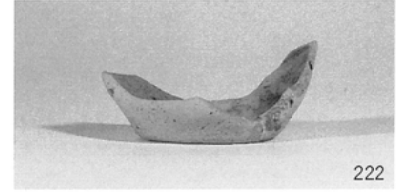
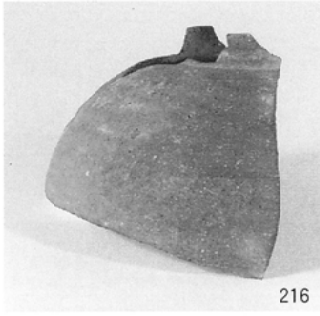


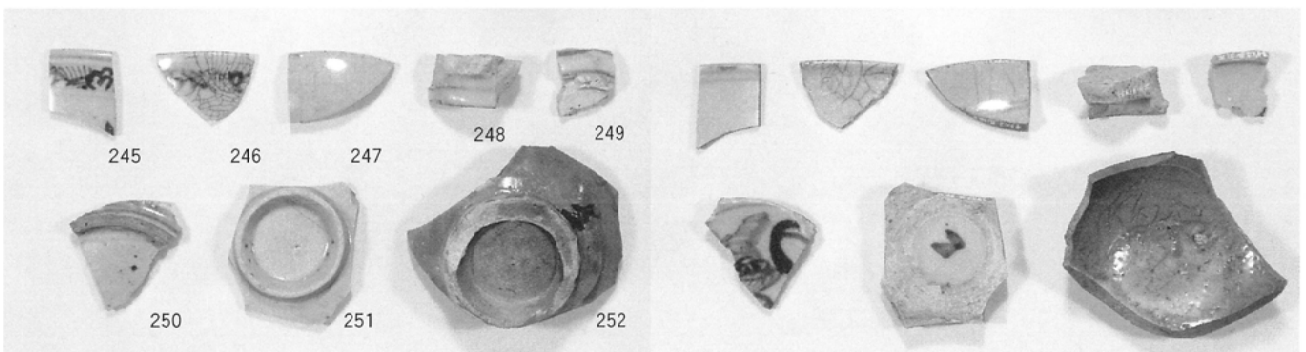
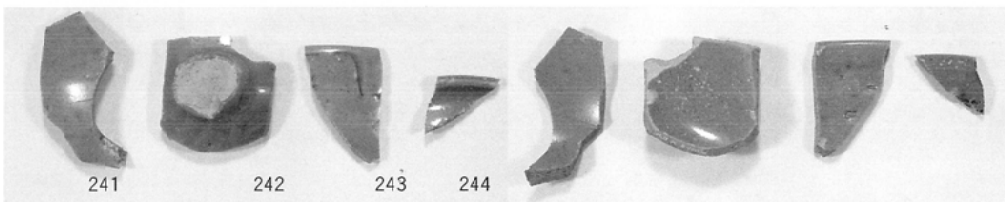
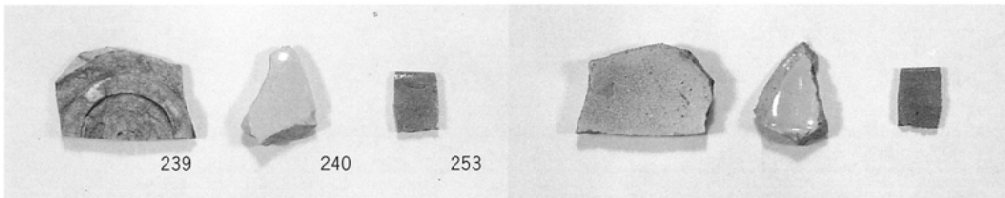
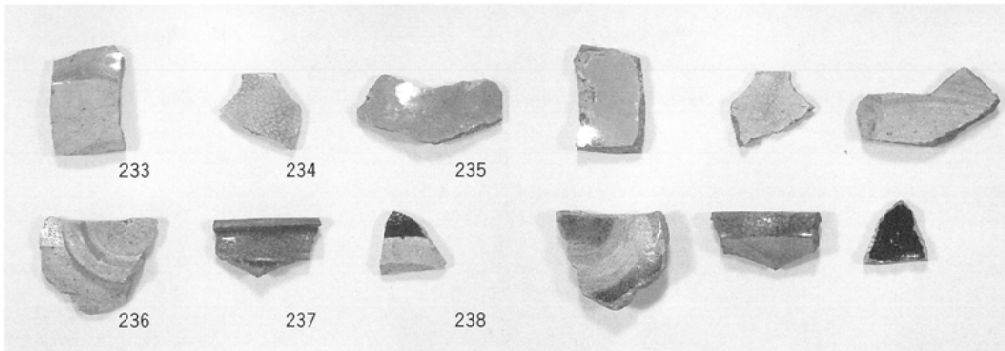
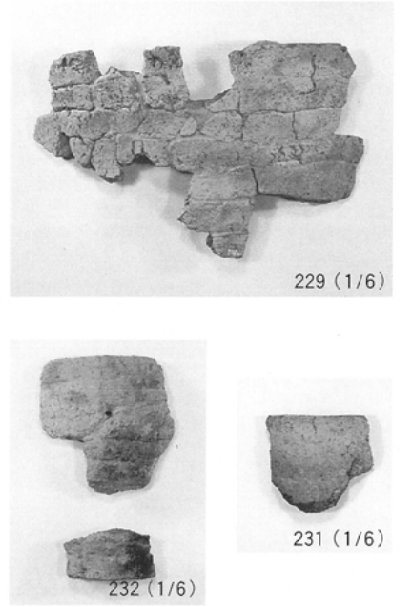
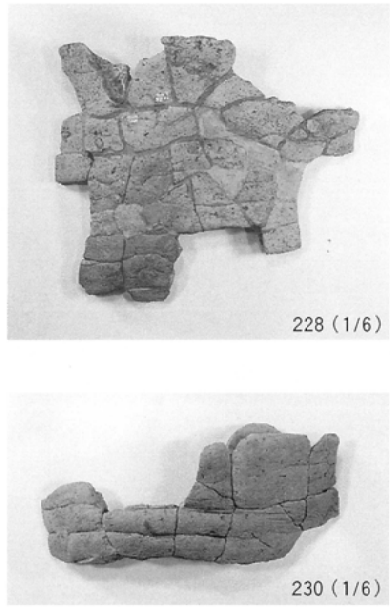
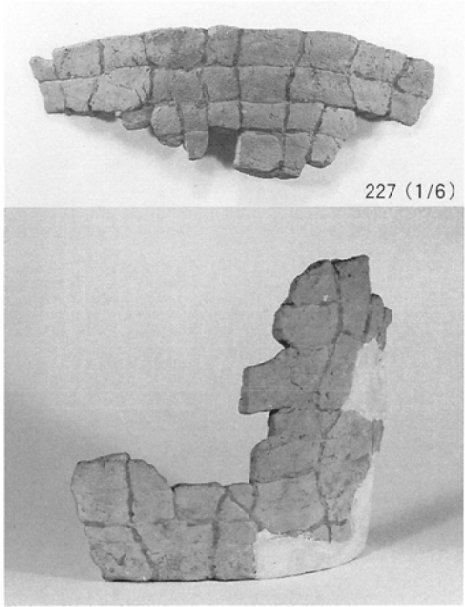


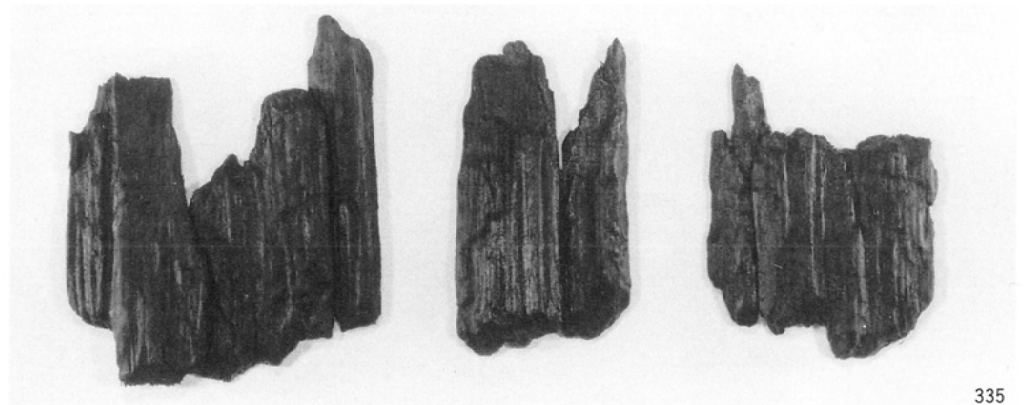
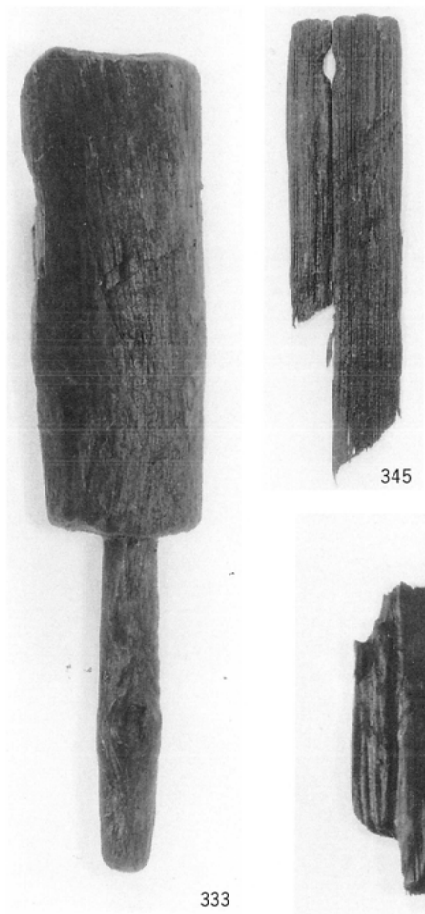
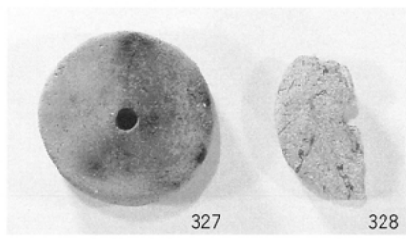
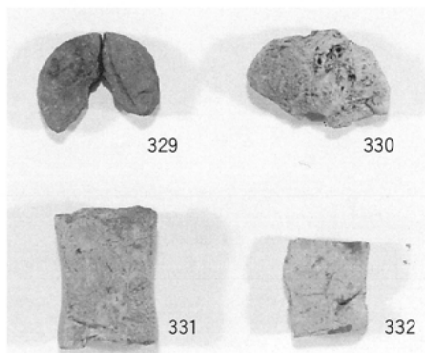
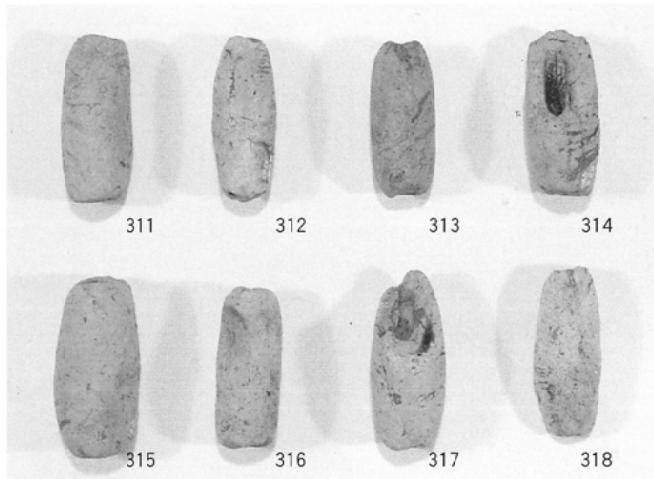
图版 18

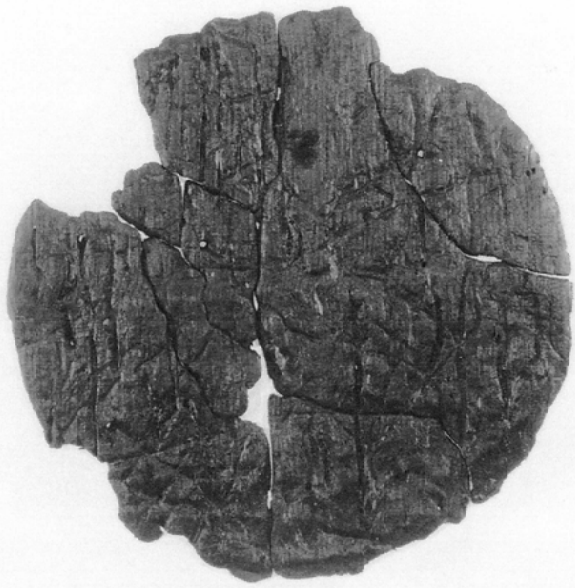












336



337



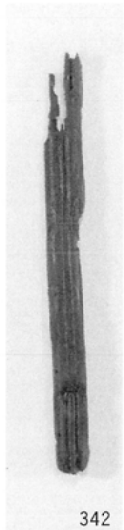
349



340



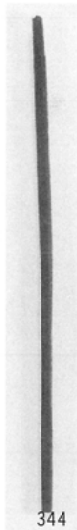
341



342



343



344



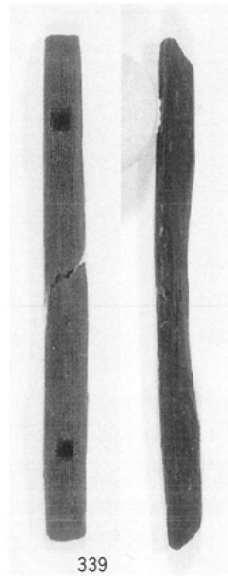
346



347



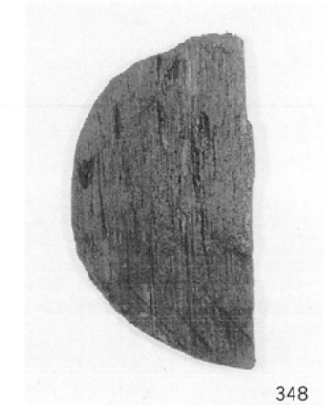
352



339



350



348



351



353



354



355



356



357



358



359



360



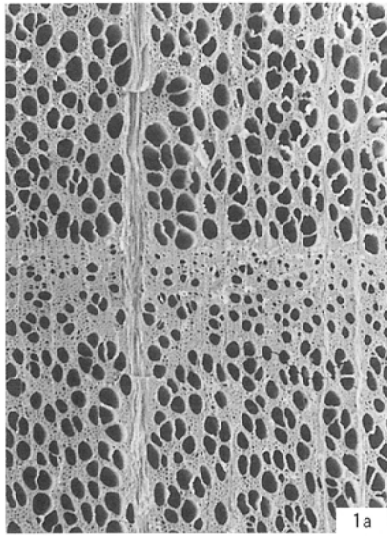
361



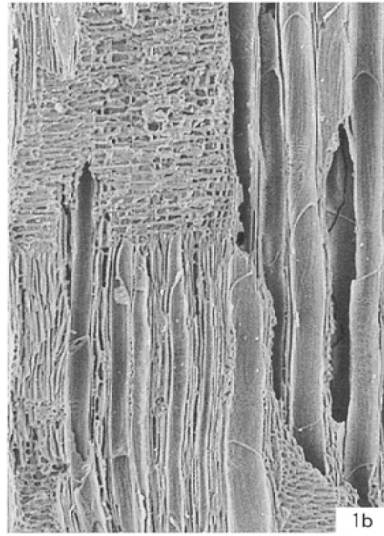
362



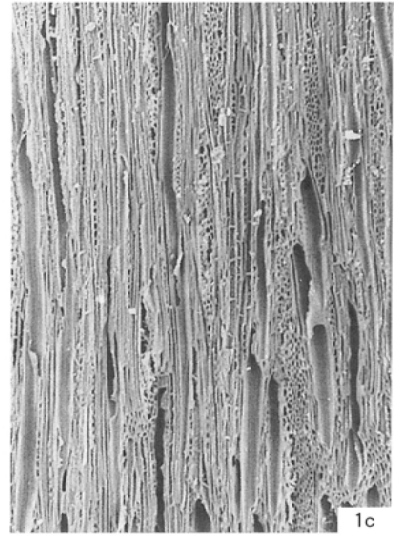
363



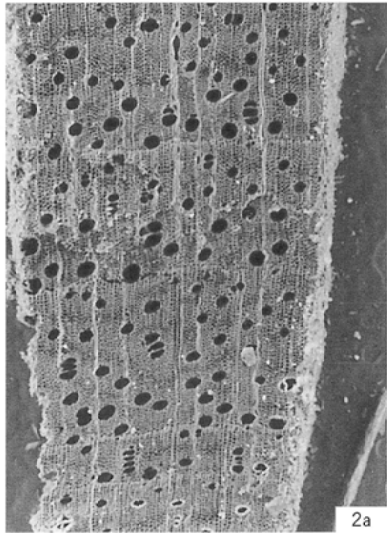
1a



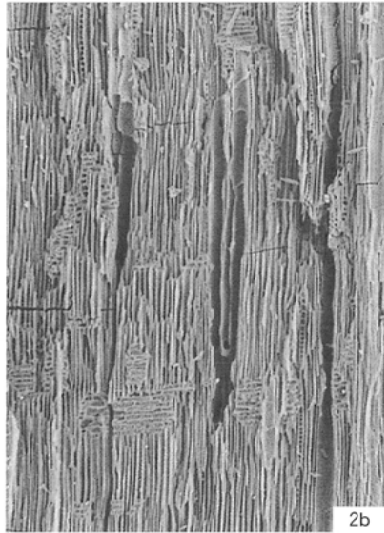
1b



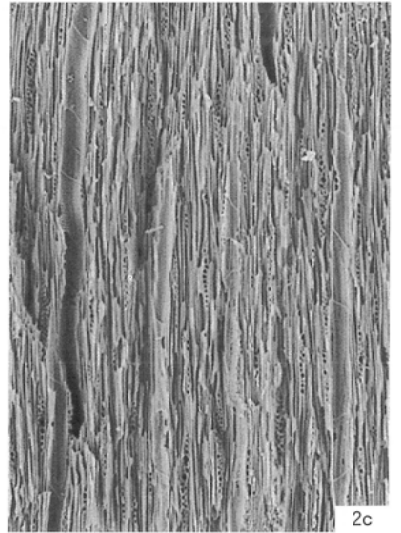
1c



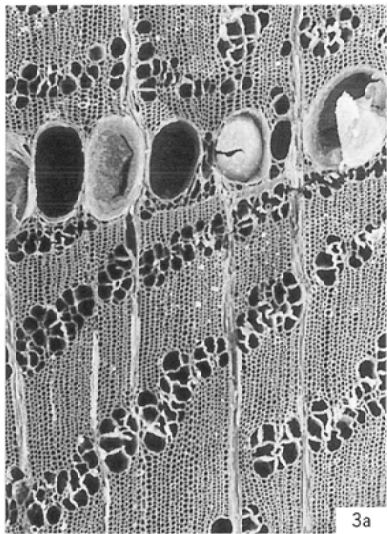
2a



2b



2c



3a



3b



3c

1. ブナ属 (試料番号1)
 2. カエデ属 (試料番号2)
 3. ハリギリ (試料番号1)
- a : 木口, b : 柁目, c : 板目

200 μm : a
200 μm : b, c

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第56集

きためながた
北目長田遺跡第3次発掘調査報告書

1998年3月31日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号
電話 023-672-5301
印刷 大場印刷株式会社
